

『産官学民の生涯学習ネットワーク 構築による地域形成の推進方策の研究』

平成 23 年度神戸学院大学人文学部研究推進費

研究成果報告書

平成 24 年 3 月

研究代表者：今 西 幸 藏（神戸学院大学人文学部教授）

はじめに

今 西 幸 蔵

文頭から辛い話であるが、昨年3月、東日本において未曾有の災害というべき地震、津波そして原発事故が起こった。自然の脅威を改めて感じる出来事であったし、被害を受けられた方々のことを考えると、当初は言葉を失ったというのが正直な気持ちである。その後、時間の経緯につれて、励ましの言葉が出るようになったし、お悔やみの言葉を差し上げれるようになってしまった。もちろんのこと、言葉だけで済ませられる話ではない。我が神戸学院大学からも、大勢の若者が現地に救援活動、災害ボランティア活動に参加している。教員にも体を張って頑張った先生がいることも知っている。体力に自信の無い筆者には、救援カンパを提供するか、励ましのお手紙を出す以外には術がなかったが、無念の気持ちは共有しているつもりである。

本研究報告書の冒頭にこうしたことを書き綴ったことには、私なりに悲しい気持ちとは別に残念な思いもあったことを述べておきたい。それは2009年度から、本学人文学部研究推進費の補助を受けて、日本における成人学習の現状の実証的分析に取り組んできた研究を、今回の震災で中途挫折せざるを得ない状況が生まれたということである。この研究は、成人学習の今後のあり方や進め方を明らかにすることを目的としたものであり、これまで全国の自治体が取り組んで来た市民大学の実態を分析することによって、成人学習に関わる現状を評価しようとする試みであった。3年間の研究計画の2年度が終わろうとする寸前に震災が訪れた。結果として、2011年度に実施予定だった研究計画を白紙にせざるを得なくなってしまった。

大災害という事態の発生があり、日本で、同じように暮らしている人々が苦悩しているときに、そういう人々を対象とするような研究を続行する無神経さは、私は持ち合わせてはいない。

いま私たちにできることは、生きている人々が幸せを感じるような社会をどうつくっていくかという方策を考えることであり、行動することにほかならない。学問研究の成果がたとえ遅延になっても、それは仕方が無いことだと思うからである。

そこで、本学人文学部による研究推進費という補助をいただきて、2011年度のみの単年度研究であるが、生涯学習の機能を活用した地域形成に関わる実践事例の研究を実施した。生涯学習に関する地域形成については、1987（昭和62）年当時に、国の臨時教育審議会による第三次答申が「生涯学習を進めるまちづくり」を提唱しており、その後の生涯学習政策の重点事項として展開してきているといった経緯がある。「生涯学習のまちづくり」として、「まちづくり」という地域形成方策と、生涯学習機能との関連の中で理解されてきた事柄である。

東日本大震災後、人間同士の「絆」の大切さや「コミュニティ」の重要さを指摘する声が強い。ソフト面での地域形成（まちづくり）が、どれだけ人間を励まし、勇気づけ、生きる意欲を与えたか、ひいては地域を活性化してきたかについては、これまでの「生涯学習まちづくり活動」の中で実証済みである。

今回の研究では、生涯学習まちづくりの理念のもとに、これまでから実践と実証に関わった研究者とともに研究を進めた。こうした研究者は、各地のまちづくりの第一線に立っておられる方々ばかりである。現時点での、それぞれの地域の実態を報告していただき、それをまとめた冊子が本報告書である。本報告書が、今後において地域形成を考える上で極めて重要な示唆を与えるものと考えている。こうした報告ができるのも、本学人文学部の教職員の支援があったからこそであり、深く御礼の言葉を述べておきたい。

最後に、2011年度における研究組織のメンバーをあげ、情報提供と研究報告という研究活動への貢献に感謝することとしたい。

2011年度 研究組織

今西 幸蔵（神戸学院大学人文学部、研究代表者）
垣淵 浩子（和歌山県みなべ町）
黒田 俊彦（福岡県福津市）
佐藤 理恵（京都府亀岡市）
重岡利栄子（福岡県芦屋町）
鳥山 健（大阪府大阪狭山市）
長野 文昭（和歌山県上富田町）
2012年3月

目 次

はじめに 今西 幸蔵

第1章 市民協働によるまちづくりの一方法（大阪狭山市） 鳥山 健

1. 実行委員会発足とその背景.....	1
2. 実行委員会活動の現状.....	9
3. 実行委員会の課題.....	22
4. 後記.....	26

第2章 歴史的遺産と魅力あるボランティアを活かしたまちづくり 重岡利栄子

1. 町の状況と特性.....	30
2. 芦屋町の歴史と歴史的遺産を活かしたまちづくり.....	31
3. 魅力的なボランティア活動でまちづくり.....	32
4. 行政、地域、学校一体のまちづくり.....	33
5. 今後の課題.....	34

第3章 地域に貢献し地域とともに歩む『開かれた学校』づくりをめざして 長野 文昭

1. 学校・地域の概要.....	35
2. 南白浜小学校の目指す『開かれた学校』づくり.....	35
3. きのくに共育コミュニティ推進事業.....	36
4. 市民性を育てるランドマーク事業.....	36
5. おわりに.....	37

第4章 京都・亀岡 町家を繋ぎ生れたもの 佐藤 理恵

はじめに	39
1. 亀岡市の概要.....	39
2. 亀岡駅周辺地区まちづくり協議会.....	40
3. 城下町の町家を残す.....	40
4. 本町町家ショップ.....	40
終わりに	41

第5章 福津市型地域づくりの課題と解決策に関する考察

黒田 俊彦

1. 福津市の概要	42
2. 生涯学習による地域づくり活動等の変遷	43
3. 福津市の地域づくりの現状	44
4. 地域づくり活動の原動力は	45
5. 地域づくりは「信頼関係づくり」	46

第6章 梅の里みなべ町

垣淵 浩子

1. みなべ町の位置と地勢	48
2. みなべ町のあゆみ	48
3. みなべ町の資源	49
4. 高齢化、障害者への対応として	51
5. まちづくりの展望と今後の問題	52

第7章 生涯学習まちづくり考

今西 幸蔵

1. 「地方の時代」とコミュニティ形成	53
2. 生涯学習まちづくりに関わる行政施策	53
3. 生涯学習まちづくりの意義	54
4. 「生涯学習宣言都市かけがわ」に見るまちづくり	56
5. 「生涯学習宣言都市やしお」に見るまちづくり	57
6. 「生涯学習宣言都市亀岡」に見るまちづくり	58
7. 「生涯学習まちづくりプラットフォーム」の形成	59

第1章 市民協働による まちづくりの一方法（大阪狭山市）

鳥 山 健

狭山池まつり実行委員会 初代事務局長（現・補佐）
大阪狭山市都市間市民交流協会 初代会長（現・理事）

本稿は 2001（平成 13）年から 2007（平成 19）年を期間とし、実行委員各人の想いや行動の集積を記録する形で 2007 年 3 月 28 日まとめ、2012 年 1 月 23 日文体修正及び加筆したものである。

大阪府の南部に位置する大阪狭山市の人口は、現在約 58000 人。行政職員数 451 名、NPO 法人 18、各種市民団体が大小 130 余あるといわれている。同市の公益的市民活動の成果として、また行政との協働関係構築の成功事例として評価されるものに「狭山池まつり」がある。新しい都市型の地域まつりの発足と現状、そして課題について考えてみる。

地方分権一括法が 2000（平成 12）年に施行され、大阪狭山市の第三次総合計画が発表されたのは 2001（平成 13）年。第三次総合計画には、「パートナーシップ」の文字が各所に記されるものの、市民協働（官民協働）の概念は 2002（平成 14）年 6 月の「大阪狭山市市民公益活動促進条例」の制定並びに同年 8 月「市民公益活動促進委員会」の発足を待つことになる。

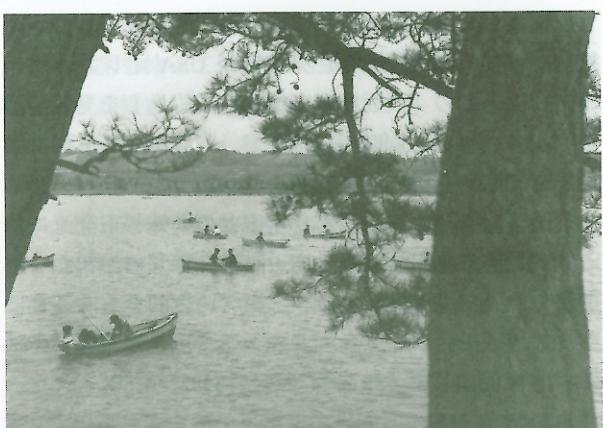
ここで報告する「狭山池まつり実行委員会」（以下 実行委員会）は、2001（平成 13）年 8 月、市民自らが発案し、準備委員会を設立したことに始まる。市民のシンボルである「狭山池」を舞台に、新旧住民が举って参加・参画する晴れの「狭山池まつり」と、年間を通じての地道な「通年事業」を組み合わせた循環型活動が、この実行委員会の特徴である。まつりによって山を高くし、日常活動を通して谷を浅くすることで、行政各部署とのコミュニケーションを深め続けてきた。5 年余りを経過した実行委員会活動は、組織として市民協働（官民協働）を具現化しつつ、委員各々の意識にも、まちづくりへの貢献や学びと言った変化が起り始めている。

その後も 2009（平成 21）年に大阪府・大阪狭山市と「大阪府立狭山池博物館」の三者協働運営委員会を設立。初年度に来館者 10 万人の達成・ボランティア企画展「河内木綿展」の開催・賑わい創出事業として屋上ガーデンの提案ほか、博物館ボランティア等の中間支援機能も發揮して、積極的に市民協働のまちづくりに関わり続けている。

1. 実行委員会発足とその背景

大阪狭山市のほぼ中央に、かつて周囲一里といわれた「狭山池」がある。古事記・日本書紀にその名を残す人の手によって創られた、日本最古のダム式灌漑用ため池である。発掘された樋管がコウヤマキであったことから、年輪年代測定法により築堤は 616 年とされ、飛鳥の時代より悠久の歳月を下流域に潤いの恵みを与え続けてきた。

また「狭山池」は、大阪府下第 2 位の広さを持つとともに、昭和 30 年には大阪府の史蹟名勝第一号に指定されている。春には、池面に豊かな枝をかざして桜が咲き乱れ、各地区の隣組が打ち揃って花見に興じ、夏には、



昔の狭山池

さやま遊園地（平成 12 年閉園）の貸しボートで涼をとるカップルを見ながら北堤を歩くと、松の木陰を風がすり抜ける四季を通じて風光明媚な池であった。1964（昭和 39）年の旱魃では、「狭山池」が干上がり、たくさんの魚が死んで悪臭が学校や町を覆い尽くし、水道は止まり、飲み水を得るために給水車に並ぶ日が続いたと記録されている。このように「狭山池」は、上流下流の地域を問わず、住民の生活の真ん中にある「へそ」のような存在であり、地域のシンボルであった。

しかし、1982（昭和 57）年の豪雨で、西除川中下流域に 3,000 戸以上の浸水被害が起こったため、1988（昭和 63）年に、古来からの水利機能に加え、洪水調整機能を備えた「平成の大改修」が始まり、「狭山池」は市民と隔絶する工事壁に覆われ 14 年余りの歳月が流れた。

2001（平成 13）年に、ダム本体及び建築家安藤忠雄氏の設計による大阪府立狭山池博物館が完成。山間のダムとは異なり、平地にある都市型ダムであることから、堤に周遊歩道が整備され、2002（平成 14 年）4 月に「狭山池公園」として市民に開放された。

しかし、14 年余りの歳月はあまりに永く、狭山で生まれた中学生でさえ「狭山池」は地域のシンボルと言うよりは工事現場であり、まちの都市化の進展とは裏腹に地域コミュニティが希薄になり始めていた。近郊都市化した地域では、新旧住民の交流不足が言われ、行政では行財政改革、そして学校では地域に子供を帰す「学校週 5 日制」の完全実施を目前に控えていた。

1-2 小さな『市民の核』が生まれた

大阪狭山市都市間市民交流協会の設立

そのような中、大阪狭山市では 2000（平成 12）年、水の郷百選に共に選ばれた和歌山県日高川郡美山村（現日高川町）と、友好都市提携を結ぶ。行政内では、スクラップ＆ビルトが進められていたこともあり、1973（昭和 48）年以来、27 年の歴史を持つ USA オレゴン州オンタリオ市との「大阪狭山市姉妹都市協会」を発展解消し、2001（平成 13 年）6 月 29 日、「大阪狭山市都市間市民交流協会」（以下、市民交流協会）が設立された。

市民交流協会は、オンタリオ市との姉妹都市交流に加え、友好都市美山村（現日高川町）をはじめ、新たな都市との市民交流を促進する等、幅広い目的をもつことになり、地区長会・商工会・老人クラブ連合会・青年会議所・PTA 連絡協議会・ライオンズクラブ・ロータリークラブなど、13 の団体代表と市民で構成されていた。

設立総会後、同会場において理事会を開催。姉妹・友好都市をはじめ新たな都市との交流についての具体的な審議を始め、奥平将貴・溝端淳史を含む若手理事のチー

ムを作った。

その検討の中で、大阪狭山市は他市に比べ地場名産も限られ、「狭山池」以外に名高い名所旧跡もないことが話題となった。PTA に所属する理事からは、地域コミュニティが希薄になり始めている中、学校では地域に子供を帰す「学校週 5 日制」の完全実施を目前に控えていることが提示された。また他市へ出張を重ねる理事からは、人間関係を構築するには、自分のことや自分のまちのことが重要な話題になる、まち同士の交流も同じだと指摘があった。

人は他者の存在で、自らの存在の意味を知るといわれる。他の地域と交流することで、お互いの違いに気付き、故郷の歴史や文化を振り返るようになる。そのような気付きの人々が増え、お互いを認め合い繋がることで、ひとが育ち、まちが育っていくのではないか。市民交流協会の最終目標とするところは、まちづくりへの貢献である。

また「市民主役のまちづくり」等の言葉はよく使われるが、具体的に達成するための方策が、行政からも何処からも出されていないことも判った。条例や施策によるまちづくりに加え、それを実効性のあるまちづくりに繋げることが、今最も必要とされているのではないか？議会と行政の役割の間に、市民生活に活かすという活動がブラックホールのようにポカンと空いている。ここを埋めなければならない。

バブル経済の終焉のあと、私たちの周りには課題・問題が噴出し、ともすれば誰もが俯き元気を失っているようを感じる。課題や問題を解決していくには、みんなが元気に明るくならなければいけない。

そのためには、まず市民を繋ぎ、自主的な市民の数を増やしていくことから、始められなければならないのではないか？

自動車のハンドルに遊びがあるように、市民の一人一人の生活の中で、ほんの 5%（一ヶ月で一日、一年で十八日）公共に目を向け、公共にボランティアをする。大仰なことでなくとも、一人ひとりそれぞれができることをするだけでよい。そして、活動を通じてまちに関心を持ち始めればよい。そんなムードを、まちの中に育てていくことが、大事なのではないか？

アイデンティティ、ローカル・アイデンティティという言葉が、会議の中で幾度も出た。

そして会議の後で、市民交流協会の担当市職員楠喜博に相談したところ、2002（平成 14）年の春に、狭山池の「平成の大改修」が終わるとの情報が寄せられたのである。

楠は以前から、筆者が「新しいまつり」を興している

ことを知っていた。1985（昭和60）年、来場600人規模の「夏祭り」を開催したのが初めてである。狭山ニュータウンの商業仲間だった山本勉が、顧客へのお礼として何かできないか？と、相談を持ちかけたのが始まりであった。商工会青年部活動での経験から「夜店」なら費用もかからず、3人の店のスタッフでも可能だと答え、実施することが決まった。当日は、菅野敏男青年部長はじめ数人のメンバーが応援に駆けつけてくれた。そしてこの「夏祭り」が役員の目に留まり、翌年からは、テナント事業として核店舗の西友を巻き込み、1993（平成5）年まで続いた。

その後1994（平成6）年には、狭山ニュータウン商業ゾーン（3団体）で再構成、名称も「狭山ニュータウンふれあい祭」となった。事業拡大に伴い、事業目的も顧客サービスだけでなく公共性を付加、ニュータウン（1967年／昭和42年開発）に住む人々にとって「第2のふるさとづくり」を目指した。資金面では3団体による拠出金以外に、市商工会西田耕一事務局長の指導協力で、大阪府の賑わい活性助成金を得ることができた。またボーイスカウトなど地元の団体と協力することも始まったのである。そして、2001（平成13）年まで、10,000人規模のまつりとして続いた。

また1998（平成10）年、池尻地区では狭山駅前ロータリーが完成したこと、完成披露と子どもの交通安全、そして地域活性を目的に「狭山駅前ふれあいまつり」を実施。地元事業所や関連企業から協賛金を集め、市には駅前ロータリーの完成を理由に後援を取り付けた。地元商業者に婦人会やこども会・青年会・消防団も参画、市商工会青年部のメンバーも地域を越えて協力に駆けつけてくれた。事業終了後の報告会で、事業残金を損耗した道路のグリーンベルト修復に充てることを決め、市役所と交渉。結果は、道路工事については危険がともなうことから、住民で行うことは却下、市職員によって修復されたため、その事業残金は地元青年会の「夏祭り」に寄付をした。

これらの経験は、筆者にとって「まつりのプロトタイプ」になったように思う。おそらく楠は、これらのことが頭にあったのではないか（？）「大変なことに挑むことになるが、協力してくれるか？」と楠に質した。

1-3 最初のボタン

早速、市民交流協会の四役会を開いた。副会長住本尚志・会計高野茂喜・事務局長柴田忠克・会計補佐西田耕一に「人と人の交流を、市民レベルで実現する協会でありたい。来春、狭山池の工事が終了する。概略を立案するので、進めてよいだろうか？」と提案すると、全員が

快諾。そして、当時楠の上司であった中井新子人権広報課長・猿渡忠廣課長代理にも、市補助金申請の窓口になって欲しいこと、郵便物の送り先としての協力等を要請し承諾を得た。

そして日をおかず7月理事会を開催。交流協会として種々の事業を予定しているが、まちや市民のアイデンティティを創ることが先決であり、市民のシンボルである「狭山池」が帰ってくるこの機会に、「狭山池を舞台に、まち全体のまつり」を創ろう。時間はないがこの機を逃してはならないと話し合い、満場一致の賛同を得たのである。

さらに合意の項目を整理し①市民交流協会が隣であることから、理事の半数以上が率先して参画すること ②幸いにも地区長会会長等を歴任していた中辻茂理事に準備委員会の委員長の内諾をお願いし、発案者である筆者が準備事務を引き受けること ③開催までの準備費用については市民交流協会が負担し、以後も積極的に協力すること ④若手理事古谷裕子から提案のあった「持ち込み企画」は、狭山池で行う事業で募集すること ⑤狭山池が全市民のシンボルであることから、市民交流協会単独の事業ではなく、各地区で活動している意欲のある人を集めて準備委員会を設立すること など基本方針を決めた。

1-4 準備委員会の設立

まず「仮称狭山池フェスタ 素案」（8ページ）を作成し、狭山池の改修工事を管轄する大阪府土木部河川室を楠と二人で訪問。供用開始の予定を尋ねると共に、まつり開催と木々の植栽・清掃活動など、年間を通じての活動計画案を提案し、北田隆久課長に後援の打診。萩田英誠総括主査から、堤に杭を打ってはいけない、直火をしてはいけない等、幾つかの説明と制約は受けたが総論としては理解を得ることができた。

この内諾を持って、市行政内の少ない知己であった宮崎順介と高橋安紘に、干潟の使用についてどこに相談をすればよいのか？ 狹山池周辺整備は、どのようになるのか？ などを教えていただき、それらの事前情報を元に、市行政に実行委員会を設立する旨を説明したところ、供用開始はいずれ込み4月末頃になるのではないか、との返事を受けて、7月末には、「狭山池でまつりを興そう」と呼びかけを始めたのである。

商工会青年部で共に活動した松川元英・山村歳幸・辻寛文・西澤友成、PTA連絡協議会で共に活動した井上芳光・松本善造・西脇正美、青年会議所OBの松原一弘・溝端功、生涯学習審議会等で知己を得た武田博允、武田の紹介で多賀慶子、社会教育委員の時に知り合った



狹山池（改修前）

青少年指導員会会長の松本節子、松本の紹介で内藤良治・三木幹久、今谷満里子、津田修作、市行政職員の楠喜博・高林正啓など、一人一人に会って「狹山の贋を取り戻そう」と訴えた。

商工会青年部メンバーは、自分たちの培ってきた「大阪狹山市民バザール＆消費者感謝デー」等の活動は、すべてこのためにあったのだ。いつかは、「狹山池」を舞台に何か事業をしたいと思っていた。夢のような話だと、と賛同してくれた。武田は、大阪狹山市が国体のバスケットの担当市になった時、手土産になるものはないし、見学コースも立案できずに情けない思いをした。岸和田のだんじりではないが誇れる何かを作り上げたい、と思いを打ち明けてくれた。そして、一緒に創ろうとエールを贈ってくれたのである。「狹山池は、贋」との言葉に、青年会議所OBの松原は、自分もそう思っていた。自分は青年会議所現役時に「街愛室構想」を掲げたのだと、賛同してくれた。市職員の高林は、「祭りは政事やまちづくりに通じる、やろう」と言ってくれた。その結果、市民交流協会の理事（中辻茂・奥平将貴・溝端淳史・道下哲史・田中秀良・岡田恒子・古谷裕子・米田伸次）を含め、17の地区から27名が集まつたのである。

8月9日、27人による準備委員会（委員長 中辻茂）が設立され、「仮称狹山池フェスタ 素案」と、公募された34の持込企画案をもとに、4ヶ月に亘って準備委員会の原案作りが行われた。メンバーが自発的に集まり、楽しくなければ意味がないと申し合わせ、3チームに分かれて、それぞれの素案を作成、最終的に3チーム案のコンペをする方法をとることになった。

第一回の準備委員会の2週間後には、工事中の狹山池の実地検分を実施。大きく姿を変えた狹山池を見て、メンバーの思いに火がついたようであった。チーム会議をのべ5回行い、準備委員会は、市役所の大会議室で3チーム（チームリーダー a：道下哲史、b：溝端淳史、c：

山村歳幸）に分かれ討議。進行状況を全員で確認して、次回の会議までに各自の意見をまとめた。また、民俗学を専攻し平成の改修にも携わった生涯学習推進課市川秀之（現 滋賀県立大学教授）に、狹山池の歴史と龍神にまつわる「龍神淵」や伝説の話を伺った。

1-5 みんなの想いが弾け、つながり始めた

準備委員会の様子を少しご紹介しよう。

PTA事業で実施している、体育館でのキャンドルサービスを、狹山池でできないだろうか？ そりや、無理だろう、周囲一里の「狹山池」だぜ。ろうそくが何本いる？ 人間だけでも、半端じゃないし。でも「へそまつり」をするんだ。「へそ」と言うと、あまり綺麗なイメージが湧かないけれど、子どもが生まれて毎年その誕生を祝う。そう、誕生会のように「狹山池」の再誕生をお祝いするつもりでやればいい。「在る」ことが、大事なんだ。子どもの誕生会だって、そうじゃないか。生きている、育っている、だから歳の数だけろうそくを吹き消すんだろう。13歳になる今の中学生ですら「狹山池」に愛着を持っていない、工事現場だったから仕方ないけど、小学生なら尚更だ。子ども達に「狹山池」は、こんな形をしているんだぞ、こんなに皆が大切に思っているんだぞって、原風景を創ってやろうよ。腹の真ん中に、胸の奥にしっかりと焼きつく、ふるさとの原風景を創ってやろうよ。そしたら、どこででも生きられるし、きっと帰ってくる。周囲一里の「狹山池」が、ろうそくの輪で浮かび上がる、すごいよ。家族のコミュニケーションが少なくなったと言われる昨今、親子で一緒に灯火台を作るのは、学校週5日制にも合致するんじゃないかな。地区で灯火台の作り方教室を開いて、地区的高齢者と子どもが交流するのもいいかも。でも、一回目から完全形を見せるのか？ イベントになってしまわないか？ 一回目は数百の持ち寄りで、少しづつ完全形に近づいた方が良いのではないか？ それは、だめだ。完全形を見せて、イメージを共有しないと、次はない。喧々諤々、お互いが譲り合わない想いのぶつかりが続いた。

秋祭りの地車を、狹山池堤に集合させられないか？ そりや、壯觀だね。連合の役員さんを知っているけど。でも、池のまつりは春で、だんじりは秋やろ。みんな集まってくれるか？ コマ代など結構費用もかかるし、それよりこここのメンバーの半分がだんじりに抜けたら、池のまつりの面倒は誰が見る？ ちょっと抜けるでは、すまへんし。それに聞いたところでは、堤の周回路はジョギングや散歩に適したカラー舗装らしいで。地車が曳行したら、舗装が目茶苦茶になるんちゃうか？ そりや許可下りんで。というて、道路側に集合させたら、池のま



狭山池（改修後）

つりと二分するし、道路占用許可も結構しんどい話になる。池のまつりに来る車が、地車の集合と真っ向ぶつかるもんなあ。残念やけど、地車連合会が「よし、やつたる」と言うまで、待つとこ。今は、無理や。

学校週5日制を控えたPTA関係者は子ども達のために、地区や自治会活動に関わっているメンバーは地域コミュニティの再構築を、青少年指導員はじめ社会教育メンバーは、文化の振興や青少年の健全育成について、それぞれの思いを込めていたに違いありません。特に商工会メンバーは、地域の中において経済活動だけでなく、消防団やPTA・防犯委員・コミュニティづくりなど様々な活動に携わっている。その情報網と人脈、十数年に亘って市内最大のまつりに育て上げてきた「大阪狭山市民バザール＆消費者感謝デー」事業で培ったノウハウのすべてを、この原案作りに提供してくれた。

まつりの趣意文作成でも、喧々諤々の議論が起こった。地元で生まれ「狭山池」とともに育ってきたメンバーと、都市化の進展の中で狭山に移り住んだメンバーの「思いにずれ」が起こったのだ。地元で生まれたメンバーは、取水塔から飛び込んで泳いだり、魚の腐ったあの臭いや、給水車に水をもらった経験がある。そして、移り住んだメンバーも30年という歳月から「第2の故郷」として、地元生まれのメンバー以上ともいえる愛着を抱いていた。そこで「狭山池」そのものが、中国・半島からの技術が生かされ、江戸時代には愛知県知多半島の黒鉄組によって改修されていることを引き合い、このまつりも生まれ育った者と移り住んだ者が一緒になって創りあげることにしようと、幾度も校正を繰り返し、準備委員会の最終日になってようやく、過去を尊び現在そして未来に向けての趣意文が採決されたのである。

そして、自分たちの活動目的を、①15年ぶりに私たち市民のもとに帰ってくる「狭山池」を、市民のシンボ

ルとして再発見し水との共生をもう一度考えよう ②わが街の歴史・文化の共有 ③ひとつくり・まちづくり ④青少年の健全育成 ⑤市民・経済活動の活性化 とまとめた。

また、第一回のキャッチコピーとなった「お帰りなさい狭山池」は、松原一弘の口からこぼれた「お帰りなさい大阪狭山市」「お帰りなさい自分」と、イメージが重なったのではないだろうか？全員の賛同を得て「お帰りなさい狭山池」を合言葉として、市民の手による「狭山池まつり」を立ち上げようと決めたのである。

1-6 狹山池まつり実行委員会の設立

各地区から集まった27名による「準備委員会の原案」(14ページ)は、10月末に出来上がった。しかし、「狭山池」は冒頭述べたように全市民のシンボルである。全市民の協力無くして、まつりの成功はありません。まつりの成功とは、前述した5つの目標の達成もある。

そのために全市民の参画を促すべく団体の偏りを避け、当時行政に登録されていた市内66の各種団体に呼びかけを行い、平行して、準備委員各自がそれぞれの人脈を通じて、宮崎俊三・高山明弘・西尾菜穂子・住本尚志・柴田忠克・高野茂喜・井上洋子・田外治子・福井喜久男・松野功・宮崎高夫・西脇義治・市川孝・鳥山浩史・木下茂男・上野正和・田原敏孝・前田嘉昭・森田亜也子・小谷嘉博・井出俊一・野村輝男・溝端利信・芝田篤・古城和則・藤井則行・伊熊広至などに実行委員会への参画依頼に奔走。同年11月22日、趣旨に賛同した団体・市民110名が集まり、「狭山池まつり実行委員会」が誕生したのである。

第一回実行委員会では、会則並びに以下の役員が決まった。会長（中辻茂）副会長（溝端保令）会計（西田耕一・西澤友成・津田修作・田中秀良）事務局長（鳥山健）監査（松本善造・西脇正美）。そして「狭山池まつり」の開催日を供用開始日に決定。準備委員会の原案が承認され、各団体の所属する部会が決まった。また、各種団体と参画する市民が横断的に協力するために「Free・Fair・Open」の方針も了承を得た。

実行委員会の事業費用については、市の補助金の申請だけでは十分ではないため、市民・事業所協賛金を募ること。そして、市内での団体事業では初めて分担金・参加費負担の了承も得た。舞台出演者には舞台制作費の一部を参加費として負担を、市民団体の模擬店出店についても参加料の負担をお願いすることにした。そのため金銭管理については、事務局と会計を明確に分離し、会議毎に収支状況を報告することや、決算についてはホームページで発表することも決めた。金銭管理については、



狭山池まつりロゴ

最も注意が必要と考えたのである。

また、実行委員会組織としては異例の「まつりの開催」と、まつりを支える毎月の通年事業として「①狭山池清掃 ②桜を植えよう ③花を植えよう ④絵を描こう ⑤歩こう狭山池（案）」を行うことも承認された。前述した「狭山駅前ふれあいまつり」で学んだことが生きたのである。

一過性のまつりに、継続活動を組み合わせることで、実行委員会の目指す5つの目的は循環し、間違いなく浸透していく。「まつり」というアドバルーンを大きく高く掲げ、「活動」は緻密に広く深耕することで、巻き込める人はより多くなり、さらに携わるメンバーの士気は滅することができないと考えたのである。

ここに、市民発の企画立案、市内各種団体と市民が横一線に並んで、個人や各団体の特性を活かして協力する初めてのまつりが立ち上った。「平成の大改修」が大詰めに差し掛かっているとは言え、未だ工事壁で覆われた状況の中、実行委員会組織は動き出したのである。

1-7 実行委員会が直面した課題の数々

まず、課題となったのは事業費の捻出方法であった。会場となる「狭山池」は周囲 2.85 km にもかかわらず、当初設置されるトイレは2ヶ所。舞台となる施設もない。電源や水道そして下水施設も、ダム管理として必要最小限の設備だったからだ。

仮設舞台の設置や数箇所のレンタルトイレ・電源確保のために数百メートルに及ぶ電線が数本必要となるなど設備に 335 万円、安全管理にも 150 万円の費用が見込ま

れ、事業総額の見積もりは約 1,000 万円余りにのぼった。市内事業所や市民からの協賛金・事業収入に市補助金を目論むものの、市民提案による初めての大掛かりな企画であり、実行委員会の信用・担保はゼロの出発であった。

実行委員会といつても、酒屋や化粧品店などの自営業者や造園業者・会社員・定年退職者・主婦・学生などの集まりである。事務局も名ばかりで、着信専用のプリペイド携帯電話 2 台があるだけで、書類も各自の自宅で作るという有様であった。まつりまでに、各メンバーとの連絡に、数万円の携帯電話代を支払っていた実行委員が幾人もいたのである。

夜毎、実行委員会の趣旨を説明し広めるために、主要な団体の会合を訪問し、参画・協力を求める日が続いた。ある会合で説明の後「趣旨は分かった。しかし、開催資金はどうするのかね？」と問われ、「まず実行委員に募り、事業所や市民にも協賛金をお願いしていきます。市の補助金のお願いも現在行っております」と説明すると、「一番大事な開催資金の手当ては、まだか？ほんまに、実行委員会やな」と指摘された時は、返す言葉もなく虚空をみて、本当に大事なことを押さえずに進んできた、自分の不明を恥じ入った。

昼間は、仕事の合間を見つけては、行政の各部署に協力の依頼に奔走しなければならない。まずは後援依頼文の作成について相談。公園課には、占用許可申請と占用料の減免申請。水道局には、飲料水のタンク車の出動依頼。生活環境課には、ゴミ回収のパッカー車の依頼。総務部には、市役所駐車場の借用申請。秘書課や議会事務局には、市長・議長・市議会議員などへの来賓出席の依頼。総合体育館には、ハンドマイクや備品の借用。広報課には、市の広報誌への掲載依頼と原稿の提出。政策調整室とは、補助金や事業に係る相談など。社会福祉協議会には、車椅子の借用願。消防署には、救急車などの緊急車両の配備の依頼。大阪府のダム砂防課や、現地を監理する富田林土木事務所との打合せなど。日々、追われた。

そして、これらはすべて書面で依頼し、書面での回答をもらうのである。提出したと思っていた書類が、正式（？）な依頼文として受け取られていなかったり、口頭での了解では駄目だと後日分かって、一ヶ月もたって慌てて書類を提出したりすることが幾度もあった。当然のこととは言え、一市民にとっては、想像を絶する時間と労苦であった。自身の不勉強もあるが、行く先々で頭を下げ続け、何でこんなに頭を下げんなあかんのや、まるで「ペコペコ人形」やな、と自虐心に苛まれた日々であった。

市や教育委員会・大阪府の「後援」はついたが、「補助金」は行財政悪化の折、幾度も行政と掛け合うことになった。事前の相見積もりを取り、値段交渉を行い、安全確保を確認して予算案を見直す。しかし、市議会との調整もあるとのことで、歳が明けても、なかなか色よい返事が返ってこない。

そんな折り、2002（平成14）年1月11日の産経新聞の27面「2002年大阪白書37」と題されたコラムで、「狭山池・1400年の歴史遺産を受け継ぐ」と大きく掲載され、その中で将来の狭山池のビジョンについて、前副知事金盛弥氏が「地域の人々が水や池と親しくふれあう催しをしてほしい」と期待を表明されていたのである。大きな力添えを感じた。早速1月21日の実行委員会で、新聞記事のコピーを見せると、会場はワッと元気づいた。「狭山池土地改良区50周年記念誌」を読み、資料編の中に、筆者の祖父兵吉の名前を見つけたことも元気をもらった。

市補助金については、やっと1月末になって、投資的経費という科目から出そうだ、と中井新子課長から耳打ちされた時の安堵感と感激は忘れられない。市民自らが結束して、全市的な事業を興した前例がない、全市的な事業は市役所が行うものであった。しかし、私たちはそのタブーともいいくべき事業を、「思いひとつ」で進めてきた。27人だったメンバーが110人になり、その110人がメンバーを集めて数百人が、まつり開催に向けて熱気を帯び始め、ポスターの作成も始まり、もう後戻りはできない状況に、追い詰められていたからである。

その後も、事業が具体化するにしたがって直面した課題は、行政官庁の許認可であった。透明性・公平・公正・監理を主とした行政や官庁では、法的ルールの遵守や最終行政責任となることから、行政の理解を得るには幾つものハードルを越えなければならない。

干渴に作る龍神舞台では、池の管理者である大阪府富田林土木事務所に構造物の許認可の取得が必要。歌って踊る舞台の安全を確保するために平方メートル当たり300kgの構造計算書をつけて取得。花火を上げるにも、警察・消防署への煙火申請が必要である。花火の玉の大きさで、打上げ箇所から建物や観客までの、距離確保が必要になる。花火の担当会社とは、水面に花火の燃えカスが落ちた場合、水質環境に害を与えないかも確認した。警察とは雑踏警備シミュレーションの打合せもある。何時頃に、どの地点で、何人位になり、押し倒し等にならないか？ 来場者は、自転車・バス・自動車・徒歩で、どのように入場し退出するのか？ 花火の時が一番危険だ、と指導を受けた。ちょうど1年前に、明石の花火事故があったことが、念入りな打合せとなったと思われ



航空写真：車両通行は時計と反対回り

る。

さらに、まつりの会場である池の堤幅は、遊歩道を含んで数m。車両の走行は、当然一方通行になる。開場前の3時間で、クラシックカー80数台、フリーマーケット80数台、模擬店準備車両50数台ほか植木市などの車両も数10台入場させる。狭山池堤を一周するクラシックカー・パレードは、来場者のいる中を走行する。そして、まつり後には、順次それらの車両を短時間で出場させなければならない。安全確保のための警備・安全管理体制の構築である。勤務先で安全管理の知識を得ていた溝端淳史が、入場予想や雑踏シミュレーションを作ってくれた。警備・安全管理については廣田周治と中島隆富が、行政職員・関係官庁の協力を得て、具体案をまとめてくれた。現在は、警備会社に勤務する若林俊二が実行委員として加わり、警察との協議がスムーズに行われるようになった。

特に、狭山池が帰ってくるということを広く伝えたいと取り組んだ「ミニFM」は、総務省近畿総合通信局放送部に提出する膨大な許可申請書類の作成が必要であった。電波を調べる（株）NHKアイテックとの折衝にも、造詣の深い市職員がボランティアで協力してくれた。シナリオ作成と放送にも三木幹久広報部会長の紹介で、大阪芸術大学放送部の協力を受けて、やっと実現に漕ぎ着けた。

一方、各企画事業を進める部会では、新任の部会長を中心に、各団体同士も初めて顔を合わせるメンバーでの会議となった。私たちのまちにも、福祉センターまつりや公民館まつりがある。しかし、この「狭山池まつり」は、福祉系の団体と公民館系団体に文化団体や学校、商

工會などを横につなぐ横断的組織である。

龍神舞台を例にとれば、いつも顔を合わせている踊りやダンスのメンバーだけではない。舞踊・合唱・バンド・演劇のメンバーに加え、府立狭山高校生・大阪狭山青年会議所のメンバーが部会を構成しているのである。それは舞台工事から安全管理・物品の搬入搬出・テントの設営と撤去、そして舞台進行・PRとすべてを行わなければならぬからである。さらに、舞台に携わる府立狭山高校生の応援に、野球部やサッカー部の高校生がテント設営等の準備に来てくれる組織なのである。

会議は当初、うまく進まなかったようだ。各団体やグループからは、多種多様の希望が出され、お互いを知りえないことも手伝って、会議が一向に進まないと聞いた。例えば、舞踊では背景に金屏風などを置く。バンドやダンスでもバックパネルがほしいと希望が出た。しかし杭一本打たない約束で舞台を作ることになっていたので、風が吹いた時の不慮の事故が気にかかる私たちは、金屏風やバックパネルの代わりに狭山池と龍神社を借景にして欲しいとお願いをするなど智恵を絞らなければならなかった。

灯火輪部会では、周囲 2.85 km の堤をろうそくで囲むことは決まったが、実際にろうそくの明かりが、1 km 程も離れた対岸から見えるのか？ 篠火は、どのように見えるのか？ と、年末の大晦日に、幾種類もの瓶にろうそくを入れて対岸から確認するといった実験も行った。初めて作った篝火は、500 m も離れると霞む赤信号のようにしか見えず、作り直しであった。高山明弘は早速寸法を取り直し、鉄板ではなく鉄棒に切り替えよう、週 1 個の作成でいける、間に合う、と言ってくれた。

このように各部会では、提案された企画を実現するにはどうすればよいのか？ その都度、提案をまとめ、企画素案にし、その素案を元に話し合い、予算を作り、役割分担を作る。そして更に、各部会で実施要領を幾度も検討し、各部会間の調整を全体会議で行った。この全体会議は、隣接する部会事業が音響などで重複しないか、同時刻にお互いのメイン事業が重ならないか、来場者状況と車両の運行や堤を移動するマーチングバンドなどの整合をとるものになっていく。また、各部会がまつり全体を認識するための会議でもある。

実行委員会は、会長などのリーダーはいるが、フラットな役割分担としてのボランティア組織なので率直な意見が活発に出される。率直な意見が出る割に各部会での討議の成果だろうか、微調整はスムーズに運んでいった。会社組織では権限や発言の強い上司が決め付けたように議事を進行することが往々にあるようだが、ボランティア組織では人々の自主的な参画が命となる。事業の

遂行だけでなく、自主的な参画が少しづつ大きな輪になり、意義を見出し、組織として継続する楽しさを各々が見出せることが大切である。自発的に実行委員会に参加したのに、自分の意見や考えが聞き入れられないことが続くと、思いは揮発してしまう。部会長などのリーダーは、一人一人の言葉に耳を傾け、役割分担を模索することが続いた。

3月に入ると、実行委員の手で、市内各所に 1,000 枚のポスターが掲示された。協賛金の状況についても、実行委員会のホームページで公表した。実行委員自らの拠出が始まり、お願いしていた市商工会員への協賛金依頼文の郵送に相俟って、市民からの協賛金も集まりだした。3月議会で補助金が承認され、一気にまつりムードが高まった。各部会の会議は最終段階に入り、実行委員の姿を公民館や喫茶店、夜の居酒屋など市内各所で見かけるようになった。慌ただしい中で、三木広報部会長とパンフレットの校正を繰り返した。

4月始め、各部会の情報を集約し、開催要領の資料作りに入ることから、プリペイド携帯電話だけでは無理が生じ始めた。実行委員が集まる拠点が必要になったのである。図らずも、商工会館の一室を間借りする NPO 法人「まちづくり 21」の協力で、実行委員が集まる拠点ができた。筆者と松川元英の持つプリペイド携帯電話には、一日何十件という問合せがかかり始め、関心の高さが伺えた。

部会毎に、模擬店出店者への説明会、舞台出演者への説明会等が始まった。まつり開催 2 週間前の実行委員会総会は満員となり、当日スケジュールや搬入搬出への質問で熱気に包まれた。それぞれに描いてきた夢が、具体的にひとつに実を結ぶといった感慨が満ち溢れていた。

しかし、会場となる狭山池堤の盛り土が、日ごと変わるという現状に直面した。フリーマーケットや模擬店・クラシックカーなど各部会が、細かい位置設定のために現場を歩き、図面にしても、改修工事が進行中であり、翌週にはそこに桜が植えられていた等、まつり前々日の低木造園が終了するまで変更が続いたのである。

このような経過を経て、供用開始日となった 2002(平成 14) 年 4 月 27 日・28 日、両日とも晴天微風という絶好の天気に恵まれ「第一回狭山池まつり」が開催された。狭山池を閉ざしていた工事壁が一斉にはずされた 27 日午後、大阪狭山市市制 15 周年記念式典を併催し、両日で来場者 4.5 万人。当日スタッフは実行委員を含め 670 名の参画となったのである。

2. 実行委員会活動の現状

2-1 狹山池まつり

「狹山池まつり」は、前日の狹山池が在ることを祝う「灯火輪」と、翌日の「市民が挙って参加・参画する祭」で構成されている。

前日の「狹山池生誕祝祭：灯火輪 TOUKA-RIN」は、子どもの誕生日をお祝いするように、狹山池の在ることをお祝いするまつりである。7,000本余のろうそくの灯りと、1基100年を刻む14の篝火で、2.85kmの「狹山池」を取り囲むことから名付けた。夕闇にくつきりと、ろうそくの火で浮かび上がる「狹山池」の風景を、子ども達の故郷原風景にしようとの思いが込められている。PTA等が事前に小学校単位で作った灯火台を、昼過ぎから並べ始め、夕刻になると参加者の持ち寄りの手作り灯火台がその間に並べられていく。

日没を待って、龍神舞台では上田真紀子によってタクトが振られ、混声合唱団による「合唱曲 狹山池」が始まり、消防団長山本利治によって篝火の一斉点火。そしてPTAや青少年指導員の協力で、灯火台に順々に火が灯されていく。夜のとぼりが降りる頃、パチパチと弾ける篝火の向こうに、狹山池がくつきりと浮かび上がる。ろうそくに手を合わせる幼子がいる。遠い対岸の一直線に繋がる灯火台の瞬きに、目を凝らす人がいる。幾百人の準備とお手伝いにもかかわらず、それはわずか一時間のお祭りである。午後8時、水面に映る小花火は「狹山池」の新たな瞬間を人々に刻み、今日から明日につなぐ始まりとなるのである。

翌日は、すべての部会が結集し市民が挙って参加・参画する祭となる。「龍神舞台」では、市内外の中高生によるマーチングフェスティバルのあと、ダンス・バンド演奏・舞踊など、盛り沢山の企画が、夕方まで続く。南

大阪では珍しい「狹山池クラシックカー＆ワインテージバイクミーティング」には、懐かしい時代を共有したいと、中四国や北陸からの参加もある。100台に及ぶ往年



灯火輪子ども



マーチング



灯火輪



龍神舞台の観客



クラシックカー走行



フリーマーケット

の名車が、日本最古の狭山池を一周するパレードは壮観。商工会青年部が担当する80数店のフリーマーケットでは、親子が共に声を出して楽しんでいる。青年会議所メンバーが担当する池天ロックでは、青空の下、青少年たちのパワフルな歌が木霊している。市民交流協会担当の「こうりゅう広場」では、姉妹・友好都市をはじめとする文化の展示・产品販売だけでなく、NPO法人日本アクティブライフクラブ大阪狭山による模擬店、帝塚山学院大学ボランティアによるクラフト作りや紙芝居・民族料理もあって大賑わい。

蔬菜園芸振興会の地場野菜、園芸組合の植木花市も人気である。西堤の東屋では三曲協会による琴の調べの中、茶道協会による野点が行われる。ふれあいキッズコーナーでは、消防はしご車・警察の緊急車両体験に並ぶ人々、南徳一が主宰する若駒会の将棋大会を観戦する親子、望遠鏡を携えて野鳥見学を楽しむ人たち。周囲2.85kmの会場「狭山池」は、来場者で埋め尽くされる。

市内各種団体と行政の活動を広く市民に伝えようと始まった団体PRコーナーでは、5,000枚のチラシ配布が瞬く間に終了できると好評。歴史クイズを解きながら狭山池を一周する「スタンプラリー」は、府立狭山池博物館もコースに組み込んでいるので、狭山池の伝説と歴史

を紐解く講話会や博物館も大賑わいになる。

第一回のまつりでは、迷子対応に育児支援のNPO法人ワークレッシュ(代表 和久貴子)の協力。安全部会の廣田周治・中島隆富が休憩も儘ならず、唇を白くして車道安全でガードマンを指揮していた光景は今も忘れられない。

まつりの記念事業として始まった「狭山池クラシックカーミーティング」は恒例となったが、その後も、毎年のように新企画が生み出されている。

2年目(2003年)は、地方統一選挙年にあたり夏と秋の開催となった。夏には、隣接する市立東小学校で商工会青年部が「こども映画大会」を開催。また溝端功率いる龍神舞台では、昭和40年代の公民館や婦人会等の活動が盛んだった頃に創作され、町中に広がった「狭山音頭」で堤を取り廻もうと30年ぶりに復活、800人が踊った。

築堤の際に歌われた「労働歌」も80年ぶりに山村歳幸が奈良から見つけ出し、混声合唱団の協力で復活させる等、地域文化の発掘・普及にも力を注いだ。秋には、狭山池やまちの姿を上から見たいという願いを受けて松川元英が奔走、商工会青年部OB会によって「狭山池



模擬店



狭山音頭



池天ロック



結婚式



よさこい



♡SAYAMA

「ヘリコプター遊覧飛行」が行われ、150人余りの市民が楽しんだ。

3年目（2004年）は、若者に焦点を当てた「若者舞台」を、青年会議所の池ノ上伸一が龍神舞台の越智良子・中野恵里子の協力を得て「池天ロック」として復活、現在も続いている。

4年目（2005年）は、井上芳光の提案で、クラシックカーと最先端を行く「スーパーカー フォーミュラ1」の展示を行い、モータリゼーションの対比を来場者に楽しんでもらった。旅先の北海道で「YOSAKOI ソーラン祭り」を見た樺本主税の感動話を受けて、一部小学校で取り組みが始まった「YOSAKOI ソーラン」に発表の場を提供し、子ども達の健全育成に役立てようと「ソーラン狭山池」が始まつたのも、この年である。

5年目（2006年）の灯火輪では、中島和典たちが3ヶ月かけて準備したサプライズ灯火「♡SAYAMA」が北堤で揺らめき、人々の目を釘付けにした。

また、狭山池が帰ってきた時からの市民の願望であった、水面利用事業が「水との共生ルールを学ぶ カヌー体験」として実現。そして5周年記念として、ふたりの旅立ちを皆で祝おうと「狭山池 HAPPY 結婚式」が、クラシックカーパー会と龍神舞台の協力で行われた。若い二

人がクラシックカーに乗って登場し、龍神舞台で吉田友好市長始め来賓の祝福を受ける人前結婚式である。悠久の歴史を紡ぐ日本最古の狭山池で、永遠の愛を誓った二人に、200名にのぼる市民の署名が集まつた。

また狭山の西稜線には陶器山があり、狭山池周辺からは5世紀ごろの窯跡が数々発掘されていることから、商工会青年部の発案で「陶器&クラフトまつり」も始まつた。

6年目（2007年）の今年は、道下水面活用部会長を中



ポート



救急体験

心に、かつての「手漕ぎボート」を復活。池面をわたる風を感じながら、狭山池の風景を堪能してもらおうと準備が進んでいる。(第一回手漕ぎボートの光景 2007年)

このように「狭山池まつり」は、その気になればできることなら、その気になってやってみようと考えるのである。工夫をし、協力者を探し、アイデアを共有することで突破口が不思議と見つかるのである。誰かが面白いと思うこと、意義あると思われることには、必ず賛同者が現れる。市民とは、様々な特技の集団であることを実感する瞬間である。

よく課題となる新旧住民の問題は、ライフスタイルの違いや行事などに関わる対応、価値観の違いから生じ、全国至る所にある問題と思われる。私たちのまちでも旧地域には「だんじり祭」「盆踊り」「地蔵まつり」など昔からの祭りがあり、新地域では近年になって「自治会文化祭」や「夏の盆踊り」などが始まった。しかし、新しい「狭山池まつり」では、事業そのものが新しく、新旧住民や世代間の壁自体がない。目的と事業内容を共有し、各人のエンパワーメントを発揮すればよいのである。

そのような訳で、意識して「NO・できない」という言葉を使わない。提案を出して、「NO・できない」を言われた人は、出鼻を挫かれ、やる気を損ない、楽しくなる筈。まず話を聞き入れ、一度自分の中で絵を描き、少しでも可能性を見つけて、部会に添言をつけて戻すようにしている。「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ」山本五十六の言葉である。少しの可能性の添言が、部会で新たな方策に発展し実現するのである。お蔭様で、市民の発案と各部会の老若男女の自発的な取り組みで、様々な企画が実現する祭りとして定着してきた。

昨春2006年のまつりでは、周囲2.85kmの堤が人々でいっぱいになった。しかし、喧嘩や揉め事などが一つ



狭山池の夕日

も起こらなかった。これは堤の至る所で、腕章をした防犯委員・青少年指導員の姿や制服組である消防団員・消防署員・警察官の巡回活動で、まつりを守ってくれていたからである。市民と行政、団体と団体といった対面ではなく、お互いに助け合おう、まつりを盛り上げようといった気持ちが、まちの中に生まれ始めているのではないだろうか。

来場者数はもとより、当日のボランティアスタッフ数も年々増加傾向にあり、まつりを通じての世代間交流・地域間交流も盛んになってきている。

2-2 通年事業 狹山池クリーン・アクション、水質調査

「第一回狭山池まつり」を終えた、2002(平成14)年5月22日。事業及び収支状況を発表する中間報告会を行った。事業及び収支状況を、即時報告することで、実行委員会の方針である「Free・Fair・Open」の徹底を目指したのである。また、まつりを通じて知己を得た市民や団体同士の交流と、まつりを支えるであろう毎月の「通年事業(案)」の決定が目的であった。

中間報告会では、まつり当日の参画団体や個人の活動をひとつひとつ読み上げ、出席者全員の拍手で労うのが事務局長の最も大事な役務である。持ち場が忙しくて一日中立ちっぱなしだった、安全確保に声をからしていた、ゴミを拾ってくれていたなど・・・会場が広すぎて誰が何をしていたのかも分からぬはず、だから一つ一つ一人一人を記憶にとどめ、その頑張りにスポットを当てる。全体の活況は、それぞれの頑張りの集積なのだから。

当日ボランティアとして、初めてまつりに関わったメンバーも参加し実行委員会に入会した。そして、その新メンバーが中心となって、故郷の誇り「狭山池」をいつまでも美しいままに未来に繋いでゆきたいと、狭山池クリーン・アクション部会が設立されたのである。

翌月の6月22日に、第1回クリーン・アクション活動が行われ、80数人が狭山池の清掃に参加。府立狭山池博物館の草刈も行った。中辻会長他数名が草刈機を持参して、作業を鼓舞したこともある、一時間余りの活動で副池側の歩道も見違えるようになった。8月以降、毎月の活動は現在も続いている。

クリーン・アクション部会の会議には、市公園担当職員田中成佳・鳥山裕哉も参加して、行政担当として困っていることや、市民のできる範囲等を検討した。清掃用具については市職員が準備をし、回収ゴミ処分についても行政の協力が得られること。実行委員会側は、傷害保険の加入と飲料・軍手・ビニール手袋・薬箱の準備、ボランティアの募集や告知ポスターの作成と掲出を担当することが決まった。作業内容については、定番作業と市職員・実行委員会側からの提案や依頼を、お互いに検討し行なうこと等を申し合わせた。

対外PRでは、ゴミは上流から流れ込んでくるのだから、上流にゴミを流さないように言いに行こうとの意見も出た。しかし私たちはまだ何もしていない、どれだけ続けられるかも分からぬ。まずは、自分たちが20回

30回と続け、そのレポートを携えてお願いに行く方が得策だろうと合意した。大阪府で積極的に導入されている「アドプト制度」は、実施団体の名称看板などの設置もされるが、もっと自由でいたいとの希望が多く、登録は現在も行っていない。

毎月第四土曜日に決まった「狭山池クリーン・アクション」は、狭山池堤の清掃・草刈・犬の糞の清掃・側溝の土砂上げ・流入口のゴミ上げ・落書き消し等を、市民のボランティア活動で行う。毎月の参加者数は、少ない月で40名ほど、多い月で80名ほど、12月の大清掃日は150名ほどになる。参加者の年齢も、親に連れられた幼稚園児から70歳以上の高齢者まで様々。西除川・三津屋川の流入口のゴミ上げは、毎月2tから3tになるため体力が必要。安部直之・吉野正延・北野吉治・上田幸男・市川孝・深井昭次・野村輝男・浅見金次・廣田周治・若林俊二に、大阪府富田林土木事務所の職員が常に先頭に立ってくれている。安部弘美、受付救護に上田由佳里・吉野晴美・若林勝美ほか女性も多数参加のため、個々人の体力や希望に応じて、午前10:00から11:15までの75分作業をお願いしている。

活動が軌道に乗り始めた2004（平成16）年1月、20回目のクリーン・アクション時に、水質検査と水質浄化活動の提案を行った。一向に減らない流入ゴミと、夏に発生する「アオコ」に関しても、参加者の中から声が寄せられたからである。

また、週4,5日のペースで清掃活動を続けている安部直之から、狭山池の水が副池に流れ、水道水として取水されていることがレポートされた。勿論、行政としては取水について飲料水として厳格な水質検査が行われていることも説明されている。しかし、周知のこととはいえ、狭山池の水が15%構成されていること、浄水場で浄化されてはいるが「市民の飲み水」であることの認識が、大きな波紋となってきたからである。

「市民の飲み水」であることが知られるようになったことで、関心はニュータウン住民にもおよび、自治会役員の川竹了が安部直之に説明を求め、2004（平成16）年4月、狭山ニュータウン全自治会も上流域の三津屋川の清掃活動に着手した。

同年6月、大阪府や大阪狭山市と協議の上、市民への啓発指標として、簡易水質検査方法であるパックテストをクリーン・アクション時に行うことになった。丸尾一朗と大阪府職員が、定点5ヶ所から取水し検査する。そしてその結果を、堤に設置した「水質検査報告看板」に、毎月の水質状況と水質汚濁防止PRとして掲出してている。

無理のない作業と市・府職員も必ず参加し、共に汗を



クリーンアクション



ごみ上げ



水質検査



府立狭山高校生（野球部）



水質検査広報看板

流していることもあるのだろう、2006（平成18）年12月には、連続60回（記帳人数253名）を数えた。吉田市長はじめ高橋安紘・谷脇政男両助役、伊都輝夫水道局長ほか40数名の市職員も、市民と一緒にになって、年末の狭山池大清掃に参加。池尻消防分団の先輩である中岡利通・小林幸治も参加してくれた。このようにクリーン・アクション活動は、今も市民の自由なボランティア活動に支えられている。

最近は、府立狭山高校の安田幸一首席教諭が、生徒の貴重な体験になると薦めたこともあり、部活単位での参加が始まった。市立狭山中学生・ボーイスカウト・ガールスカウト・表現俱楽部うどい・若駒会・少林寺拳法大阪狭山支部の子どもたち等の団体参加や、大阪金剛ロータリークラブ・大阪狭山ライオンズクラブ・社協ボランティアグループ連絡会の有志、市職員ボランティア、市外近隣からの参加者も多く見受けられるようになってきた。

連続60回を記念して、クリーン・アクションピンバッジを作った。これからは10回の参加で、オリジナルピンバッジを進呈する。思いを形にすることで、さらにボランティアの輪が広がり、つながることを願っての事業である。



ピンバッジ

また毎月定期的に行われることから、活動終了後に様々な情報を参加者に伝え、聞くことにした。清掃後のお茶タイムを、月一回の情報交流サロン化したのである。団体参加は、みんなの前で紹介し、拍手を受ける。社協ボランティアグループ連絡会が主宰するプルトップの集まり状況や、直近に開催される講演会の案内なども行う。行政や団体情報の伝達方法として、ポスターやチラシ配布に頼ることの多い中、ここでは顔を合わせながら、相互に情報を得ることができる。知らなかったり、分からることはその場で聞くことができ、講演会に行く友達もその場でできる。この取り組みは、予想以上に各団体の活動に協力する人を増やし始めている。

実行委員会のクリーン・アクション以外にも、近隣自治会メンバーによる月2回の清掃活動や、周囲遊歩道をウォーキングする人の中には、ゴミを拾いながら歩く人も見受けられるようになり、市民の環境意識も徐々に高まりつつあると感じている。

2-3 大阪府・大阪狭山市との三者協働

狭山池さくら満開委員会の設立で拡大する活動

4月のはじめ、大阪市内の難波から南海高野線に乗ると、狭山駅から大阪狭山市駅までの線路沿いは、今もさくらのトンネルになる。高野街道の要衝であった「狭山池」は、大阪府内でも有数の「さくらの名所」であった。そのため実行委員会設立の準備委員会で、さくらの咲く4月始めにまつりを開催しようとの意見が多数出たほどである。

2003（平成15）年11月末、大阪府から実行委員会に桜を植える委員会を作らないかと打診があった。狭山池博物館を設計した建築家安藤忠雄氏から、大阪府に提案があったとのこと。実行委員会の承認を得て、武田博允会長・鳥山政司副会長を含む7名の理事が参画することにした。

2003（平成15）年12月、狭山池の管理者である大阪府（底地は水利権所有の狭山池土地改良区）と公園部分の管理委託を受けている大阪狭山市、そして狭山池を活動のフィールドにしている実行委員会の三者で「狭山池さくら満開委員会」を設立。事業目的は、狭山池を再び「さくら」でいっぱいに埋め尽くすとともに、水辺環境を良好に保つための活動を官民協働で行うこととした。

桜の植樹については、安藤忠雄氏の協力を得て講演会を行い、参加者から寄せられた寄付金を基に植樹祭を行うことになった。

2004（平成16）年1月、第1回講演会テーマは「住民参加とまちづくり」であった。安藤氏は、瀬戸内海豊島の環境改善やどんぐりの植樹活動などをスライドで見せながら、これからまちづくりには、住民の積極的な参加の必要性とその可能性について、1,000人を超える来場者に熱く語った。

第2回目、2005（平成17）年1月の講演会テーマは「さくら満開－こころに花を咲かせる」。安藤氏にも講演の前に、クリーン・アクション活動・水質検査報告・野鳥状況について、各部会長の報告を聞いて頂いた。展示ホールでは、その写真資料とともに大阪府・大阪狭山市の行政事業のパネル展も行い、安藤氏や来場者に「狭山池」の現況と私たちの活動を伝えた。

第3回目、2006（平成18）年1月、講演会テーマは「平成18年さくらの会」であった。「私は桜だけでなく、人々の気持ちとつながりを、さくらに託して植えている。皆で植え、皆で守っていく桜でなければ意味がない。桜の生育を通じて、子どもたちが自然や命在るものに対する礼儀を学んでくれれば、もっとうれしい」と安藤氏は講演の中で言う。翌2月の植樹祭には、初めて安藤氏も参加、幼稚園児に囲まれて和やかな記念植樹とな



植樹祭（安藤と武田会長）



北堤のさくら

った。この日は、NHK「@ヒューマン」のさくら取材班が安藤氏に同行、安藤氏が私たちの活動を取材班に話されたことから、3月のクリーン・アクション活動の取材も受けた。安藤氏が主宰する「桜の会・平成の通り抜け実行委員会」から、コシノヒガンサクラ100本の寄贈を受け、隙間のあった北東の堤は見事にさくらが連なった。

2006（平成18）年11月末、講演会の日程の連絡が入った。4回目となることから、安藤氏を市民が包み込むような企画にしようと、事務担当者会議で提案、そのコンセプトの説明に、初めて安藤忠雄建築研究所を訪問した。その際研究所の水谷孝明氏から「安藤が大阪狭山に行くのは、狭山池まつりが市民から立ち上がったことを知ったから。そしてその活動が、狭山池や博物館を大切に思い清掃などの活動を続けてくれているから、それに協力しようとしているだけです。だから安藤が主役なのではなく、安藤はその中にいるということで充分です。あなた方の考えられた企画で結構です。」と教えられた。この3年を振り返り、心からお礼を申し上げた。

2007（平成19）年1月の講演会テーマは「まちは生

きている」となった。クリーン・アクション活動にも積極的に参加している、中高生の表現俱楽部「うどい」が、新作の「龍神伝説」を披露。安藤氏の講演を聞いた後、安藤氏や吉田市長・武田会長を6人の高校生が囲んで、「まちで生きる」をテーマに意見交流を行った。

表現俱楽部「うどい」に参加したこと、地域に目を向け始めた森田愛佳には、吉田市長から世代を超えて市民が交流することは、文化や伝統が引き継がれまちが元気になるとエールが贈られた。建築と文化財保存や環境に関する北側祥規の質問には、西欧には沢山残されている旧建築というものが日本には残っていない、文化を継承することはとても大切に思っている、と安藤氏から答えが返り、君はどう思っているの？ 等。来場者も聞きたかった質疑が続き、沢山の拍手を受けた。

閉会には、吉田市長はじめ高校生たちも舞台中央に出て、唱歌「さくら」「ふるさと」を80数名の大坂狭山混声合唱団のリードで、来場者と共に全員合唱した。

当日の来場者数は主催側を含め1,100余名。寄付金504,300円は、「桜の会・平成の通り抜け実行委員会」からの2年目となる多額の寄付金と共に、2月24日の植



意見交流



全員合唱

樹に充てることになっている。

平成16年から19年の4年間の寄付は、講演会場での寄付に、大阪狭山ロータリークラブ・大阪狭山混声合唱団・大阪狭山造園緑化協会・桜の会・平成の通り抜け実行委員会等からの寄付を加えると、総額13,420,000円余りになる。狭山池全周2.85kmに、桜が咲き誇る光景が目に浮かぶ。

また、この「狭山池さくら満開委員会」では、狭山池の水辺環境を良好にしようとの積極的な提案と活動も行われている。市民団体である「狭山池まつり実行委員会」だけでは手を挙ぐ案件も、官民協働によって進めるスムーズに進んできた事業がいくつかある。

その一例として、2005（平成17）年5月、安部直之が狭山池全周の「さくらの実態調査」を自主的に行い、報告書にまとめた。害虫による異常など4段階に区分けし、1,000本もの状況を図面と写真にして提供してくれたのである。早速、事務担当者会議を開き、177本の異常が見られた樹木に対しての対策が検討された。毛虫などについては実行委員会もクリーン・アクション活動時に撤去作業すること。大阪府と大阪狭山市の両者は、図面と写真をもとに現地確認し、早急に対応を図ることなどを決めた。

狭山池の景観の一部を変えるということも行った。武田会長は蝶に関しての造詣が深く、クリーン・アクション時にシルビアシジミという貴少種の蝶に気付いたのだ。武田会長のコレクションを見て、自分たちの子ども時代には、畑に幾種類もの蝶が飛んでいたことを思い出した。「あの狭山池にバタフライガーデンを造りたい」武田会長の夢を聞いて賛同した。

そして、どうすれば実現できるだろうか？ と「企画書」の作成にとりかかった。いつ、どこで、なにを、どのように、いくらで、だれが、をまとめる。そういえば、西堤の一角に石碑の立つ約500平方メートルの土地がある。しかし雑木林になって、その石碑に近づくこともできないことを思い出した。現地を確認すると格好の場所。あとは費用捻出と事業目的。蝶の食餌吸蜜植物の苗木は、武田会長がバタフライガーデンの設計図を作ろうとインターネットで偶然見つけた、バタフライ・ビオトープの先駆者である府立城山高校の中村和幸教諭にお願いして、多数の苗を譲っていただくことになった。これで費用的なムリはなくなり、事業目的を武田会長と相談して、①春のさくら・冬の野鳥に、夏から秋の蝶が加わることで、一年中狭山池が憩いの場になること ②子どもたちの自然博物館として、自然環境教育にも役に立つこと ③全国でも珍しい事業であること を列記して「バタフライガーデンの造成」を提案したのだ。委員会



バタフライ G 除幕



流木チップ化



看板



チップ化機械

では、食餌吸蜜植物であることから、今後の維持管理に不安が寄せられたが、市行政に頼ることなく、市民参加で維持に努めることを申し出、全員一致で採択に至った。

2006（平成18）年4月、狭山池まつりの日にバタフライガーデンを「狭山池 蝶の森」と命名しオープン。この除幕式に中村先生に来ていただき、「蝶の舞うまちづくり」と題した講演も狭山池博物館で行っていただいた。

この講演会の参加者が新たなボランティアとなり、山本重信・吉田葉子・古川照人を中心に、サフィニア会の中川学・大津光子・関根昭子・西坂由紀子ほかのメンバーがクリーン・アクション日に、その後の維持管理にあたっている。同年秋には、食餌植物318本と吸蜜植物290本の苗木は順調に成長し34種類の蝶が見られるようになり、遊歩道を歩く市民の楽しみになっている。

また、クリーン・アクション活動の際に水面から引き上げた流木は、ゴミとして廃棄していた。毎月2tから3tのゴミの半分近くは竹や木枝である。ゴミとしてパッカー車に投げ入れることに、長い間疑問を感じ躊躇し

ていたのである。そこでこの流木を、桜木の保水・堆肥としてリサイクル活用しようと「回収流木のチップ化事業」を提案。委員会で予算も認められ、大阪狭山造園緑化協会の協力を得て、2006（平成18）年9月からチップ化作業が始まった。

また2年前から、水質改善と84種類の野鳥の環境づくりとして、南堤における葦の植栽を検討してきたが、2007（平成19）年3月に着手することが決まった。狭山池の最大容積280万立方㍍の水量に対して、活動の規模はごく僅かかもしれない。いずれは大きな水質改良土木工事が必要かもしれない。しかし、今後も印旛沼の水質改善として取り組まれている「空芯采」や、貝類による水質浄化を調査研究し実験を継続していくことを話し合っている。

（水質改善事業「空芯采の筏栽培」は2007年5月から9月、イケチヨウ貝による水質改善も2007年9月から実施）

私たちは、私たちに出来ることを継続して行うことで、少しでも多くの市民や狭山池の上下流域の人々に、水環境の大切さを官民協働でPRしていくと考えてい

る。私たちの環境や文化を、未来につなぐのは私たちしかいないのだから。

2007（平成19）年1月、うれしい情報が舞い込んだ。浚渫（しゅんせつ：水底の土をさらいで深くすること）工事は、平成の大改修の10年後と説明を受けていたが、竹木と共に土砂の流入もひどく、流入口付近に中洲ができるで水が回流しなくなり、汚濁は2004（平成16）年頃から進んでいた。特に昨年から、中高生の協力が増えてきたのだが、汚濁は緑のベンキのようになり腐臭も一層ひどくなるばかりで、部分的な浚渫でも水の回流が期待できると要望していたのだが遅々として実行されず、業を煮やした私たちは、高校生と一緒に人力で溝を掘ってもみたが、1ヶ月もすれば元の木阿弥で、再び汚濁と悪臭の中での掃除を続けていた。その浚渫工事に、府行政が着手してくれたのだ。

非効率と分かりながらも、汚いものを美しくする作業を、ボランティアメンバーは行う。しかし、ボランティアに限界を感じさせるのではなく、成果や遣り甲斐を感じてもらうことが、さらなるボランティアを生むと考えている。それは、マズローの欲求階層説①生理的欲求

②自己保存の欲求 ③社会的欲求 ④自我の欲求 ⑤自己実現の欲求に見られるように、ボランティアにも欲求の階層があるからである。①友を得たい ②自分のためになる ③他人のために役立つと始めた活動が、活動を通じて徐々に欲求が、社会的評価や自己実現に向かっていくのである。この浚渫工事費890万円。府財政の厳しい中、タイムリーな行政判断をとても嬉しく思った。

委員会が発足して5年余りが経過。大阪府や大阪狭山市の担当職員は人事異動で大きく様変わりしたが、行政は担当者が代わっても業務としての一貫性は持続する。しかし市民活動は、ともすれば人が代わったり熱意が冷めると萎んでしまう。市民協働においては、市民活動に持続・継続という担保が必要なのである。実行委員皆がボランティア精神を發揮し続いていることが行政の信頼を深め、委員会の発展的な活動を支えていると考えている。また、行政の生涯学習化と言われるが、私たち市民の思いに配慮し共に考え共に活動してくれる担当職員に出会えたことが、大きな要素であったと考えている。

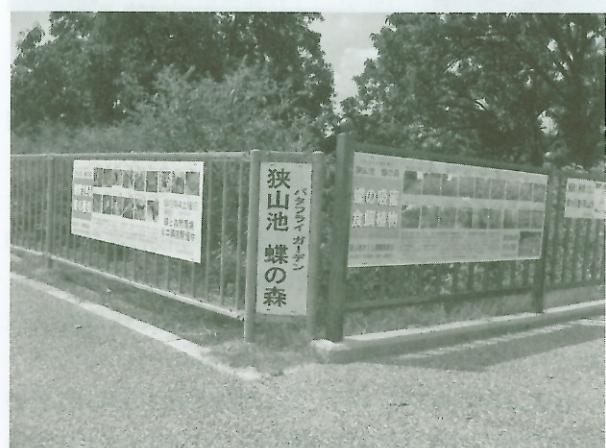
私たちは行政の立場を、行政は私たちの立場を理解し、お互いに補完し協働することで課題の解決に近づけ



アオコと高校生



浚渫工事



バタフライ G ボード



ボランティア

る。ここでの事例に見られるように、市民の豊かな発想が行政の許認可や専門知識と合わさり、協議を重ねて市民と行政職員がともに活動することで実現されていく、この形こそ市民（官民）協働の基本形ではないだろうか。

2-4 市内に波及した協働活動の事例

いざなぎ景気を超えたと言われながら社会は沈滞し、経済偏重から少しづつスローライフ・LOHAS が紙面を賑わしている。いじめと自殺が 2006（平成 18）年を覆いつくし「命」が代名詞となった。まちや個人のアイデンティティ、そしてふるさとが必要な時代になってきたようである。

実行委員会のボランティアメニューの広がりは、多くのボランティアを必要とし、ボランティアをつないできた。そして、実行委員会内部では、誰かが提案したこと、工夫や人ネットワークを通じて問題解決できる=私たちは出来る！ という実感も生まれ始め、スタッフジャンパーに（We Can!）の文字を入れた。この We Can! の実感が「火種」となって、派生した事業が数々生まれた。

狭山池クリーン・アクションに参加していた、ボーイスカウト狭山第一団の小寺数夫団長から「公共施設を大事にしない大人や子どもが増えている。税金で作られた公的施設は市民みんなのもの、市民自らが大切に守っていくということを広めないとだめだ。8月は炎暑になるので、堤での清掃を狭山池に隣接する府立狭山池博物館の水庭清掃にしてはどうか？」と提案があった。来館者を迎えるエントランスには、水飛沫をあげて流れ落ちる滝があり、その上下に広々とした水庭がある。早速、小寺団長に作業企画書を作成してもらい、博物館スタッフと協議、実行委員会でデッキブラシなど作業備品を準備して、2003（平成 15）年 8月初めて取り組んだ。



狭山池博物館の水庭清掃

夏休みの一日、ボーイスカウトに村元恵子・山本敬子率いるガールスカウト大阪府第 23 団の小中学生も、クリーンアクションメンバーの大人と一緒に、その水底を磨くのである。昨年は、安藤建築研究所の水谷氏も、子ども達の活躍を見てとても喜んで下さった。この事業は、夏休みの恒例行事となり、毎夏百人を超す清掃デーとなっている。

また、「狭山池 ドッグフェスティバル」がある。クリーン・アクションの際に、度々見かける犬の糞が話題に上ったことがきっかけだった。平坦で周回遊歩道となつた堤には、市民の誰もがジョギングや憩いに訪れる。その美しい環境を犬の糞害から守ろうと、商工会青年部 OB 会とクリーン・アクション部会が、トリマーや犬の調教手の協力を得て「ドッグフェスティバル」を 2003（平成 15）11 月開催。愛犬の糞処理を自宅で行った後に、戸外で運動や散歩をする様や、愛犬と飼い主の関係作りなど実技を通じて行われた。この事業がきっかけで、現在は防犯委員会の啓発活動「わんわんパトロール」に、愛犬と愛犬家の皆さんが協力している。

2004（平成 16）年 6 月、市立狭山中学校教師吉川真由美から、2 年生の夏休み総合学習「地域ボランティア」についての相談があった。ボランティアは自主的な活動である。例え授業の一環であるとしても、苦手なことをしてもらうには抵抗があった。例えば、歌の苦手な人が、合唱などの慰問しかなかったら、辛いものがあるのでないか？ 生徒がしてみたいボランティアを集めようと、実行委員会の参画団体に協力を依頼し、前述の狭山池クリーン・アクション、狭山池博物館の水庭清掃に加え、消防団の定期点検活動、読み聞かせのお話しの会活動、地区の公園の清掃、地区の高齢者の福祉食事会の団体活動を提案、中学生が自分たちで決めた舗道の点字清掃等とあわせ 19 種類となった。

生徒自身がしてみたいと思うボランティアをして欲し



点字清掃



消防団員と放水訓練をする中学生

かったのである。自分が住んでいる地域には、こんなにもボランティアメニューがあり選ぶこともできる。今回は、これに参加してみよう。友達同士なら、さらに話題が広がって、自分や仲間に合ったものを見つけるかもしれない。次は、自主的にボランティアをしてくれるかもしれない。教育や学習的側面からみても、自発的なやる気がその成果を何倍にもするからである。夏休みのあ



落書き消し（取水塔）



落書き消し（東屋）

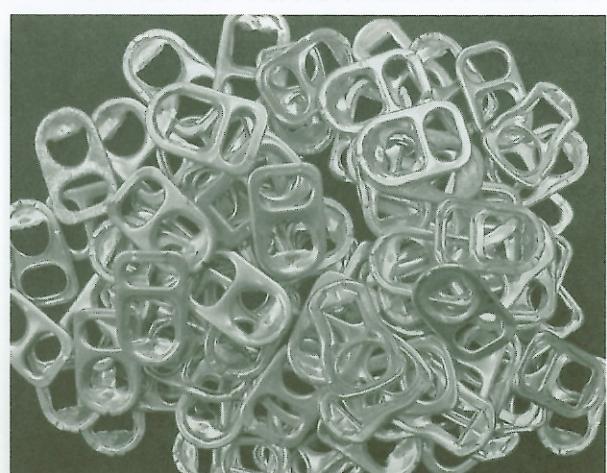
と、生徒を受け入れた団体からは、中学生の参加によって活動に活気が出てメンバーも喜んでくれた。また一緒にしたいと感想が寄せられた。

現在の病んだ世相は、世代間や地域間及び地域内でのコミュニケーション不足を表していると言われている。しかし、世代間の信頼は伝統や文化を継承する基本条件であり、後進の育成のためにも世代間交流の促進が必要と考える。しかも、知識や技術を伝達する行為そのものが、自らを変革するのではないか。ボランティアが生涯学習の有効なひとつである所以である。嬉しいことに2006（平成18）年夏も、18種類のボランティア事業に172名の中学生が参加している。

そして、2004（平成16）年秋、思わぬところに新たな「火種」が生まれた。空き缶のプルトップを集め、北海道の商工会青年部に送り600kgで車椅子と交換、福祉団体に寄贈しようという活動である。前述の市民交流協会で、理事の一人岡田恒子が提案したことがきっかけで、市民交流協会と実行委員会がバックアップすることになった。団体間の協働である。

早速、市民交流協会で「プルトップ貯金箱シール」を作成し、実行委員会では10月のクリーン・アクション時から「プルトップ貯金箱シール」の配布が始まった。市民交流協会主催の「美山村バスツアー」でも、バスの中でPR、配られた飲料のプルトップが集められた。思いもかけずプルトップは集まり始め、翌年2005（平成17）年1月には、社会福祉協議会のボランティアグループ連絡会の主宰（岡田恒子・武藤利宏）となって、正式にスタートした。

1つ1gにも満たないプルトップが、続々と集まり始めた。市役所から、老人クラブのゲートボール会場から、公民館から、ガソリンスタンドから集まり、市民の中に日毎に広がってゆく。2006（平成18）年9月、ス



プルトップ



空缶圧縮機（SASAOKA モデル）



まつりデビュー

タートしてから19ヶ月で遂に660kgを突破、1台のアルミ製車椅子が市役所に届いた。ボランティアグループ連絡会では、そのアルミ製車椅子に「プルトップ1号」と名付け、市役所を訪れる市民に利用してもらっている。そしてその後も、加速度的にプルトップは集まり続け、同年12月には累計1,060kgに達している。方法を見つけ出し、一人一人の思いをつなぎ形にできた好事例の一つである。このプルトップで得た方法論を活かして、空き缶・ペットボトルを通じて環境・教育につなげようと、新たな思案を始めている。

（その後3年の試行の末、電動空缶圧縮機が完成した）

また、行政内部にも、「火種」が生まれた。2005（平成17）年4月、初めて実行委員会から市職員に向けて、まつりの当日ボランティアを募集したところ20名が参加。2006（平成18）年には、吉田市長が率先して職員にPRしたこともあり、4倍の80名（全職員数451人）になったのである。狭山池まつりは市民主体のまつりで、行政は業務上そのサポートをするスタンスから、市民と市職員がもっと強い協働で取り組むというスタンスに変わってきたのである。まつりを媒介として、市民と

職員が同じ目線で動くのである。副次的なことかも知れないが、まつり当日のボランティアに汗を流す市職員の顔と市役所の窓口で見る顔と違って見える、市役所に行きやすくなったり、幾人もの実行委員から声が届いている。

2007（平成19）年1月、水質検査部会と市水道局の話し合いが持たれた。パックテストによる簡易水質検査が30回を数え、一定のデーターは集まった。しかし、パックテストは視覚的な判断が入るため、基準を一定に比較することは難しい。そのため今後のデーター収集に、水道局の協力を要請したのである。毎月のパックテスト結果に、水道局の水質測定器による数項目の数値が付加されることにより、水質の変化が格段に明確になるからである。水道水の原水である狭山池の水質に対して、市民と水道局が共通の情報をもとに関心を持ち続けることが始まる。

私たちは行政の縦割り業務を批判するが、ともすれば私たち市民団体も、自らの団体の「壁」を崩せずにいるのではないか。自分の所属する団体のアイデンティティを大切にするように、他の団体のアイデンティティも認めることは、とても大切だと思うのである。お互いの団体の特徴を活かし合う「共生」が、私たち市民団体にも問われていると考えている。

実行委員会では、地域の歴史や文化などを調べ、多くの市民に町のことを知ってもらうことは、地域学の端緒を開き、町に生涯学習という学びを植えることになればと考え「さやま検定」を新たに企画し、その設問作成を市の熟年大学を主宰する「大阪狭山市熟年いきいき事業実行委員会 歴史部会」に依頼した。同部会には歴史に精通するメンバーがいるからである。「大阪狭山アマチュア無線クラブ」とは、まつり会場となる狭山池2.85kmの安全確保を図るために通信方法の話し合いも始まった。そして狭山池に隣接する「（財）大阪狭山市文化振



検定会場



テキスト 2010 版

興事業団」との協力も話し合われ、団体同士の協働も大きく一歩を記すことになっている。

(その後、2008年に第一回さやま検定を実施)

行政財政の再構築の中、ともすれば財政面での厳しさから積極性を失いがちである。しかし、このように個人や一団体では形にできなかつたことが、みんなの力を持ち寄れば実現できることが数々生まれてきた。協働は、市民と行政に限られたものではなく、市民と市民、行政の中のグループや課同士でも成り立つ概念。限られた財政や資金を如何に活かすか、その課題に「協働」という横串をどのように上手く差し込めるか」が問われている。

実行委員会ができて、5年が経過した昨年辺りから、筆者の元に様々な新聞の切抜きや、提案情報が持ち込まれるようになった。葦の植栽情報や貝による水質浄化、葦から名刺を作ろう、東北学という地域学の本など、枚挙に暇がない。市民の中には、まだまだやりたいこと、協力を惜しまない気持ちがあることを物語っている。まちを美しくすること、文化を高めること、環境を守ること、コミュニティを高めること・・・まちの価値を高めるのは、誰でもない、そこに住む私たち市民であるとの思いが広がり始めたのだろうか。

クリーン・アクション活動を始めた頃、筆者にお礼を言った女性のボランティアがいる「私は、街がきれいであって欲しいから、一人でゴミを拾ってきた。でも、一人でゴミを拾っていると、ええ格好をしてる、好きでやっている、と見られているではと、自分勝手に思えてきて、何だか落ち着かなかつた。こうして皆でやっていると、とても安心できて、とても楽しくさせてもらえる。

私と同じ気持ちの人が、こんなにもいることも嬉しいし、ありがとうね。」と。

行政は、ともすれば行政がして欲しいことをボランティア募集し、形作られた時点で完結してしまう傾向がある。ボランティアは、職員の人手不足を補うための、労働力ではない。ボランティアは、ゆっくり育つ。ボランティアの欲求階層を知り、育てていこうとする意識が必要と考える。ホイラーの法則で言えば、ゴミを拾っているのはゴミを拾いたいからではない。「こと」ではなく、「その思い」を汲み取らなければならないということだ。行政は、自発的であるけれど揮発性を持つボランティアを、行為だけで集めたり、心無い「ご苦労さん」や「好きでやってくれてる」と他言ないこと。その言葉を聞いた途端に、ボランティア意欲は揮発し、使われていると反感に似た感情が沸くもの。くれぐれも注意し、大切に育ててほしい。

「まちづくり」という言葉は、例えば駅前再開発などのハード面が、そうであると思っている人たちが沢山いる。自身もハード面だと思っていた。しかし、そのハード面はどのように市民にとって生かされるのか、メンテナンスしていくのかと考えると、事前に将来を予測して考えることや、できてから活かし守っていくソフト面も「まちづくり」だと考えるようになった。今、「まちづくり」を、もっと身近に感じるために「まちを磨こう」という思いでいる。昨今、地方分権・行財政改革を受けて、「公共サービスの新たな担い手」として、NPO等の市民公益活動が求められている。しかし、市民の公益的な活動を促進するには、公共心をもつ市民の裾野を広げておくことが必要ではないか。「ハチドリ計画」という活動がある。地球温暖化に対して、一人一人のできることを実行しようとの趣旨で、展開されている。同様に公共においても、様々なことで市民ができるることを、市民が喜んで手伝ってくれるように準備する。一人ひとりの市民に、公共の有難さと大切さを知ってもらい、しかも遭り甲斐や生きがいを生むことができれば、NPO等への参画や設立へと発展し、まちづくりは市民の手の届く活動になるのではと考えている。

行政と市民との距離を近くすること、公共ボランティアメニューを数多く関連付けて整備し、参画しやすい方法論を構築することで、行財政改革を踏まえた「まちづくり」は、まだまだ新たな可能性があるようだ。

3. 実行委員会の課題

3-1 まつりの功罪

一過性の「狭山池まつり」と、継続活動を組み合わせ

た実行委員会活動は、前述のように市民活動と新たなコミュニティの形成及び経済効果において、一定の成果を上げつつある。

しかし、行財政改革の波を受けて、他市では中止や廃止に追い込まれているまつりが続出している。主催者側メンバーは、良いことをしている自負でボランティアに臨むのだが、取り巻くすべての人々が、主催者と同じ賛同者ではありえない。また、主催者側の人の中にも、うまく趣旨や情報が伝わらないことで、「させられている」意識が生まれることがある。そして、一般的にも、早朝・夜間の騒音、道路渋滞やゴミ問題、事故や開催費用など、ネガティブな批判や課題を抱えるのも「まつり」なのである。

第一回の灯火輪では、終了後にペットボトルの灯火台数千個が、ゴミとして廃棄され、ゴミ問題として批判を受けた。早速、翌年には回収作業を始め、現在では完全回収して保管、翌年に再使用している。ネガティブ感情を減らすには、すばやい対応、細やかな配慮と充分な対策、そして一人一人と向き合う姿勢が大切だと考えたからである。

補助金についても、市から320万円を受けているが、「財政の厳しい中、減額し他の必要経費に充てるべきではないか」との意見も、少数だが耳に届いている。そこで、透明性確保のための説明責任として、320万円の補助金によって、市民・事業所協賛金387万円（505件）が集まり、事業収入による自主財源362万円が生まれ、合計1,069万円の事業資金となること。その事業資金から生み出された事業は、狭山池まつり来場者78,200人／当日スタッフ940人／市民団体模擬店収益ほか経済波及効果、年間を通じたクリーン・アクション活動で回収される流入ごみ約30トン／ボランティアのべ850人、さくらの植樹、流入竹木のチップ化再利用事業、葦の植栽水質改善事業、そして、これは特別かもしれないが大阪府による浚渫工事費890万円など市補助金という経費に対し充分な効果と、市民による公益活動の広がりが生まれていることを説明することにしている。

人が動き、ものが動き、金が動き、情報が動くことが地域活性化には必要である。より合理的に、しかも楽しく活力ある住民自治を目指す時、「まつり」をネガティブに見るよりは、市民活動のシンボルとして活かすことが得策と考える。

私たち実行委員会は、「狭山池まつり」を「まつり」であって「イベントではない」と宣言して来た。沢山の市民のボランティアで支えられ、交流によってコミュニケーションが継続する活動は、イベントとは一線を画するものだからである。それ故、さらに私たちは一人ひと

りが公共を支える一人であるという市民意識を持ち、実行委員会事業にも反映していくことが求められるだろう。

3-2 市民協働と実行委員会

2002（平成14）年4月、第一回狭山池まつりを開催。その2ヶ月後の6月に「大阪狭山市市民公益活動促進条例」が制定されたが、当初市民協働（官民協働）の概念の周知と理解が遅れ、「協働」という言葉だけが一人歩きする中、行政による補助金の低減と事務局機能の撤退は、「行政の丸投げ」と補助を受ける団体の間で少なからず波紋を広げた。

しかし、実行委員会では2003（平成15）年に、大阪府・大阪狭山市と「狭山池さくら満開委員会」を設立したこと、市民協働（官民協働）の意識が大きく変わった。

前述したが、実行委員会だけでは手を携く案件も、委員会で協議を重ね、実現できてきたことが幾つもある。市民協働は、行政が担うべき領域に近いほど公益性が高い協働になる。従来、行政の領域であるクリーン・アクション活動や文化を復活させること、行政活動のPR、団体育成などはその好例ではないか。そして、どのような案件でも、事前と事後、行政担当者とよく話し合うようしている。市民側の視点や考えが及んでいない場合があることも知ったし、機が熟していない場合は待つことも知った。協働するには公益性が高く、また継続する力がある程、行政との協議がスムーズに進むことも学習した。

2004（平成16）年に「市民協働のガイドライン」が策定され、市民公益活動促進補助金の公開プレゼンテーションも始まった。

2005（平成17）年2月、市民交流協会の「新都市交流事業」で、市民協働の先進地と言われていた「埼玉県志木市」を武田英夫・住本尚志・柴田忠克・松川元英・西田耕一・奥平将貴・中井新子・楠と訪問する機会を得た。学社融合「いろは遊学館」、行政パートナー制度、志木市役所（まちづくり・環境推進部市民活動支援課）などの取り組みを見聞し、市民協働についての具体的な意識をさらに高めることになった。

それは2005年の「狭山池まつり」で、事業運営における市職員のボランティア募集として具体化され、2006年には吉田市長率先のもと、市職員のボランティアが80名になったことは述べた。職務ではなくボランティアとして、これほどの多くの職員が参画する市町村はいくつあるのだろうか？これは、実行委員会の自慢の一つとなり、本市の市民協働が円滑に進み始めていることの証

左であろう。

3-3 団体と実行委員会

実行委員会はその性格上、協働の概念は官民協働だけではない、団体同士や個人との協働も在り得るとしてきた。行政主導と違って、市民主導で団体がまとまっていくには、お互いがフラットな関係であることが前提になるからである。

昨今、行財政改革・行政の説明責任を受けて、非公募が主流であった補助金制度は、公募による公開プレゼンテーション型等の導入による見直しが始まっている。既存からの継続事業については諸経費の合理化が求められ、補助金の提供は新規事業などに振り分けられるようになり、サンセット方式も導入された。

そのような背景を受けて、実行委員会では極力合理化を進め、市からの補助金額を自ら2年目は30%、3年目はさらに5%カットを自ら申し出てきた。実行委員会は「狹山池」という市民のシンボルを活動の中心にしていることから、何とか事業所や市民の協賛金を集めることができている。しかし、会費や補助金比率の高い団体は、なかなか協賛金など外部からの費用を集めにくく、しかも継続事業を打ち切りにくいのが現状である。事業の打ち切りは、団体メンバーのモラール低下を招き、組織運営が難しくなる。

そこで、実行委員会では、市補助金の低減状況を見て「市民団体支援」として、狹山池まつりでの「市民団体模擬店」と「団体紹介」を積極的に進めてきた。まつりでの模擬店の出店は、団体にとって大きな負担を伴うが、団体が自らの活動資金を得る一方法となる。また「団体紹介」は、自らの活動を広く市民に知らせ組織を活性化することに繋がると考えたからだ。

しかし、テント設営や機材搬入に悩む子ども会や、反対に調理のできるメンバーがいなくて出店できない、との声も多数寄せられた。市川孝模擬店部会長は、新たな手法として「地区の屋台村」を提案。テント設営や機材搬入を青年会や地車会が担当し、料理や販売を子ども会や婦人会が担当する協力混合方式である。これはガールスカウトとボーイスカウトとの協力混合であり、知らない者同士の団体を、実行委員会が繋ぐケースが増えてきた。

結果、各種団体の協力を受けた「狹山池まつり」は、年々来場者が増加傾向を示し約8万人となった昨年（2006年）、市民団体模擬店の中には、かつての市補助金に匹敵する収益をあげる団体が幾つも生まれた。また、まつり後に、一気に認知度を上げた団体もいくつも見られる。

新たな方策を見つけた時、個人であれ団体であれ活気を取り戻すようである。そういった団体は「狹山池まつり」の存在価値を十分理解し、実行委員会の年間を通しての活動にも、積極的に参画してくれる好循環が生まれてきている。

3-4 市民団体データーベース

しかし、以前から強く感じていたことは「団体情報の不足問題」である。第一回狹山池まつり終了後に、それは現実となって私たちに迫ってきた。実行委員会としては、まつり当日の模擬店を市民団体で出来る限り賄い、模擬店収益を団体活動に活用してほしいと考えていた。その「市民団体模擬店」に、営利目的の業者が紛れ込んだのである。祭りなので香具師や暴力団関係者が介入してくる恐れもあるのだが、狹山池は都市公園法で禁止されているため、露天商が入ってくることはできない。実行委員会では、市民団体で不足する部分についてのみ、一定の数を費用負担と約束を取り付けて、露天商や事業者に割り当ててきた。そのルールを、根底から突き崩されることになるのである。

実行委員会によるまつりの運営だけでなく、今後の市民団体同士の協力体制を発効するためにも「市民団体データーベース」の構築を、4年に亘って提案してきたところ、大阪狭山市熟年いきいき実行委員会が市民活動支援センター業務の委託を受けたことで、白井隆代表と林田碩而副代表にその有用性を説明し、2006（平成18）年やっと動き出した。そして、実行委員会もその情報収集に協力を始めている。

この「市民団体データーベース」は、団体を活かすだけでなく、市民である個人も活かすツールにことができる。それは趣味であれ、公益なボランティアであれ、そこに参加する人は活き活きとなり、様々な市民活動がいきいきと展開されることが、まちの元気につながるからである。例えば舞踊の団体が、今まで老人福祉会館で踊りのボランティアをしているが、そのことを知る人は限られている。もし、データーベースのメモ欄に「ボランティアします」と書き込めば、沢山の照会が可能になり、地区の福祉食事会や学校の伝統文化継承教育にも協力が可能となり、発表の場を得ることになる。

また、市民活動のすべてが楽しいものばかりではない。公益性の高い困難な課題や使命に取り組んでいる団体もある。このような団体には、思いを同じくする市民や団体の参画や支援、協力が必要であるのではないか。

一例だが、高齢社会となり老・老介護も珍しくない。介護を必要とする高齢者は、地区会や自治会の役員と福祉委員が把握している。介護などのNPO法人が設立さ

れているが、意外と、地区会や自治会とのコミュニケーションが十分構築されていない。この両者をつなぐことは、介護を必要とする高齢者にとっても、両者にとっても利点は計り知れない。

団塊世代の定年が始まった「2007年問題」が騒がれているが、定年後のライフスタイルは、百人百色・一人十色である。現在只今でも、仕事で培った技術や知識をボランティアで活かしたいけれど、それがどこに在るのか見つけられずに、漂っている人が沢山いる。市民活動メニューを関連付けて整理することは、新たなまちづくりの核となるのではないだろうか。

このように「市民団体データーベース」によって、団体同士の交流を促すことも出来るし、今後最も重要視される自治組織と課題別公益団体の交流・連携・協働を促すこともできる。また年に一度、頑張った団体を表彰し、団体活動を促進することもできる。そして、実行委員会にとっては、このデーターベースに登録された団体は、「市民団体」であるという担保を確保することができるのである。

また、例えば、ある団体が持つ備品は年に2回程度の使用であるとすれば、お互いが持つ備品を集めて共有（証券）化し、使用において廉価な使用料を出し合うことで、適宜使いやすいものに買い換えることも可能ではないか。

このように様々な改善ができる「市民団体データーベース」は、これからのもちづくり必需品として、その整備が急がれると考えている。

（その後、白井・林田両氏の尽力で「市民のちから」として市民活動支援センターより発行されている）

3-5 サステナビリティ（持続可能な）の視点から

これまでの全員協力によるシビアな予算執行をさらに高める必要がある。

「狭山池まつり」は、準備費用に多大の費用が発生する。天候不良となれば損失は大きくなる。そこで一年目から、万一の場合の対策として数百人となるスタッフの食事は弁当ではなく、一日500円のスタッフチケットで提供し当日の模擬店で賄うようにしてきた。

実行委員は完全無償ボランティアで、スタッフジャンパーやタオルに至るまで、すべて自己負担。唯一、このスタッフチケットだけが支給されるもの。年間を通じて活動している部会長も、当日の3時間以上のボランティアスタッフにも、同じようにまつり当日だけ一日一枚提供される。協賛金は自由だが、協賛金を拠出して無償ボランティアをする珍しいボランティアシステムといえる。

舞台の製作や電気工事も、当日早朝から行い負担と経費を減らす工夫をしている。また、万が一の天候不良を予期して、一日開催（案）も企画段階で作成してきた。

2004年、初めて繰越適正額を超える剩余金ができることで「運営安定基金」と「周年記念基金」を創設した。まだ予算を不安定な事業所や市民からの協賛金に依存しているため、協賛金が予定通り集まらなかつたり、悪天候の場合は出費のみが発生し、実行委員会の存立 자체が危機にさらされる。しかも、まつりが盛大になるに従って諸経費額が大きくなるので、今後はレンタル備品やガードマン費用なども含め、契約案件や形態についての検討と市民ボランティアの役割の見直しが必要となるだろう。

また2005年現在、総収入に占める市補助金の割合は約30.4%だが、市民主体事業として、この比率を低減していくよといけないと考えている。そのためには、オリジナルグッズの開拓による事業収入や広告収入、市民・事業所協賛金の拡大が必要であり、初代中辻会長が提案された「市民十円募金制度」についても有効な手段と考えている。

3-6 組織運営について

市民や団体の集合体が、現在の実行委員会である。それ故設立当初に決めた各種団体・市民が横断的に協力するための「Free・Fair・Open」の方針を堅持し、金銭管理についても事務局と会計を分離し、会議毎に収支状況を報告して決算はホームページで発表するなど最善の注意を払ってきた。

また事業面でも、様々なことが可能なまつりとして定着してきたが、それは魄より始めよと言われることからお互いに自らが動くことを前提として、協力のコアを抜げてきたからである。計画段階から一緒に考え、言う人と行う人の役割分担ではなく、言う人は行う人に改善提案し、サイドフォローしてきた。行う人は言う人に報告・連絡・相談をして、学習する機会を得てきたのである。

これは、私たちの中にその道のプロがいなかったことに起因するのかも知れない。20世紀のピラミッド型組織から、人のつながりや役割を重視した逆ピラミッド型組織が未来の組織といわれ、「指導者のいないオルフェウス管弦楽団」が一つのモデルと聞いたが、素人集団である私たちは、自発的に結びつく必要性から、このように形成されてきたように思う。しかし、様々な組織の盛衰を見るにつけて、組織としての安定期や一定規模になると、個人でも団体でも主張が強く始める。これからも、お互いを尊重し、風通しのよい柔軟な組織であって

ほしいと願っている。

現在 14 部会と会計・事務局がある。高校生から 70 歳以上の高齢者まで、すべて完全無償ボランティア。ボランティア精神を持ち合わせた人々の多くに恵まれ、各部会は年々盛況になってきた。しかし残念ながら、まつり全体の裏方である準備・撤収は、限られた 20 名余りのメンバーが行っている。今後は、さらに一体感を高め全体の準備・撤収の協力メンバーを増やしたいと考えている。

また、年間を通しての活動が活発になってきたことから、事務量もボランティア活動で処理できる量を大きく超えてきた。無償ボランティアだけでなく、交通費実費支給の有償ボランティアなど、役割分担を明確にすることで、持続性のある組織としての対応が必要かもしれない。行政との協働でもいえることだが、どちらかが辛いこと、誰かだけに負担が大きくかかることは続かないからである。

3-7 実行委員会の社会責任

最近、企業の社会責任が話題になり始めているが、実行委員会も社会責任を問われるようになると思う。

まつりを開催するにあたっては、狭山池公園の占用許可・減免申請など様々な許認可を受けている。道路の交通状況においても影響を与える。夜間となる灯火輪では、青少年の健全育成にも配慮が必要であり、警察や消防署との協議における約束事もある。

Freedom is not Free. 自由であることは、何でも自由にして良いことではない。公私の区別を明確にすること、約束やルールを守ることだけでなく実行委員会の信用を高めることが、次のステップとなるだろう。

3-8 「まつり」は、そのまちの形を表す

大阪狭山市は、教育・福祉の文化都市として発展してきた。文化や福祉に携わるボランティアも多く、それぞれの場で活躍している。

しかし、全国的傾向ともいえる「個の社会」が、長く続いた弊害も少なからず持っている。その「個」や「団体」に横串を刺し、まつりを共有することで全市的に生まれるコミュニティを目指したのが「狭山池まつり」である。

今、文化や福祉だけでなく安全・防犯・防災・コミュニティ・環境・経済・・・を活動のテーマに持つ団体や市民が集まり、相互理解が始まり、私たちのまちの形を浮き彫りにしつつある。市民や団体の協力の下、それぞれの特徴やオリジナリティを大切にした、オンラインのまつりに育って欲しいと願っている。有名にな

ることや、規模の大きさを目指すのではなく「ともに生きる、ともに創る」まちそのものの「まつり」であって欲しいと思う。そして、市民のシンボルである「狭山池」を掲げ、誰もが参画できる実行委員会は、常にニュートラルを維持する必要があると考えている。

3-9 「まつり」を活用した私の提案の一例

1995（平成 7）年の阪神淡路大震災では、90% の救助は行政によるものではなく、自らも被災した市民によるものであった。私たちの町でも、自主防災組織が各地区で設立され、2006 年現在で 16 地区に拡大している。自らの生命と財産を、地区会を挙げて守ろうという取り組みである。行政と市内のスーパーマーケット等との緊急物資協定なども、取り交わされるようになった。

筆者はこういった組織的な防災活動に、市民一人一人の具体的な参画が必要と考えている。年に幾度かの防災訓練はとても大切だが、与えられる・参加するだけでなく、与える・参画するといった意識変革も併せてできればと思うのである。

例えば一つの案だが、現況、防災倉庫の毛布（2006 年現在 備蓄枚数 1,086 枚）などは、行政が購入し備蓄している。その毛布備蓄を、家庭で余分になった毛布を衛生と一定基準の元、防災倉庫に寄付をするといったドネーション行為を喚起することで貰えないだろうか。毛布に費やされる費用を、非常食や仮設便所に振り分けるのである。その集荷活動等をまつりの一部に取り入れ、併せて防災や地域コミュニティの大切さ、各家庭での保存食料の意識を啓発すればどうだろうか。

2006 年のまつりでは、大阪金剛ロータリークラブと医師会・消防署が協働で行った「AED 体験」には、100 人をこえる沢山の市民が参加した。災害時の水確保としての「井戸」も含め、市民自らの災害対策意識を醸成していくには、課題を有機的につなげ参加から参画していくことが有効だと考えている。

「狭山池まつり 2007」では、行政と団体が協働している事業を集めて、「市民協働事業キャンペーン」を開催するが、新たな協働デザインやアイデアは、まだまだあるはずである。まつりは行政活動や団体情報を広く市民に伝え、市民を巻き込む格好の場となるのだから。

4. 後記

4-1 狹山池、そして市民協働

「狭山池」は、とても不思議なため池である。高度経済成長の最中、宅地や工場用地として埋められ姿を消していった池が多くあった。町の中央にあって、そこに住

む人々に愛され続けてきた溜め池は全国にいくつあるだろうか。しかも、日本最古である。

「狭山池まつり」は、この狭山池が在ってこそ生まれ、住む人に市民活動という元気を与えていた。まつりに関わる者は、まちのシンボル「狭山池」に求心力を求め、そのシンボルを美しくすること、人心を集め続けることで、それが市内全域に波及することを願ってきた。

2007（平成19）年2月、我が国を代表する「日本の歴史公園百選」に「狭山池公園」が選定されたと、市公園緑地グループの西村孝行課長・清水孝仁・東野貞信から喜びの報告があった。大阪府の名勝地第一号、水の郷百選に続く、新たなまちの勲章である。

2016（平成28）年、狭山池は生誕1400年を迎える。その時、木々は成木となって木陰をつくり、野鳥の数も現在の84種からさらに増えるだろう。「蝶の森」は吸蜜植物が咲き誇る蝶の楽園となり、桜の名勝地として賑わい、私たち市民のシンボル「狭山池」は、私たちにまたどのような恵みを与えてくれているだろうか。

昨今、私たちのまちにとっても、地方分権の行方が大きな関心事になってきた。地方分権では、市民の意見を集約し自己決定・自己責任を原則に、それぞれの地域の個性や特性を活かしたまちづくりが求められる。

故アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディが尊敬した日本人上杉鷹山の改革は、「民を富ませること」「改革が楽しい」「身分を忘れて一体となる」「若い人材を育てる」だったそうだ。居城や家来の屋敷に桑を植え、身分を忘れて協働の可能性を求めるように思う。童門冬二著「小説上杉鷹山」を読んでそのことを知った。作中、国を立て直す改革の意思や仲間を「火種」という言葉で表現していたので、その意味を以って、文中に「火種」という言葉を使わせてもらった。

市民協働について、本市の市民公益活動活性化（促進）に関する基本方針において①自主性の尊重②多様性の尊重③対等な関係④自立（自律）化の原則⑤目的共有の原則⑥相互理解の原則⑦公開の原則⑧評価の原則を挙げている。

しかし、行政の生涯学習化と言われながら「縦割りで、融通が利かない」「約子定規」「責任を嫌がる」といった行政職員もまだ残っている。残念なことだが、市民が塞ぎ込む気分にさせられることも時折ある。しかし、忘れてならないのは、市民の声に耳を傾け、親身になって書類の作成や依頼先を教えてくれた職員が多くいたことである。行政機構や手続きは思っていた以上に分類があり、手続きは煩雑である。事業部系担当者の話が進んでも、管理部系担当者の了承を得ないと話は止まってしまう。また、担当課を跨いだような案件については、

その相談相手によって数倍の時間のロスが発生する。私たちにとって、前向きで適切なアドバイスを与えてくれる職員に出会えたことが多岐にわたる事業を生み、しかも順調に推移する元になったと言っても過言ではない。

協働の概念は、公益的な目的を同じくした行政職員と市民がお互いの立場を尊重し理解し、役割分担を担うことで合理的に、今まで以上の成果を得る方法である。

市民協働のあり方やそれを牽引するには、職員の意識変革が、まずあるべきだと強く思う。それは市民という有益な水溜りの水を、新たな世界に移すには、指先で細い溝を作り、一粒の水から先導することだと学んだからである。

行政に批判的な市民がいることも承知している。市民を信頼していない行政職員がいることも承知している。しかし、減少傾向にある市職員がより合理的に業務を遂行し、働き甲斐を得、公共サービスを維持することや、市民の幸福や生きがい、安全や福祉、環境といったまちづくりを考える時、市民協働の考え方は必要不可欠ではないだろうか。計画行政に市民という第4のアクターを取り入れた市民協働は、複雑系への、そして活力あるまちづくりへの出発にほかならない。市民自治・市民主権を考える時、この市民協働の円滑な進展が望まれるのである。

4-2遊びをせむとやうまれけむ

（＝中川なをみ「水底の棺」文中よりの言葉）

「狭山池まつり実行委員会」が発足し6年の歳月を振り返って「人は人の中で、（人として）育つ」という言葉を思い出している。

日々の暮らしの中で二者択一、取捨選択することを私たちは知らず知らずのうちにしている。何かをしている時間は、他の何かをする時間を捨てているのである。

松田道雄先生の言葉を借りれば、仕事とボランティア活動等を両立させる生き方を「パラレル」と言うそうだが、実行委員会活動に費やした時間は5%ボランティアとは程遠い時間であった。それでも続けられたのは、仕事だけでは学べない多くのことを学んだからである。

時間を作ろうとする時、それを補ってくれた妻や家族、仕事のスタッフに何かと助けられた。特に事務局と共にした松川元英の人心掌握力と事務能力の高さには助けられた。

また実行委員会活動を通じて、地域の友人と同じ話題で旧交を温められること、実行委員や団体の代表者・大阪府・市職員など新たな知己を沢山もらえたこと。音楽家協会「こんごう」の上田真紀子代表とは、6年ぶりに再会したが相変わらずなんと熱いこと、元気を頂いた。

中高生の表現俱楽部「うどい」を立ち上げた田中晶子・岡田雅美両代表には、6年前の自分を見る思いがした。各種講演会に招聘される武田会長の最近の口癖は「ようこんな年寄りを扱き使って、しゃあない男や、ほんま楽しいな」である。

そして、活動しなければお会いすることもなかつた堤の地層断面実物を世界で初めて府立狭山池博物館に移築した元大阪府副知事の金盛弥氏、実行委員会の推薦図書になった第49回青少年読書感想文全国コンクール課題図書「水底の棺」の著者中川なをみ氏にまつり開催毎にお知らせできること。とりわけ天理大学の今西幸蔵教授(現 神戸学院大学)には、市民公益活動促進委員会でのご教示はじめ「全国ボランティア研究会」で話してみなさい、「月間社会教育」に原稿を書いてみなさい、「帝塚山学院大学の私のゼミ」で学生たちに話してみなさいとその時折に示唆を与えて戴き、全体を見ながら細部まで見て活動すること、まとめ、話すということの大切さを教わった。

多くの出会いで刺激を得、そこから多くの学びを得た。それまで仕事場と自宅の行き来であった生活が、仕事とは全く関係のない本を読み、まちの至る所に行くことになり、中学生や高校生と出会い、能面を打つ人や合唱の人たちと出会い、河川管理や行政内部を知ることになったのである。

かせ！ 小さくともよい、しかし強く！ 繼続は力だ。
中庸であれ。できる、可能だ。意なく（自分の主觀だけ
で判断しない）必なく（自分の考えを無理強いしない）
固なく（一つの判断に固執しない）我もなく（相手の身
になれ）大らかにいこう。次へつなごう、ゆずり葉・・

最近は「ペコペコ人形」ではなくなつた。逆に「アザミ草 己の棘を知らずして 花と思いし 今日の今まで(詠み人しらず)」と、自戒するこの頃である。実行委員会活動を通じて、心が洗われてきたような気さえするのである。狭山池の平成の大改修が終わってから、土・日は欠かさずゴミ拾いに行っている弟と、狭山池やボランティア考を肴に酒を飲む。感謝。

今、実行委員会に大きな問題や課題がないのは、見えない所での協力者が沢山いるから。そして、すべて実行委員の頑張りであり、出会えた先輩諸氏のお陰だと思っている。

どうかこの楽しいまつりが、次の世代の夢につながるように。We Can! ありがとう。

(本文は、冒頭述べたように2007年3月にまとめた。同年5月の役員改選で3人の事務局長体制と補佐の新設。部会長の交代も進み、10年目の2011年は東日本大震災被災者支援を主に取組めた。自分達にできること、新たな胎動を感じている。泉下に眠る実行委員各位に感謝の合掌を擡げる。)

2011年04月30日現在

We Can!



**狭山池まつり実行委員会
(2001年11月設立)**
実行委員会(179名)



- ★ 各部会長を中心に、関連団体と協働して事業に取組む。
- 1) 灯火輪部会
 - 2) さやま検定部会
 - 3) 龍神舞台部会
 - 4) エコロジーランド部会
 - 5) クラシックカーミーティング部会
 - 6) 狹山池水面活用事業部会
 - 7) ふれあい部会
 - 8) こうりゅう広場部会
 - 9) フリーマーケット部会
 - 10) 市民団体模擬店・企業PR部会
 - 11) 歴史クイズ＆スタンプラリーパー部会
 - 12) 本部収益事業部会
など17部会にて構成

- ★ 毎月第四土曜日 年間を通じての活動。
ごみの量は毎月2~3t 参加者・団体相互の情報交流
- 1) **クリーンアクション部会**
狹山池の清掃 連續116回実施
流入竹木のチップ化と散布
ちょいボラ
・電動空き缶つぶし機
・ブルトップ回収等
 - 2) **水質調査・改善部会**
水質検査(毎月)と現況揭示 PR
全国一斉水質検査(年一回)
水質浄化事業実施
・葦の植栽
・空芯菜の筏栽培

**狹山池さくら満開委員会
(大阪府+大阪狭山市+実行委員会)
(2003年12月設立)**

1. 安藤忠雄講演会
2. 狹山池の自然環境整備
さくらの植樹
バタフライガーデン新設・整備

**府立狭山池博物・市立郷土資料館
協働運営委員会
(大阪府+大阪狭山市+実行委員会)
(2009年3月設立)**

1. 館の運営方針・事業計画の策定、実施
2. 市民ニーズに基づく企画展・催物の実施
3. 博物館屋上ガーデン魅力づくり事業
4. 市民ボランティア(運営・ガイド)の新設



狭山池クリーン・アクション



流入竹木をチップにする



竹木チップを桜の保水堆肥に



水質検査



空芯采の筏栽培



活動報告パネル展

第2章 歴史的遺産と魅力あるボランティアを活かしたまちづくり

重岡 利栄子

福岡県遠賀郡芦屋町山鹿

60m未満の丘陵地帯となっている。

町の交通は、芦屋タウンバス及び北九州市営バスが運行しており、JR遠賀川駅・折尾駅に20~25分でアクセスしている。また、JR黒崎駅へは急行バスを利用し、約35~40分でアクセスしている。北九州市の小倉までの所要時間は約40分、北九州市に職場を持つ人の通勤圏内にある。

芦屋町と他の市町を結ぶ道路としては、北九州市から西に向かう路線として国道495号が町の中央部を縦断し

1. 町の状況と特性

芦屋町は、福岡県の北端に位置し、東西4.4km、南北5.3km、行政面積11.42km²の町域です。しかし、航空自衛隊芦屋基地と町のはば中央を流れる一級河川遠賀川が町域の3分の1を占めているため、実質的な行政面積は約7.3km²となる。

町の北東部にかけては、北九州市若松区と接する標高



芦屋町の位置図



はまゆう群生地（町花）

ており、ポートレース芦屋前で北九州・芦屋・福岡線（主要地方道）と接続している。

町の人口は約 15,500 人（世帯数 6,666）で平成 12 年以降、老人人口比（65 歳以上）が年少人口比（0～14 歳）を上回っており、少子高齢化の進行がうかがえる。

芦屋町の特性としてまず上げられるのは、美しく豊かな自然、特に玄海国定公園を臨む海岸線の美しさです。福岡県の天然記念物のも指定されている「はまゆう群生地」や遠賀川をはさんだ東側には洞山に代表される迫力ある奇岩が連なる海岸、西側は白い砂浜が広がる海岸と変化に富んでおり、さらに海岸線にはサイクリング道路が設けられ、大切な観光資源となっている。

町を二分する遠賀川の河口では、地域特性を活かした「花火大会」や「精霊流し」、航空自衛隊芦屋基地では「基地航空祭」などのイベントがある。

また、町内には古い歴史を持つ神社仏閣や文化財も多く、いにしえの芦屋町をしのばせるものに芦屋町の歴史を代表するものに「芦屋釜」があげられ、国の重要文化財に指定されている 9 点のうち 8 点を「芦屋釜」が占めている。この芦屋釜の復興と茶の湯文化の普及をめざし



芦屋釜地真形釜（あしゃあられじしんなりがま）

た「芦屋釜の里」、考古資料や農機具、交易関係品を展示した「芦屋歴史の里」などと文化にふれることができる町として知られている。

2. 芦屋町の歴史と歴史的遺産を活かしたまちづくり

「芦屋千軒、関（下関）千軒」と、うたわれていた芦屋町。

その歴史は古く、縄文時代すでに人が住んでいたことが山鹿田屋地区の山鹿貝塚（県指定遺跡）が今から約 45 年前にここで 20 体以上の縄文人骨が発掘されて、特に 2・3・4 号人骨は貴重で全国的に有名である。ほかにも山鹿貝塚近辺（夏井が浜）一帯には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多くみられている。

『古事記』と『日本書紀』にも芦屋の歴史は記表されている。

平安時代末に登場してきたのが山鹿氏で、山鹿兵藤次秀遠は源平合戦最後の壇ノ浦で平家とともに亡んだが「九州一番の精兵にて」（『平家物語』）などと書かれ、忠と勇の将であったことが知られている。

鎌倉時代、宇都宮氏系の山鹿氏がこの地を支配しますが、室町時代にはその分流である麻生氏が立場を逆転させている。南北朝時代頃、鑄物師集団がここを本拠地として腕をふるい、梵金、鰐口、茶釜などを製作していた。特に茶釜は「芦屋釜」としてその名を知られ現在も尊ばれている。

平成 3 年には町制施行 100 周年記念事業として「芦屋釜展」が開かれ、「ふるさと創生資金」を基に芦屋釜の調査、復興、茶道の振興を目的とした「芦屋釜の里」ができ、平成 7 年 5 月 1 日にオープンした。

芦屋釜の里は、3000 坪の日本庭園に資料館（町所有の釜や復元した釜や梵鐘、製作などの工程資料など展示）、大茶室「蘆庵」（ろあん）、小茶室「吟風亭」（ぎんぶうてい）、「立礼席」（りゅうれいせき）と工房がある。

芦屋釜の調査はこれを期に本格的に各地、所縁の場に行き調査をしている。

芦屋釜の復興には、茶の湯釜の重要無形文化財保持者（人間国宝）故角谷一圭先生に技術指導をお願いし、三浦一孝氏を派遣して頂き、基本技術の指導を 3 年受けた。その後、遠藤喜代志氏に指導を受けている。

オープン当時、鑄物師を育成するために一般公募を行ない 20 名の応募者があり 1 人を人材育成職員として 16 年間とし採用した。引き続き平成 17 年に、さらに 1 名採用して復興、振興に励んでいる。

だが、初の人材育成職員で鑄物師として、平成 24 年度で最終年を迎える。

今現在、鋳物師は貴重な人材であり、巣立っていく鋳物師・八木孝弘氏に聞いてみた。

「ふらっと、ドライブ途中に芦屋釜の里に寄り道し、三浦氏に導かれ、意識や考え方の変化があった。これからも『芦屋釜』を追い続け、伝えていくこと」と言って下さった。

筆者は、この言葉を聴き、「物を作り出す仕事の素晴らしさ、歴史の継承していくことが出来る喜び」を感じたのである。

芦屋釜の里は、季節に合わせた茶会をはじめ、体験講座、コンサート、学芸員や鋳物師による出前講座、講演会、各種団体の「茶会」を行う場としての貸し出し、生涯学習の場、職場体験の場としても活用されている。

また、芦屋町内の園児から中学生まで、茶の湯の体験をしている。

そして、観光の場としても注目されるようになり、訪れる人のやすらぎの場所となるように目指している。

事業運営は、行政（生涯学習課社会教育文化係）が主体であるが「文化ふれあい実行委員会」や「釜の里サポートーズクラブ」と町民がかかわりを持っている。

平成18年の春から「さくらコンサート」、秋の「秋の宵コンサート」が行われているが、その運営を協働している。このコンサートは有料だが毎回、好評である。

こうした芦屋釜の里の茶会などは、表千家・裏千家・小笠原流の町内で茶の湯の指導者の方々が協力をしている。

その他に国の特別指定の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」である「芦屋の八朔行事」がある。

芦屋町では300年前から伝わる伝統行事です。「八朔」とは「八朔の節句」とも呼ばれている。初節句を迎える子どもの健やかな成長を願い、男の子には藁で作った馬

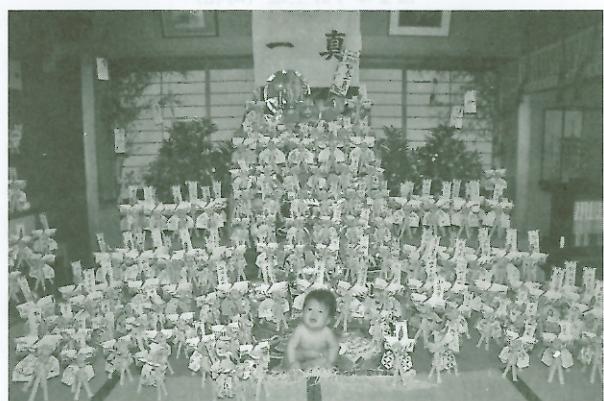


大茶室（夕暮れ）

町制120周年を記念して歴史などを題材に一般公募した「芦屋かるた」を作り、先日それを使い芦屋釜の里、大茶室で初の「かるた大会」が行われた。

を作り、女の子には古米の粉で男雛女雛や鶴亀などの細工団子を作ります。旧暦の8月1日、現在は9月1日～2日にかけて祝われる。

この八朔の行事を絶やさぬよう、また町の活性化を図ろうと、住民主体で行政や学校が一体となり「筑前芦屋だごびーなとわら馬まつり」を毎年9月に行ない、わら馬作りやダゴビナ作りに、約100名以上のボランティアがかかわっている。当日はわら馬を約500体、だごびーな約200体が会場に飾られ、わら馬やだごびーな作りの体験コーナー等があり、年々盛んになっている。



芦屋の八朔行事「八朔の馬」



「団子雛（ダゴビナまたはダゴビイナ）」

3. 魅力的なボランティア活動でまちづくり

芦屋町では「芦屋町生涯学習基本構想」を平成20年に策定し、住民が生涯にわたり「いつでも」「どこでも」学ぶことができ、学んだ成果が活かされる地域社会をめざし学習機会や体験活動などを体系的に取りまとめた「あしゃ塾」でライフステージに応じたさまざまな生涯学習講座を提供している。

また平成22年度3月より「芦屋町ボランティア活動センター」を新設、今まで個々に活動をしていたボランティア団体やNPOを集約把握することができるよう

なった。

39団体が登録しているが、特に先進的かつ、行政が取り組む前から活動をしている「八朔の会」がある。

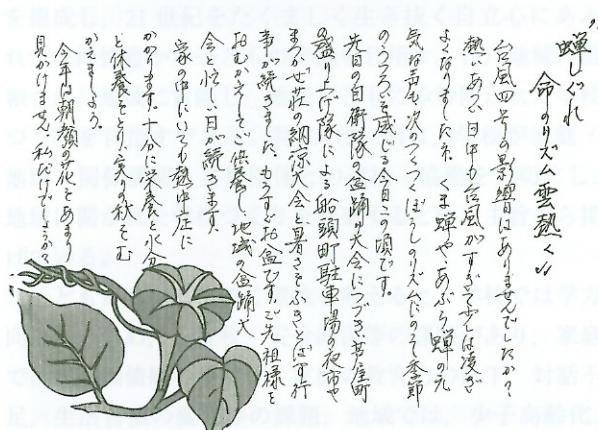
この「八朔の会」は、昭和60年に芦屋町の「給食事業」に協力するためにボランティアグループを結成し、高齢者の方々にお弁当を調理し直接手渡すことをしている団体である。結成当時は、高齢者介護が施設から在宅(地域)へと変わり始めたころで八朔の会は「在宅サービス」の一翼を担うようになった。

平成3年より、そのお弁当と一緒に「お便り」を添えるようになり、その「お便り」は3,000通を超えている。毎回、八朔の会のメンバーの心温まる「お弁当」と「お便り」は高齢者の方々が、やすらぎと笑顔を与える重要な役割を持っていると思われる。

八朔の会の活動は、先進的な活動であるとともに地域力によって高齢者の安心・安全を確保するものである。



八朔の会の活動（お弁当の授受）



八朔の会の活動（お弁当に付けるお手紙）

高齢者の方々が季節の事柄や町のイベントなどを取り入れ楽しく読んでいただくように「ありがとう」と言つていただけ、それを励みに次に繋げていけているようである。

継続は力なり、「出来ることを出来る時に」無理をしないで楽しみながらやるというボランティアの基本を改めて築かされたことである。

4. 行政、地域、学校一体のまちづくり

芦屋町は今年平成23年度、町制120周年を向かえ多様なイベントをしかけ、それをきっかけに新たなまちづくりの基盤となっている。

10年前より「芦屋町小中合同音楽祭」が行われている。

これは、音楽、特に合唱を通して音楽への興味、関心を高める。音楽活動を通して豊かな心を育み、さらに小中の連携を深める機会と、地域のコーラスグループなどの参加を呼びかけ、学校と地域との連携を図る目的である。

今年度は更に住民にも参加を促し「町制120周年記念芦屋町民音楽祭」として行政、地域、学校が一帯とな



町民音楽祭



ASHIYA シンフォニック吹奏楽団

った事業である。また「町民合唱団」や町民プラスバンドとしてメンバーは、芦屋中学校の吹奏楽部の卒業生を中心に「ASHIYA シンフォニック吹奏楽団」が結成された。

学校教育では郷土について学ぶ特色ある学習『あしや学』を教育課程に位置づけることによって、子どもたちがふるさと「芦屋」の素晴らしさを知り、町や地域・母校を愛する心情を培い、「芦屋の子どもは芦屋で育てる」という町の教育における基本的な理念に対する、教職員の理解や共同参画意識を深めると共に、実践事例集にまとめるこことによって実践の拡充を目指すことにある。

5. 今後の課題

地域で取り組む課題は、人材の発掘、養成等まだまだあり、住民一人ひとりが学習能力を發揮し、まちづくりで生きがいやヨロコビを感じられる町にしたい。

参考文献

- 平成 23 年度 芦屋の教育 第五号（芦屋町教育委員会）
芦屋釜 - 室町の名器、再び - 平成 20 年度（芦屋町教育委員会・芦屋釜の里）
芦屋の八朔行事（芦屋町文化財調査報告書 第 16 集）
芦屋町ボランティア活動センター通信「HAMAYOU」より
(芦屋町ボランティア活動センター)

第3章 地域に貢献し地域とともに歩む 『開かれた学校』づくりをめざして

長野文昭

南白浜小学校長

1. 学校・地域の概要

本校は、和歌山県白浜町の富田川下流の紀伊富田駅より約500メートル西方の低い台地にあって、東方一体は広い田園地、西方は黒潮洗う紀伊水道に臨み、緑に包まれた静かな自然に恵まれた学園環境にある。

校区は、中地区と栄地区に分かれ、さらに中地区は10集落に、栄地区は8集落に細分されている。中地区は戸数307戸・人口652人、栄地区は戸数416戸・人口1038人（平成23年3月31日現在）である。当地域は、古くから『教育立村』としての教育尊重の気風が高く、学校の伝統に誇りを持ち教育への関心度が高い。そのため、学校行事への協力やPTA活動に積極的である。平成23年度の児童数は86名（普通学級6・特別支援学級1・合計7学級）であり、教職員数は17名（非常勤講師、給食調理員含む）である。子どもたちは、恵まれた地域環境の中で育ち、素直で明るく、全校を通して大変仲が良い。また、高学年が年下のこの面倒を見る校風は、親の代から受け継がれてきた伝統である。

2. 南白浜小学校の目指す『開かれた学校』づくり

本校の学校教育方針は（1）地域に根ざした教育課程を編成し、21世紀をたくましく生き抜く自立心にあふれた人間性豊かな子どもの育成を目指す。（2）地域に信頼され、地域に貢献し、地域とともに歩む開かれた学校づくりを目指すである。特に（2）項は、学校が家庭・地域・関係機関・各種団体との連携・協働を大切にし、地域に開かれた学校づくりを推進するという主旨から掲げている。

子どもたちを取り巻く環境を考えると、学校では学力向上、いじめ、不登校、安全確保等の課題があり、家庭では親の価値観の多様化、家庭の教育力の低下、対話不足、生活習慣の変化等の課題、地域では、少子高齢化、核家族化、人間関係の希薄化、規範意識の低下、コミュ

ニティの崩壊等の課題などがみられる。そういう複雑な環境の中で、子どもたちの育ちと学びを支えるには学校だけでは不可能であり、学校・家庭・地域の住民が一体となって「未来の宝・地域の宝・家庭の宝」である子どもたちを育てる視点を大切にしていかなくてはならない。また、学校は地域を大切にし、子どもたちと一緒に地域に少しでも貢献する姿勢が大切である。そういう観点から、学校は「地域のまちづくり・地域づくりの拠点」であり、「地域の人々の生き甲斐づくりの拠点」にならなければならぬと考えている。

最近の教育改革の流れをみると、教育基本法第13条には「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」とあり、学校教育法第43条には「小学校は、当該小学校教育活動に関する保護者及び地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため」とある。更に、新学習指導要領の第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項2(12)に「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。」とある。

本校では、教育改革の流れに先立って家庭・地域と一体になった学校の活性化を図るために、保護者の方や地域の方々との対話を重視している。子どもたちの確かな育ちと学びを豊かなものにするためにいかに協働するか、また、地域の方にとって『我が母校』である学校に自由に来ていただき、自己の「生き甲斐づくり」の場にしてもらえないかと話し合ってきた。

特に、平成20年度から「きのくに共育コミュニティ推進事業（全国的には学校支援地域本部事業）」の研究指定、平成21年度から「市民性を育てるランドマーク事業」の研究指定の指定を受け、「地域に貢献し地域とともに歩む開かれた学校づくり」の取り組みはできないか考えてきた。本報告では、「きのくに共育コミュニティ推進事業」と「市民性を育てるランドマーク事業」を

中心に具体的な活動を紹介したい。

3. きのくに共育コミュニティ推進事業

「きのくに共育コミュニティ推進事業」は、県教育委員会が学校・家庭・地域が子どもを取り巻く問題や教育の課題・願いを共有し、共同して解決に取り組む「きのくに共育コミュニティ」の形成を目的に始めた事業である。本校ではこの事業を受け、地域共育コーディネーター・区長・老人会・婦人会・公民館分館長・PTA・関係諸団体の代表の方と「南白浜共育コミュニティ推進会議」を設置し、学校支援ボランティアを募集して、学校行事・授業のゲストティーチャー、特別活動の指導者等の支援をお願いし、子どもの豊かな学びの実現を目指している。具体事例を挙げると、4年生の社会科の授業ではゴミ説法名人に来ていただきゴミの分別やリサイクルについての指導。1・2年生生活科では農業をしている野菜作り名人の指導。3年生社会科ではレタス農家のレタス野菜作り指導。4~6年生体育科においては元国体選手であった人による水泳指導。クラブ活動ではJA婦人部の方による郷土料理教室、サーカスクラブのコーチによるサッカー指導、教育委員会職員によるニュースポーツ指導、地域の名人による茶道教室や生け花教室の指導。更に、地域の版画家による4年生図工科の版画指導など、あらゆるジャンルにわたって学校支援ボランティアの方の協力を得ている。

昨年度よりPTA有志により「図書ボランティアグループ」が結成され、約10名の方が月1回活動を行ってくれている。本の読み聞かせ活動や本のフィルムカバーかけ、図書室の四季折々の飾り付けなどをしていただき、読書活動の推進の大きな力となっている。

更に、婦人会・老人会の方は子どもたちの通学の安全確保のため、「見守り隊」を結成し、あいさつ運動、交通安全指導、不審者対応など、毎朝通学路に立って子どもたちを見守ってくれている。

全学年児童と介護予防教室「ぴんしゃんクラブ」(高齢者の方の体を鍛え寝たきりにならないように運動するグループ)とのふれあい交流も実施している。各学年ごとに交流内容は違い、6年生は戦争体験や昔の暮らしのゲストティーチャーをお願いし、1年生は昔の遊びなどを教えてもらっている。反対に、5年生は交流で高齢者の方にパソコンを指導し年賀状づくりなどを行っている。

以上紹介したのは、地域人材を活用したゲストティーチャーによる学校支援の一部であるが、子どもたちの学びは豊かなものになっており、同時に本校教職員の学び

にもなっている。特に、若手教員にとっては良い研修となっている。更に、注目する点は、ゲストティーチャーとして学校に来て下さった方々が、子どもたちとの交流を大変喜んで下さり、自分たちの生き甲斐づくりにもなった、子どもたちに元気をもらった、学校に来れて大変うれしいといつも話して下さっている。地域の人材活用が学校の学びの活性化になっており、また、同様に、保護者を含む地域住民の方々の人生の活性化・地域の活性化にもなっている。

4. 市民性を育てるランドマーク事業

和歌山県では「市民性を育てる教育」を推進しており、人や社会とのつながりを大切にしながら、地域社会の一員としてよりよい地域づくりに積極的に参加できる資質や態度を育てようとしている。「自立」(自分を高める)、「共生」(豊かに関わる)、「社会参加」(進んで役立つ)を三つの柱としている。先に述べたように、本校は「きのくに共育コミュニティ」の推進をしておりあらゆる形で学校支援を受けている。また、本校の教育方針では「地域に信頼され、地域貢献し、地域とともに歩む開かれた学校づくり」を大切にしている。その意味で、「市民性を育てる教育」は重要であるととらえ、小学生なりに地域のために何ができるかを問い合わせながら日々の教育に取り組んでいる。次に、本校の「市民性」を育てるための地域貢献活動の具体的事例を紹介する。

(1) 「花いっぱい活動」

「子どもの笑顔と花と緑いっぱいの学校」の学校スローガンのもと、春と秋の年2回それぞれ約10000個ほどの花の種を巻いて育て、保護者の皆さんはじめ地域の高齢者の方々や連携している中学校生徒と一緒にポットに植え替える。この活動は、なかよし班(縦割り班)を活用し低学年に高学年が教えながら行う。花が大きくなったプランターは、学校近くにあるJR紀伊富田駅や図書館、交流している特別養護老人ホーム「百々千園」、校医さん、役場支所などに配っている。また、地域の方々や保護者の方にも花苗をプレゼントし、家庭や地域の公園、花壇に植えられている。この活動を通して、子どもたちの優しい心、命を大切にする心を育てる目標にしている。また、子どもたちは、学校と地域が花いっぱいになって皆さんに喜んでいただきたいと願って活動している。

(2) 「中大浜清掃活動」「一徳さん清掃活動」

学校近くにある「中大浜」の清掃活動を年2回行って

おり、この活動もなかよし班活動として行っている。「ふるさとの海をきれいに」と高学年が低学年にゴミの分別方法を教えながらゴミを拾う。また、学校近くにある「一徳さん」の清掃活動も行っている。「一徳さん」は今から73年前の12月20日に起こった火災によって多くの人が命を落とした悲しい場所である。81名の方がなくなり、そのうち16名が小学校児童であった。慰霊の思いを込めて8月初旬と12月20日の早朝、年2回清掃活動を地域の方と一緒に行っている。その際、地域の古老から戦争や火災で命を落とした地域の歴史について話をしてもらい、命の大切さについて教えていただく意義深い清掃活動になっている。

(3) 伝統文化「さぎっちょ」復活

一昨年、校区の中地区で約50年前に途絶えていた1月の行事「さぎっちょ」を復活させたいので協力をほしいという話があり協力することになった。さぎっちょは正月の松飾りなどを持ち寄って燃やし、残り火で焼いた餅を食べて無病息災を願う行事である。一般に「どんど焼き」とも言われている。子どもたちは当日までにさぎっちょの歌を録音したり、願いを短冊に書いたりする。当日は、正月の松飾りやしめ縄、願いを書いた短冊、大漁旗を積んだ山車を引っ張って中大浜前の道を練り歩く。年男の子どもが太鼓をたたき、大人がホラ貝を吹く。最後に中大浜で火をつけ燃やす。今年で復活3年目になるが、地域の高齢者の方の喜ぶ姿を見ていると、子どもたちの協力で伝統文化が復活したことは大変有意義である。

(4) 「中大浜松林復活活動」

この松林保全活動は、本年までの5年間、中区と学校が県林業試験場と一緒に取り組んでいるもので、松の成長を助ける松露というキノコの発生を検証するものである。子どもたちは、試験場職員の方に松林が風や砂、津波などの災害から地域を守る働きがあること、塩害から田畠の作物を守ることなどを指導してもらひ環境学習の一環になっている。試験地では落ち葉を搔いたり、いくつものパターンの試験地を造ったりして、松露の発生を調べている。子どもたちにとって、地域の方々と一緒に行う松林の保全復活作業は、ふるさとを愛し大切にする心の育成になっており、地域の一員としての自覚が育っている。

(5) 南白浜小学校フェスティバル

毎年11月に「南白浜小学校フェスティバル」を開催している。学校と公民館、地域の各種団体が実行委員会

をつくり、学校が中心となって楽しい行事を計画する。子どもも地域の人たちも元気になってもらうための「おまつり」である。学校は、児童会を中心になかよし班の縦割り集団で各班ごとのゲーム等を考え、当日1年生から6年生まで役割分担し、幼児から高齢者まで楽しんでいただく体験コーナーを企画をする。また、3年生以上で地域にフェスティバルの手作りチラシを全戸配布する。1・2年生は、フェスティバルのポスターをつくり地域に掲示してもらう。更に、各学年ごとの合奏や劇、踊りなどの出し物による学習発表にも取り組む。公民館やPTAも色々なゲームコーナーを考え体験コーナーをしてくれる。PTAは昼食用に焼きそばや炊き込みご飯を作ってくれたり、地域の方々が芋煮を作ってくれたりする。更に、PTA主催のバザー、児童会の花苗バザーや特別支援学級児童の育てた野菜バザー等もある。この行事は、地域の方が元気になるよう、地域の各世代間の交流を深め、地域の絆がより強いものになるようという願いから行っている。子どもたちの主体的な取り組みを大事にし、「おもてなしの心」で保護者・地域の方に喜んでいただこうと取り組んでいる。今後も、学校を中心とした「地域作り・まちづくり」のフェスティバルに育てていきたい。

5. おわりに

学校と地域・家庭の連携・協働について、本校の些細な取り組みを「きのくに共育コミュニティの形成」「市民性を育てる教育」の二つの事業を紹介させていただいた。この事業を推進する中で、地域の方、保護者の方によつて、子どもたちの学びが深化し、生きる力の育ちにつながっていると感謝の思いでいっぱいである。また、いろんな方々と子どもたちのふれあい交流を通して、人間として本当に大切にしなければならない「地域を愛する心」「人間としての絆の大切さ」等を教えていただいた。また、いかに地域の方々が子どもたちを地域の宝として大切にされているかを実感した。学校は、今まで以上に、地域に貢献する学校づくり、地域を大切にする「市民性」をもつた子どもたちの育成に励みたい。

今後も研究・実践を深め、「社会のための教育」から「教育のための社会」づくりに向けて、学校教育の再生、地域の教育力の再生を目指していきたい。

資料來源：〈2012年中國移動互聯網發展報告〉，中國互聯網信息中心，2012年。



【花いっぱい活動】



【由士派松林復活活動】



【德之久遠標註】

【一億さん肩揺活動】

第4章 京都・亀岡 町家を繋ぎ生みれたもの

はじめに

ここに挙げる実例は、なんら特別なものではなく現実に筆者自身学識経験者でもなく一市民であり、「ここに街があり、残すべきものがあり、人がいるから生まれた」新しいコミュニティーの形として見ていただけたい。

1. 魯岡市の概要

京都市から西へ 15 キロに位置する亀岡市は、隣接す



生まれたもの

佐藤理恵

る京都市とJR山陰本線・国道9号・京都縦貫自動車道などで結ばれ、また大阪府とも隣接しており、京都市へは電車でも車でも約20分、大阪市へは約1時間と、暮らしや経済はもちろん、観光にも便利なまちと言われている。

京阪神都市圏とのすぐれたアクセスと、豊かな緑につまれた快適な生活空間を有する亀岡市は着実な人口増加を続け、現在は京都府内3位の人口を有しているが、近年人口増加は低迷している。

豊かな自然が育んだきれいな地下水を水源とする亀岡市の水道水は、厚生省の「おいしい水研究会」で「おいしい水道水」に選ばれました。（人口5万人以上の都市で、京都府では亀岡市だけです）亀岡市は美しい自然とおいしい水のある健康のまちである。

観光資源としては京都・嵯峨からの「観光トロッコ列車」や、嵐山へ急流を一気に下る「保津川下り」、京都の奥座敷としての湯の花温泉などがあげられる。また、1年を通じて多彩なイベントや、にぎやかで華麗なお祭りが行われる。中でも10月に行われる「亀岡祭」では11基の山鉾が城下町を練り歩く姿が見ものである。国の重要無形民俗文化財に指定されている、佐伯灯籠人形淨瑠璃も最近では全国的に有名である。

京都府内最大の農地を有する亀岡市は、京に都が置かれる以前の奈良時代から豊穣の地として注目され、丹波国分寺・国分尼寺が置かれた。

また、足利尊氏や明智光秀は丹波・亀岡の地から動き、日本の歴史を変えたことなどから、亀岡市は、古都・京都よりも歴史が古く、歴史の変革期に動いたまちである。しかし豊臣氏の居城・大阪城包囲網の拠点として建てられた「亀山城」だが今はなく、天守台の石垣や堀跡を残すのみとなり、現在は宗教法人大本の本部となっている。

2. 亀岡駅周辺地区まちづくり協議会

亀岡駅周辺地区まちづくり協議会は、市の概要に挙げたような古くからの城下町として魅力的な資源にあふれるとともに、JR 亀岡駅や亀岡駅北側の整備など、新たな魅力が付加されようとしている亀岡駅周辺地区を、“暮らして良かった”“また来てみたい”と思っていただけるようなまちにしていきたいと考え 2005 年に設立。

亀岡のまちについて広く知っていただくために、城下町内に駒札の設置事業を実施しガイドマップを作るなど、市内外の方に街に親しんでいただく工夫をすると同時に、1つでも町家を残したいとの思いから、風情ある本町にある「子安邸」を借り受け、事務局を町家に置いた。ご婦人お一人で長年守ってこられた「子安邸」は、とても手入れが行き届き綺麗に残っている。事務局を町家に探し出した協議会であったが、空き家となった町家は多いものの、貸していただける町家を探すことは簡単ではなかった。しかし「この町家だけはどうしても残してほしい」との前家主のご遺言を引き継がれた、現家主の思いを引き継ぎ町家を事務局としてお借りし再生することになった。

3. 城下町の町家を残す

慶長 15 年に城づくりの名手として名高い藤堂高虎が担当し完成した亀山城。

当時の亀山城と城下町は、内堀・外堀・惣堀と呼ばれる三重のお堀で周囲をぐるりと囲まれている。お堀にそって沢山の寺社が軒を連ねているが、これは攻めてくる敵に対して、寺や神社の建物や敷地に陣を張れるようにしたためである。今でも城下町を守ると同時に、街の人々の心を癒してきた古き寺院が数多く残っている。

中でも珍しいのは、外堀沿いにあたる本町通りからこの字型に繋がる辻子（づし）には、三つの寺院（法華寺・寿仙院・本門寺）と 5 つの祠（妙見さん・鬼子母神さん・天神さん・弘法さん・大黒さん）が立ち並び、近年では神々の集まるパワースポットとして話題である。

惣堀は亀山城の南側一帯に広がる城下町をぐるりと囲み、いわば街そのものがお城を守る砦であった。その内側には先度挙げた寺や神社、外側には下級武士の長屋が配置され、侵入者が容易に本丸に近づけないよう工夫されている。蛇行した道は迷路のように複雑で、住民エリアは武家地と町人地に分けられ、三の丸の跡地である内丸町や、呉服町・塩屋町といったふうに、その名残から探ることができる。



亀岡市本町

町家と言われるものには平入町家と妻入町家がある。屋根の山形なっている面を妻、対して平面の面を平といい平側に入口があるものを平入、妻側にあるものを妻入りと呼ぶ。

京都と丹後地方を結ぶ旧山陰街道が通る亀岡は、古くから都と地方の文化が交流する地であり、それは「平入町家」と「妻入町家」が混在する独特の街の風情にも現れている。京都市内とはまた違う町家風情が見られる。

現在も城下町内には町家が点在し、格子戸（こうじど）虫籠窓（むしこまど）駒寄せ（こまよせ）犬矢来（いぬやらい）白漆喰（しろしっくい）屋根の上に突き出た小屋根から煙を出す「突出し」など、古い暮らしの中で育まれてきた美しい住まいの形が残っている。

また古くから豊富な地下水に恵まれた水の街亀岡。湧き水を生かした酒、醤油などをを作る商家が町家として多く残っている。

そんな町家が 10 年前にはまだまだ残っていた亀岡だが、現代の住宅に比べると住みにくい、老朽化や維持管理費用の問題、世代交代などの問題により随分取り壊され、残る町家は今では点在となっている。協議会が「子安邸」を借り受けた当時は、唯一町家が三軒並びで残る風景であったが、真ん中の町家を取り壊し集合住宅が建つという問題が持ち上がり、住民の強力な反対運動が起ったにも関わらず、残すことは出来なかった。

城下町及び町家を残したいという市民の声から、亀岡市は 2011 年に景観条例の策定を進めたが、前に挙げたような町家を残すこともできず、残すためではなく新しい街を作るための内容であった条例案は、住民の反対により差し戻しとなり、現在も検討中である。

4. 本町町家ショッピング

亀岡駅周辺地区まちづくり協議会は「良い街に」「町

家を残すために」と事務局に町家を借り受けたものの、実際は仕事を持つ男性集団で事務経費も計上されていない会に事務局を運営するすべではなく、事実上名前だけの事務局ができ、町家は締め切ったままとなっていた。

しかし、そのままではいけないと立ち上がったのは当時事務局員として当会のメンバーに属し、街のどんな場所にも賑わいを作りたいと移動販売を始めた筆者である。

2007年秋の亀岡祭より「本町町家ショップ」と名付け、まずは筆者が休みの日にカフェとして町家を開けることにした。1人では開けられる日は週に2日が限界であった。地元住民の協力が必要と声掛けをしたところ、当時の自治会長の奥様が参加してくださることになり、女性の力で町家を盛り上げていく形ができた。

自治会組織というものはどこの街も思ったよりスマーズなものではなく、突然できた町家ショップはすぐに受け入れられるものではなかった。同時にまちづくりや観光拠点を掲げる亀岡市及び同会ではあるが、観光客が歩くまでの街ではない城下町の中で閑散とした日々が続いた。

ボランティアで地道に営業を続ける中、まずは本町の長老たちが集まった。

そこに子供たちが加わった。新興住宅などの開発で核家族時代を長く続けてきた日本。ここ亀岡も例外ではなく、高齢者が残り、鍵っ子の子供が多くいた。家族が希薄になっている現代に、町家に集まる高齢者と子供たちにより新しい形のコミュニティーが生まれることとなる。

ある小学生が「なんかここ、落ち着く」という。彼らにとって明治の建物が懐かしいはずではなく、人がいる空間が落ち着くのであろう。



本町町家ショップ

町家前に住むご婦人は、町家ショップが出来る1年前にご主人を亡くされていた。息子さんが同居されていたものの、帰りも遅く誰とも話さない毎日が続き「このままでは私はおかしくなる」と感じていたという。そんな時突然自宅前に出来た町家ショップから、筆者の笑い声が聞こえるようになり仲間に加わったことで、「私は救われた」と今では生き生きと町家ショップの一番の協力者として、留守の町家を気にしてくださり、町家前のお掃除をしていただくなど、ここにも新しいコミュニティーが出来上がる。ボランティアというニュアンスとは違う協力者による町家運営により、5年という歳月がたち本町には町家ショップという場所が構築された。

他町の方から「本町には良い場所があつていいね」といわれる言葉に、本町住人が優越感にひたれるような今ではそんな場所である。

はじめは観光拠点というところに近づくべく、1人でも多くの方にと意気込んだ。しかし宣伝などに使う費用もなく、この地元協力者たちがいなければここまで町家ショップが続くことはなかった。現実に街の人が集まり、入りにくいという声も聞くが、最近増加傾向にある口コミなどで来てくださる観光客の方々は、1度来てくださると必ずもう一度来てくださる方が多い。

それは目線を広げるのではなく、足元を固めることに体制を変えたことにある。町家ショップの中には、年齢問わず自然な笑顔があふれる。来てくださる方をなんのためらいもなく受け入れる人たちがいる。それは町家の温かさがそうさせるのであろうと思う。そんな街の人たちと町家を守り、大切なものを繋いでいくこと。そのことが人づくり・街づくりに繋がる事例として続けていきたい。

終わりに

はじめに言ったとおり、ここに挙げたことは特別ではない。思いのある人はどの街にもたくさんいるはずである。街に残すべきものがあり、思いのあるところに協力者が集まった形であり、人がいるからできたものである。

コミュニティーは行政や企業に作れるものではなく、集まる人が作り出せるものである。

わが街の亀岡周辺地区まちづくり協議会「本町町家ショップ」が、良い事例としてわが街にも、他の市町村にも町家ショップのような新しいコミュニティーの形がたくさん生まれることを願っている。

第5章 福津市型地域づくりの課題と 解決策に関する考察

黒田俊彦

福岡県福津市生活安全課長

福岡県福津市では、生涯学習のことを「郷育（ごういく）」と呼称し、「育てられた地域を自ら育てていこう」という理念の下、福津市型の地域づくり「郷（さと）づくり」を推進している。

「郷育」とは、合併前の2000（平成12）年3月、第4次福間町総合計画で初めて登場した概念である。「郷育」の「郷」という字は、「地域」「自分たちが住んでいる所」「故郷」という意味を持っており、「郷」によって育てられ、ひいてはみんなで「郷」を育てていく姿をイメージし、福間町型の生涯学習の基本理念に据えていた。この考え方は、合併によって福津市になった後も、そのまま引き継がれている。

1. 福津市の概要

福津市は、旧福間町と津屋崎町が2005（平成17）年

1月24日、平成の大合併に伴って新たに誕生した住宅都市である。福岡県の北部、福岡・北九州両政令指定都市のほぼ中間に位置しており、福岡都市圏に属している（図表1参照）。ただ、福岡都市圏の市町村の中でも、賃貸住宅が少なく持ち家が多いという特徴を有しており、必然的に高齢化が進んでいる。面積は52.71km²、西に玄界灘、東に犬鳴山山系を擁し、平野部には田園地帯が広がっている。市内を国道3号、JR鹿児島本線が縦貫しているという交通の利便性から住宅開発が相次ぎ、長い間人口が増加してきたが、近年人口は横ばい傾向を示している。

ただ、市の玄関口であるJR福間駅東地区で大規模開発が進んでおり、今後人口の急増が予想されている。開発規模は約108ヘクタールで、210戸、6,500人の人口を想定している。地区内には、スーパーマーケットや専門店街、シネマコンプレックスなどを擁し、年間1,000



図表1

万人の集客を見込むショッピングモールが今春、開店予定で、市外から多くの来店者が予想されている。

2012（平成24）年1月1日現在の人口は56,295人で、22,501世帯。高齢化率が24.8%となっている。

また、市内には、商売繁盛の神様として信仰を集める宮地嶽（みやじだけ）神社、ユネスコの世界遺産暫定リストに記載されている津屋崎古墳群、日本海海戦の記念碑があり頂上から玄界灘を一望できる大峰山自然公園、かつて海運でにぎわった津屋崎千軒の昔ながらの町並み、ボードセーリングのメッカとして知られる福間海浜浴場、随所に農・海産物の直売所等があり、年間を通して500万人ほどの観光客が訪れている。

2. 生涯学習による地域づくり活動等の変遷

（1）国の動き

「地方で出来ることは地方に任せる」というスローガンで進められている地方分権、「民間で出来ることは民間に任せる」という行政のスリム化、「新しい公共」と呼ばれる行政と地域社会やNPO法人等との役割分担の見直し等の行政改革は、明治維新、終戦後に続く3度目の行政の大転換期だと言われている。これまでの中央集権的な行政や公共サービスのあり方が、180度変わろうとしている。

行政システムはもともと、全体的で均一的なサービスの提供を前提につくられたため、高度経済成長期には、都会も過疎の村も全国一律に立派な施設が出来上がり、それなりの役割を果たしてきた。

反面、個人や地域のニーズが高度化、多様化、国際化してきた現在、一部の人や地域だけのニーズに対応する

施策を実施することが出来ず、行政の限界が露呈してきた。しかも、「公平性」を最も重んじる行政が個別の要望に対応しようとすると、非効率なうえ割高になってしまい、かえってコスト（税金）がかかり過ぎてしまうという弊害も目立ってきた。

換言すれば、「画一的」なルールに縛られた行政が、全ての公共サービスを担うことは、もはや限界を迎えており、今後の地域での公共サービスの実施方法は、最も効率的、効果的なやり方を、行政や地域住民みんなで知恵を出し合い、磨き合っていく必要がある。正に「新しい公共」を構築していかなければならぬのである。

また、2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災では、「公助」よりも早く確実に「自助」「共助」が力を發揮し、「地域づくり」、「コミュニティづくり」の重要性に改めてスポットが当たっている。

このことは、合併により範囲が広域化している市町村にも同じことが言え、個人や地域ごとの市民ニーズが異なる中、市内全域を同じ施策でカバーすることには限界が見えてきた。そこで、市内の各地域の特徴を生かした弾力的な公共サービスを提供することができる「地域分権」「地域自治」という考え方が出てきた。

（2）福津市の動き

既に述べてきたことは、もちろん福津市も例外ではない。都市化や核家族化、少子高齢化、地域社会の関係の希薄化が進んでおり、これらに伴う各種の問題を抱えるに至っている。しかも、合併により広域化した福津市は、地域ごとに特徴やニーズが異なっており、行政による市内画一の施策では対処できない（できにくい）状況になっている。



図表2



図表3

このような状況下、2006（平成18）年度末に策定した福津市総合計画（図表2中央）の前文でも、郷育による人づくり、地域づくりである「郷づくり」を、総合計画を進める「前提条件」として掲げている。「郷づくりなくして、まちづくりは進まない」という考え方である。

また、旧福間町時代の2002（平成14）年度から取り組まれていた町内5小学校区の地域づくり活動「わがまちづくり支援事業」を合併後の2006（平成18）年度末、発展的に解消した。

そして、地域住民が自ら、2005（平成17）年度～2006（平成18）年度の2年間をかけて策定した「地域づくり計画（図表2後方の8冊）」を実践するため、2007（平成19）年4月1日、市民有志で組織するおおむね小学校区ごとの8地域の「郷づくり推進協議会」が発足した（図表3参照）。

「地域づくり計画」には、「子育て支援、教育」「地域福祉、高齢者福祉、障害者福祉」「防犯、防災、交通安全」「環境、景観」の4分野を必須テーマに、各地域独自の課題やニーズの他、市と地域等との役割分担、解決策、スケジュールも掲載されている。具体的には、課題の解決策等を、個人や家庭であること、隣組であること、自治会であること、小学校区単位の組織であること、NPOやボランティアがすること、企業がすること、行政がすること、協働であること等に分類し、解決まで

のスケジュールを掲載している。例えば、不幸にして火事が起きた時、見つけた人が119番へ電話するのは当然としても、バケツリレーなどの初期消火は一体誰が担うべき役割なのかを明確化し、対応策を検討していくといった作業を繰り返し、計画を策定した訳である。他にも、「消防車の進入を妨害する違法駐車」「庭木のせんていをしないため、見通しが悪い道路」「近所付き合いの不足による空き巣の増加」といったことが挙げられる。

また、郷づくり推進協議会には、自治会（隣組）や自治公民館（公民館類似施設）、婦人会、老人クラブ、子ども会育成会、PTA、民生・児童委員、消防団、企業、学校、NPO法人、ボランティア団体等、地域内の全ての人や団体等を網羅することが理想的だが、賛同者（団体）を募りつつ、無理をしない範囲で実践しているのが現状である。しかし、これらの既存の組織（協議会の構成団体）が、これまで培ってきた貴重なノウハウや人材、人脈、事業などは、新しい組織へ引き継がれ、徐々にではあるが、地域を代表する団体へと育ちつつある。

これと並行して福津市では、郷づくり活動を支援するため、市長部局に「郷づくり支援室」（現在は「郷づくり支援課」）を新設し、地域分権、地域自治の受け皿づくりに本格的に取り組み始めた。

3. 福津市の地域づくりの現状

福津市の地域づくり活動は、前述したように、各地域が抱えている課題の解決を目指して各種郷づくり活動を展開している（図表4参照）。この活動も、発足して5年を経過し、官民それぞれの努力により、徐々にではあるが活性化してきている。

しかし、地域によっては、自治会や民生・児童委員協議会等の団体が参加していないかったり、連携ができていなかったりして、必ずしも地域を代表する団体へと育っていない地域もある。従って、課題解決のための活動以前の段階として、地域住民同士のコミュニケーションを深めるための活動（祭やレクリエーション等）に力を傾注せざるを得ず、地域によって、かなりの温度差があると言える。また、郷づくり推進協議会の構成団体の多さと比例して、活動内容が活性化する傾向が見られる。換言すれば、いかに多くの賛同者（団体）を巻き込むかが、活動の成否を握っているとも言える。

更に、地域活動を行っている人たちを調査すると、必ずと言っていいほど「役員の引き受け手不足、後継者不足」を問題にしている。では、コミュニケーションを深め、楽しくする努力を積み重ねているかどうかを尋ねると、本来の地域活動ほどには力を傾注していないことが

図表4 各郷づくり活動の概要

地域名	勝浦	津屋崎	宮司	福間
概要	①6区、②1,259人、③491世帯、④34.3%、⑤7.9%	①19区、②7,313人、③2,799世帯、④23.8%、⑤14.5%	①8区、②6,631人、③2,738世帯、④25.5%、⑤13.7%	①11区、②11,277人、③4,717世帯、④24.0%、⑤12.4%
主な活動	子育て支援、教育	放課後子ども広場、学童保育	放課後子ども広場、子ども相撲	放課後子ども広場、子育て相談・講演、ラジオ体操
	地域福祉、高齢者福祉、障害者福祉	緊急連絡表配布、認知症予防教室、タクシーアシスト	高齢者安否確認、敬老会	高齢者健康体操、福祉制度研修
	防犯、防災、交通安全	児童見守り隊	防災研修、青バト、児童見守り隊	自主防災組織、防災研修、避難訓練、交通安全・防犯情報掲示
	環境、景観	海岸清掃、古墳でアート展、登山道整備、松林保全、花いっぱい運動	海岸清掃、道路清掃、松林保全、花いっぱい運動、違反広告撤去	海岸・松林・河川・道路清掃、花壇作り、違反広告撤去
	その他	郷土芸能保全、小学校合同運動会、祭	津屋崎千軒祭、大型クリスマスツリー	ウォーカラリー、祭、グラウンドゴルフ、餅つき
地域名	神興	上西郷	神興東	福間南
概要	①18区、②7,800人、③3,201世帯、④26.4%、⑤11.2%	①5区、②2,970人、③1,107世帯、④28.1%、⑤10.0%	①13区、②7,572人、③2,778世帯、④26.0%、⑤16.4%	①14区、②11,589人、③4,670世帯、④24.2%、⑤11.9%
主な活動	子育て支援、教育	子育てサロン、親子レクリエーション、あいさつ運動	子育てサロン、星の観測会、高齢者交流給食	あいさつ運動、放課後子ども広場、相撲・剣道大会
	地域福祉、高齢者福祉、障害者福祉	高齢者映画会	小地域福祉社会研修、認知症研修	高齢者健康体操、福祉制度研修、認知症研修、買物弱者用市場、消費者研修
	防犯、防災、交通安全	防犯パトロール、防犯リーダー養成、防災訓練、防災・防犯研修	児童見守り隊、青バト	地震体験、防災研修、児童見守り隊、防犯パトロール、交通安全教室
	環境、景観	花壇作り、通学路・登山道整備、不法投棄回収、違反広告撤去、河川清掃、竹炭作り	河川清掃・草刈り、花植え	生ごみリサイクル野菜作り、花植え、校区内清掃
	その他	竹灯祭	餅つき	農業体験、地域再発見巡り、小学校合同運動会

「概要」欄=2012年1月1日現在の①自治会数、②人口、③世帯数、④高齢化率(65歳以上)、⑤年少人口率(15歳未満)

多い。特に、自分の後継者を探している人に尋ねると「自分は、楽しくないのでやめたい」という答えが返ってくることがある。もちろん、自分が楽しくないことは、加入を勧められた人も同様な訳で、このような状況で活動の輪が広がっていくとはとても思えない。

この辺が、障害福祉関係のボランティアや各種学習ボランティア等、テーマごとのボランティア活動と少し異なる点で、地域づくり活動は「志」だけでは長続きせず、マンネリ化していく傾向が見て取れる。しかも「自分だけが、なぜ頑張らなければならないのか」と不平不満が出てきて、負のスパイラルに陥ることもある。

今さら言うまでもないが、地域社会は、企業のような縦社会ではなく、横社会である。にもかかわらず、中には現役時代の肩書きや職種などを引きずり、理論で人を動かそうとする人がいる。しかし、人は理論のみで動くのではなく、心が伴ったときに初めて動くということを、理解すべきだろう。具体的には、理論ではなく、仲間とともに汗をかくことが重要である。横社会の団体を運営するにも、命令ではなく、民主的な手続きを踏むの

で、意思決定までに手間や時間を要することになるが、これを行わないと、団体は衰退の一途をたどると言っても過言ではない。

このように、横社会の中で、自分自身が楽しめ、楽しさを広げていく努力は、地域づくり活動の重要な部分を占めると言うことができる。もちろん、福津市の郷づくりも例外ではなく、課題解決活動とともに、更なる力を傾注していかなければならない。

4. 地域づくり活動の原動力は

一時期「まちおこし」という言葉が流行したことがあった。

合併により現在は由布市になっている大分県湯布院町はかつて、有名な別府温泉の陰に隠れ、ひなびた温泉郷として衰退の危機にひんしていた。しかし、旅館の経営者らを中心とする住民が先頭に立ち、自然が多く残り高層ビルや風俗店もないことを逆手に取って、まちづくりに取り組み、現在のイメージを確立させた。

また、一村一品運動のモデルとなった大分県大山町（現在の日田市）は、耕地が狭い中山間地域で、町民所得も極端に低いものだった。そこで、農業協同組合を中心にして、「梅栗植えてハワイに行こう」をキャッチフレーズに、付加価値の高い果樹農業に取り組み始めた。その後、町との協働で「人づくり」や「住み良い環境づくり」など、先進的な取り組みを行ってきた。例えば、全国的な梅酒コンテストを行って優勝者のレシピを手に入れ、「日本一の梅酒」と名乗り、梅に付加価値を付けるなど、したかなまちづくりを行っている。

このように、まちづくり（まちおこし）の成功例には、住民の間に漂う「危機感」や「閉塞感」がバネになり、住民自らが立ち上がって進んでいくことが多いようである。しかも、行政の力だけで、まちづくり（まちおこし）を成功させた事例は、たぶん皆無だろう。

では、「危機感」や「閉塞感」に乏しく、近隣の人たちとのつながりが希薄になっている都市部のまちづくりは、どうすればいいのだろうか。

地域住民に「今なぜ、地域づくりを進めなくてはならないのか」ということを、繰り返し啓発（生涯学習活動）し、納得して行動を起こした志のある住民が中心になって、周りの地域住民を巻き込んでいき、ひいては、まちづくりの大きな渦をつくっていくことが大切である。

特に、戦後ベビーブームの時に生まれ、日本の近代化に貢献してきた団塊の世代が地域社会に帰り始めている。この世代は、激しい受験戦争を経験したり、ニューファミリーなどの新しい文化を創造したりしたパワーあふれる世代で、多数派として企業内コミュニティを築いてきた経験者もある。地域コミュニティを築く際にも、力を発揮するはずである。しかも、昔と違い今の60歳代は、まだまだ元気な世代である。ぜひ、団塊の世代を地域づくりの輪の中に巻き込んでいきたいものである。

ただ、前述したように、地域づくり活動は、楽しくて、やりがいがあるもの、無理のないものでなくては長続きしないし、活動の輪も広がっていない。こんな例がある。ある都市部の町で働き盛りの男性が一生懸命地域づくり活動に取り組んでいたので、「職業は何ですか。忙しいのに大変でしょう」と聴いたことがある。すると、「信頼する友人が『楽しいよ』と誘ってくれたので、活動に参加しましたが、とても楽しいので、今では、家業のパン屋を妻に任せて取り組んでいます」という答が返ってきた。その上、この活動を通じて友人が増えたことで、パン屋の売り上げも伸び経済的にも安定したようである。この話のキーポイントは、「信頼する友人」が

誘ったという部分であり、例えば「信頼できない行政」が誘っても、たぶん地域づくり活動には参加しなかったことだろう。このように、都市部の地域づくり活動は特に、「志」とともに「信頼関係」が大きなウエイトを占めると言える。

5. 地域づくりは「信頼関係づくり」

民主主義の基本である住民自治を支える「市民」は、広辞苑によると「公共性の形成に自律的、自発的に参加する人々である」としており、現在でも、ボランティアやNPO法人等の活動を通じて地域での公共サービスの一翼を担っている。政治面においても、選挙で選んだ代表に全権委任するだけではなく、オンブズパーソン（オンブズ、オンブズマン）に象徴されるように、日常的に政治に参画するようになってきた。

また、「市民社会」とは、広辞苑によると「自由、平等な個人によって構成される近代社会である」としている。ケネディーの演説「祖国があなたのために何ができるかを問うより、あなたが祖国のために何を行うかを問うてほしい」の「祖国」を「地域」に置き換えてみると、分かりやすい。

しかし、我が国においては「公共サービスは行政が担うもの」という考え方方が長い間、当然視されてきた。前述したような「新しい公共」や「市民力（田上富久・長崎市長）」といった考え方方が注目され始めたのは、近年のことである。

ソーシャル・キャピタルとは、「社会全体のつながりや人間関係の豊かさ」を意味する概念で、アメリカの政治学者ロバート・パットナムが1993年、「哲学する民主主義」の中で、「イタリアで同じ政策を実施しても南北で効果が異なるのは、ソーシャル・キャピタルの蓄積の違い」と指摘することで、広まった。例えば、OECD（経済協力開発機構）では、「グループ内部またはグループ間での協力を容易にする共通の規範や価値観、理解を伴ったネットワーク」と定義しており、市民同士のコミュニケーションの密度や市民と行政とのパートナーシップが活発であるほど、豊かな社会が形成されるという考え方方に立っている。今、正にこの考え方方が注目されているのである。

「地域に子どもを帰そう」をスローガンに、2002（平成14）年度から始まった完全学校週五日制で、地域住民であり教育の専門家でもある教師は、地域での子育て支援活動の最適任者だった。同様に、地域住民でありまちづくりの専門家でもある自治体職員は、地域づくり活動の最適任者であると言える。

行政と市民とが良好な関係を構築するためのあらゆる方策のことをPR（PUBLIC RELATIONS＝パブリック・リレーションズ）」と言い、「広報」と訳されている。

ただ、公務員による不祥事がマスコミをにぎわしているような現状で、直ちに行政と市民との良好なパートナーシップが築けるだろうか。また、行政が、ボランタリーな活動による地域づくりを住民に求めておいて、地域住民でもある行政職員がボランタリーな活動に取り組まないということでは、住民の信頼を勝ち取ることはできない。正にダブル・スタンダードである。

このような状況下、行政と市民との信頼関係を構築するには、長い年月にわたる地道な取り組みが必要だろう。

一方、一人の行政職員と近隣住民との関係という次元で考えてみると、どうだろう。日ごろから額に汗して一生懸命地域づくり活動に取り組んでいる一行政職員を、近隣住民は信頼しないだろうか。答は、「もちろん「ノー」であろう。行政全体は信頼できなくても、近所に住んでいる行政職員ならば、きっと信頼を得ることができるはずである。そして、近隣住民が、その活動に共感すれば、一緒に地域づくり活動を始めることだろう。行政職員は、地域の渦巻きの中心になって、周りの人たちを巻き込んでいく地道な努力を積み重ねることが大切である。

このように、一人の行政職員と近隣住民との信頼関係を構築するほうが近道であろう。このような方策を、新しいPR（PERSONAL RELATIONS＝パーソナル・リレ

ーションズ）とでも呼ぶべきか。

そして、一住民としての行政職員がこぞって地域づくり、まちづくり活動に取り組んだとき初めて、行政と住民との信頼関係が芽生え始め、眞の意味での協働の地域づくり、まちづくりが動き始めると言っても過言ではない。

しかし、これは、行政全体が市民との信頼関係を勝ち得る努力を放棄するという意味ではない。地方自治法第2条には、「地方公共団体は、住民の福祉の増進に努め、最小の経費で最大の効果を挙げなければならない」と定められている。もちろん、これは市民の願いと同じである。行政は、市民の信頼を勝ち得るため、今まで以上に情報公開や説明責任等の努力を惜しむべきではない。

また、サービス業である行政のお客様が納税者である市民であること、行政職員が福祉の増進のために働いているプロフェッショナルであることを、再認識する必要がある。更に、現在行っている事業が、適正な規模かどうか、効率的かどうか、効果的かどうかなどを検証し、常に問題意識を持って、職務に取り組むことも大切なことである。そして、これらのことも、常に市民との「協働」でしていく必要がある。

まちづくり、地域づくりに「特効薬」はない。今後も、行政と市民との信頼関係を築きながら、「協働」で地道な努力を積み重ねていくことが重要である。このことは、行政職員のみならず、全市民共通の願いでもある。

第6章 梅の里みなべ町

1. みなべ町の位置と地勢

平成 16（2004）年 10 月 1 日、南部町と南部川村が合併して誕生した「みなべ町」は、和歌山県のほぼ中央に位置し、総面積は 120.26 平方キロメートル（南部町 26.08 平方キロメートル。南部川村 94.18 平方キロメートル）。その約 68% の 81.91 平方キロメートルを林野面積が占めている。また、農地の割合が比較的高く 2 割程度を占めている。

東西に流れる南部川流域には丘陵地が広がっており、低地あり、山間地域ありとバラエティに富んだ地勢である。丘陵地には日本一のブランドを誇る「南高梅」の梅林が広がり、山間部は森林、渓谷などの自然資源に恵まれている。南北には紀伊水道を臨む海岸線が伸び、黒潮洗う海岸線は風光明媚な景観を誇っている。

町の面積が県全体の面積に占める割合は約 2.5% で、県内 16 位の広さである（平成 18 年 10 月 1 日現在）。

太平洋に面する海岸部、紀伊山脈に連なる山間部で構成された町内の交通網には、南北に走る国道 42 号線、東西に走る国道 424 号線、JR 紀勢本線（岩代駅・南部駅）がある。

また、高速道路・阪和自動車道は現在、南紀田辺 IC まで開通している。

2. みなべ町のあゆみ

①みなべの歴史

南部（みなべ）は古くから紀伊半島南部の重要な拠点だった。それは、弥生時代の銅鐸が数多く出土していることや、最近、縄文時代中期の西日本最大級の集落が発掘されたことからもうかがい知ることができる。

また、紀南地方では最も整然とした古代の条里制遺構が残されている地である。早くから皇族の莊園が成立していたが、鎌倉時代初期になって南部全荘は高野山領となつた。南北朝時代から南部荘地頭や代官であった愛洲

垣 淵 浩 子

梅料理研究家

・野辺氏（岩代荘は岩代氏）の勢力が強大となり、15 世紀中期には南部全荘を支配するようになった。野辺氏は平野中央に三重の堀に囲まれた国内有数の規模を誇る土居（城館）を築いていた。

関ヶ原の戦い後は浅野氏の支配下となったが、大阪の陣後、紀州徳川氏の家老 安藤氏の所領となり、南部組として大庄屋が 30 の村々を支配した。17 世紀中ごろ 7 か村が紀州本藩に召し上げられた結果（上ヶ地）、南部組、御上ヶ地南部組の 2 人の大庄屋が置かれるようになつた。

明治になり大庄屋に変わって郷長が置かれるなど行政制度の改変があり、明治 22（1889）年の市町村制実施後、南部村（後、南部町）、岩代村、上南部村、高城村、清川村が誕生。

昭和 29（1954）年には「昭和の大合併」によって、南部町が岩代村と合併し新制・南部町となり、上南部村、高城村、清川村が合併して南部川村が誕生した。

そして、そろって合併 50 周年を迎えた平成 16（2004）年、南部町と南部川村はいにしえのように一つになり「みなべ町」として生まれ変わった。

②みなべ町民憲章

わたしたちは 日本一の梅の里 みなべ町の歴史と自然の恵みに感謝し だれもが住みたいと思える新しいまちづくりへの誓いをこめて ここに町民憲章を定めます

- 1 海 山 川 の 自 然 を 愛 し 美 し い ま ち を つ く り ま す
- 1 産 業 に 誇 り を も ち 活 力 あ る ま ち を つ く り ま す
- 1 健 康 と 安 全 を 願 い 笑 頬 あ ふ れ る ま ち を つ く り ま す
- 1 歴 史 に 学 び 香 り 高 い 文 化 の ま ち を つ く り ま す
- 1 交 流 の 輪 を 広 げ 互 い に 支えあう ま ち を つ く り ま す

③みなべ町の花・木・鳥・魚

町の花＝梅

日本一の生産量と品質を誇る「梅」はまさに町の基幹。早春の山野を白く彩るその花は、その清潔さと高い香りとともに、町の花として最もふさわしいもの。

町の木＝うばめがし

日本有数の生産量と質を誇る紀州備長炭。うばめがしは、古くからその最高級の原木として大切に育てられ、そのことがみなべの山林を守ることにつながってきた。

町の鳥＝うぐいす

春になると、みなべの山々から、うぐいすの声が聞こえてくる。昔から「梅にうぐいす」といわれるよう、梅とうぐいすは切り離せない存在である。

町の魚＝いわし

いわしは、南部漁協で最も水揚げが多く、みなべの夏の風物詩でもある漁り火漁で獲れる。カルシウムやビタミンDを豊富に含み栄養満点の魚である。

④みなべ町の梅の歴史

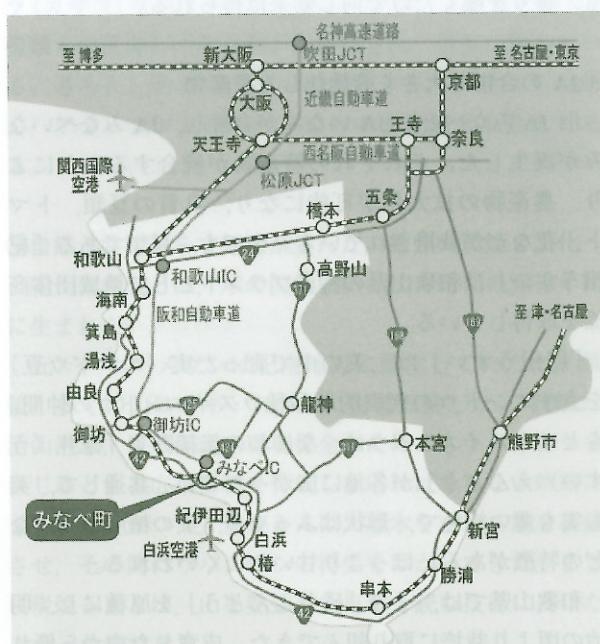
平安時代の中期の文献にもすでに「梅干」という言葉が見られるように、梅の歴史は千有余年も目に遡る。

南部郷で梅栽培が盛んになったのは江戸時代初めからで、紀州田辺藩は自生梅しか育たないやせ地を免税地にして年貢を軽減することにより、農民を助け梅栽培を広げていった。やがて梅干は江戸で人気が出るようになり、良品の梅を厳選した南部梅は「紀伊田辺産」の焼き印を押した樽に詰められ、江戸で有名になった。

明治時代には南部郷晩稻の内中源藏翁が郷内に加工場を建て、梅の生産から加工まで一貫した商品化に成功。梅の里として発展する契機となった。

⑤梅の最高品種「南高梅」の由来

大粒で肉厚、皮が薄く、種が小さい南高梅は、南部郷で長い年月の研究の末にたどりついた最高級品の漬け梅



品種で、紀州みなべの梅干の原料となる。

昭和25年、戦後の農業復興に際し、南部郷の梅の品種統一を図るため、郷内で栽培されていた114種類の梅の中から、5年の歳月を費やして最優良品種の選抜を実施。その結果、「高田梅」ほか7種が優良母樹に選定された。中でも最も風土に適した最優良品種と評価された「高田梅」は、母樹選定調査研究に深くかかわった南部高等学校園芸科の努力に敬意を表し「南高梅」と命名された。

現在、「南高梅」は、みなべ町で栽培される梅の8割を占め、梅のトップブランドとして全国に、世界にその名を馳せている。

(みなべ町HP引用)

3. みなべ町の資源

県立自然公園に指定された黒潮の海に面した海岸線、鹿島などの景勝地のほか、「ひと目百万本香り十里」といわれる南部梅林では、早春に約1000haもの敷地に梅林が白や赤い梅の花を咲かせ、世界遺産 熊野古道が町内を通り、遺跡など文化遺産にも恵まれており、熊野古道唯一の海沿いルートである千里の浜は、本州唯一のアカウミガメの産卵地として有名で、本州一の産卵数を誇っている。

①南高梅の収穫と一次加工の梅干しができるまで

花が終わたった後の5月下旬から7月ごろまで、青いものは、手作業でもぎ取り、各農家で選別、箱詰めされ、JAを通じて各地へと出荷される。また、梅干しは、完熟して落下する梅を山肌に張り詰めたネットで保護し、鮮度を保って収穫し、各家庭で洗浄、選別、塩漬けし、1ヶ月後の土用のころから、ビニールハウスや温室を利用して干し上げる。こうして梅干しに一次加工し、やがて、仲介業者によって加工業者に買い取られていく。

最近は、インターネットの普及と、直販が増え、農家は個人で販売する傾向にある。

②梅の新たな展望に向けて

梅農家が昔から培ってきた梅栽培の知識を科学的に分析、データバンク化することで、梅のさらなる可能性を拓げていこうという目的で設立された「うめ21研究センター」がある。研究成果があったのは、クエン酸など、体に良い成分が多く含まれていることが分かってきている。さらに県立医科大学との共同研究により、新たな成分結果をだし、南高梅の効能を活かす可能性を導き出すきっかけとなっている。

③南高梅の効能

(1)胃がん予防

梅の中には、胃に障害を及ぼすヘリコバクターピロリ菌の運動能力を阻害または抑制する効果のある物質が含まれていることを見いだし、その物質の構造についても分析することに成功した。この知見に基づいて、特許を取得することができた。(特許番号：第 4081678 号)

(2)糖尿病予防

梅の中には、血糖値の上昇、肥満等に関連づけられる酵素 (α -グルコシダーゼ) の働きを効果的に阻害する成分が含まれていることを見いだした。この研究成果についても、特許を取得した。(特許番号：第 4403457 号)

(3)食中毒予防

梅干しを食べると食あたりになりにくいという昔からの言い伝えがあるが、梅干しが食中毒菌である「黄色ブドウ球菌 (MRSA)」や「病原性大腸菌 (O-157)」といった食中毒菌の増殖を抑制する作用 (制菌作用) があり、食中毒を予防する働きがあることが明らかになった。

(4)動脈硬化の抑制

梅干しはアンギオテンシンⅡという血管収縮性作用のあるホルモンの働きを調整し血圧の上昇を抑え動脈硬化の発生を抑制する作用がある。また、血液中のコレステロールなどの脂質が増えると高脂血症になり、血管内で血栓ができやすくなり、脳梗塞や心筋梗塞を起こすが、梅干しを食べることにより血液の流れがなめらかになり、発症を予防する。

(5)血液浄化作用

ドロドロ血液の正体は血液中の脂質。これが血液中に多くなると高脂血症になり、ドロドロ血液になると言われている。梅干し含まれるクエン酸は、ドロドロ血液の原因である酸性を中和させ、血液をサラサラにする。

(6)抗酸化作用

活性酸素は癌や生活習慣病を引き起こす原因といわれているが、梅干しに含まれるフラボノイドには酸化反応を抑制する作用があり、細胞や組織が酸化するのを防ぐ。

(7)疲労回復効果

梅干に含まれる「クエン酸」には、疲れの原因となる乳酸を抑える働きがある。「梅干を食べると身体の調子が良い」という声をよく聞くが、これは「疲労を感じる物質を体内で作らない」ということなのである。

(8)食欲増進効果

梅干しを見たり、思い出したりするだけで、口の中に唾液が広がったという人は多い。梅の酸味が体内の消化器官を刺激し唾液など消化酵素の分泌を促し、食欲を増

進させるとともに消化を助ける。また、梅干しに誘発されて出る唾液の質はサラサラで、口の中に残った食べかすや細菌を洗い流しやすく、虫歯予防にもなる。

(9)虫歯予防

虫歯の原因となるのが、ミュータンスと呼ばれる球菌。梅干に含まれるクエン酸は、このミュータンスの活動を抑え、虫歯を予防する。碎いた梅干を、湯に入れて口に含むだけで、歯磨きと同じ効果をもたらす。

(10)カルシウムの吸収促進

骨の材料であるカルシウムは水に溶けにくく吸収率の低い栄養素であるが、クエン酸と一緒に摂取すると水溶性に変化し腸管からの吸収率がアップし、骨の老化を予防する。

(11)ダイエット効果が期待

クエン酸が豊富な梅干は、エネルギーを無駄なく変換でき、余分な脂肪を作りにくい。

また、食事をすることによる血糖値の上昇なども妨ぐので、ゆっくりと梅干を食べながら摂る食事は、ダイエットにも効果的である。

(12)高血圧化の抑制

梅には塩分がある。高血圧を心配する場合はどうしても塩分を敬遠がちだが、梅に含まれる塩分と血圧の関係について調べたところ、梅干は高血圧化を抑える働きがあることが明らかになった。

(13)鎮痛作用

「こめかみに梅干しを貼ると頭痛が治る」という言い伝えがあるが、医学的に頭痛に梅干しは効くとされる。梅干しの香り成分ベンズアルデヒドには、痛みを鎮静・軽減する効果がある。わざわざこめかみに貼らなくても、香りを嗅ぐだけで同じ効果は得られる。

④JA の合併で大きく産地化した農産物

旧 JA みなべと旧 JA いなみが合併し、JA みなべいなみが誕生した。それぞれの特産物が統合することにより、農産物の拡大化が可能になり、良質の豆類、トマト、花などが栽培されている。中でも、豆類である「紀州うすい」は和歌山県の特産ブランドとして地域団体商標を取得している。

「紀州うすい」は、莢の中で育った実（エンドウ豆）を食すエンドウの代表的な品種ウスイエンドウの仲間。もとのウスイエンドウは、なにわの伝統野菜「碓井（うすい）えんどう」が各地に広がったもの。共通して、莢も実も薄い緑色で、形状はふっくら、実の糖度が高いなどの特徴がある。ほっこり甘いとよくいわれる。

和歌山県では、その「碓井えんどう」を原種にし、明治の頃より栽培に取り組んできた。成育した中から優れ

たものを選別し、それを種に育てることの代々繰り返した結果、今では、特徴の秀でたウスイエンドウが安定的に生産できるようになっている。

「紀州うすい」は、早生、露地、ハウスと続き、3月から11月くらいまで収穫できる。

畑に実った「紀州うすい」のひと株の背丈は約2m強、長いので70mはある畠が何列も並ぶ。成育した莢の密集度は高い。それらを手でもいで収穫する根気のいる作業である。

JAみなべいなみ担当地区だけでも、年間約2千t、約10億円の生産高。和歌山県全体でみれば、紀州うすいは主要な生産物になっている。

⑤ウミガメ保護活動で自然を守る

産卵シーズンの5月～8月にかけて上陸するアカウミガメは、卵を安全に孵化させようと、約2時間かけて高潮線より高い砂場まで上陸する。

2ヶ月後、卵が孵化し、子ガメたちは夜を待って海に向かう。親ガメは子ガメが誤って梅へ戻れないことのないように、人工灯の少ない自然豊かな浜を選ぶ。だが、無事に生まれても、鳥、魚などの餌になってしまい、成熟体なるものはほんのわずかだという。

20年以上ウミガメ保護を続けている町のウミガメ研究班の後藤清さんと青年クラブの夜のウミガメパトロールによって、卵を危険回避させ、生まれてくるかけがえのない小さな命のために安全な環境づくりに活動している。

また、みなべの漁港では、黒潮の恵みを受け、イワシ、ヒラメ、伊勢エビ、カツオ、アジ、タチウオ、ガシラ(カサゴ)サバ、タカアシガニ、タコ、イカなど約800種類もの近海もの魚介類が水揚げされ、活気に満ちている。さらに、めざし、イカの一夜干し、シラスちらりめん、アジ、カマスのひらきなどの水産加工も盛んである。

⑥自然と共に暮らす知恵が生んだ、紀州の炭焼き文化

紀州備長炭とは、木の国和歌山で江戸時代の元禄年間に生まれた。

元々、ウバメガシは紀南地方に群生していたが、戦後、多くの山はスギ・ヒノキに樹種転換した。今後は、治山治水、自然保護、環境保全のためにウバメガシをはじめとする広葉樹林を育成しなければならない時期にきていた。かつて、炭焼き人は、原本を求めて窯を移動させ、その間にウバメガシの再生をはかってきた。まさに炭焼き人は、山を熟知し大自然を読む技術に長けた人だったのである。

白炭ならではの白っぽい色をし、断面は金属質の光沢があり、打てばチシンチシンと金属音がする。燃料として使うと、火力が強いうえ、火もちもよく、うちわ1本で火加減の微妙な調整が思うままにでき、鰻の蒲焼き、焼き鳥など、料理用燃料として今でも「最高」の折り紙をつけられている。備長炭の優れた炭質は、製炭技術もさることながら、炭材にウバメガシを使用することで生まれる。この木は、極めて硬い材質の常緑樹で、萌芽しやすく、主に沿岸のやせ地に生育する。生長が遅く、炭材として最高の品質になるまでには20数年以上かかる。みなべ町では和歌山県生産量の5分の1に当たる約2万俵以上が製炭されている。

「朝は朝星、夜は夜星。昔から一度窯に火をつけたら、親の死に目にも会えぬと言われている。火の色、匂い、すべてが勘だ。どんなに疲れていても、神経だけは起きてんといかん。」と、詩にも詠まれた炭焼きの仕事。炎に向かう名人たちの両眼は鋭く光り、そして最高の備長炭ができあがる。

4. 高齢化、障害者への対応として

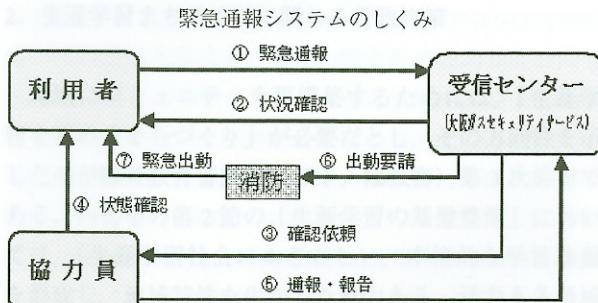
みなべ町高齢者福祉事業として

- ・地域包括支援センター
- ・高齢者生活支援サービス(介護保険以外のサービス)
 1. 外出支援サービス事業
 2. 軽度生活援助事業
 3. 配食サービス事業
 4. 生活管理指導事業
 5. 緊急通報システム事業

※高齢者生活支援サービスの一部では、障がいのある方も利用できるサービスもある。

・外出支援サービス事業

電車、バス、タクシーなど一般の交通機関の利用が困難な高齢者や障がい者が、通院などの外出が必要な時に、移送用車両による送迎を行ったり、コミバスや一部



※緊急時には、主に①～⑦の手順で対応を行います。

・利用料 無料

のタクシー会社で利用できる助成券の発行を行っている。

・軽度生活援助事業

家族の支援が困難な一人暮らし高齢者や障がい者などが、日常生活上の買い物、掃除などが必要な時に、シルバー人材による軽易な支援を行っている。

・配食サービス事業

家族の支援が困難な一人暮らし高齢者や障がい者などが、食生活の安定と食事の確保が必要な時、弁当を配達する。

・生活管理指導事業

家族の支援が困難な一人暮らしや夫婦のみ高齢者などが、日常生活上の指導・支援が必要な時に、指導員の派遣を行ったり、施設に短期の宿泊を促す。

・緊急通報システム事業

病気などで日常生活に常時注意が必要な一人暮らし高齢者や障がい者などが、急病、災害などの緊急時に、簡単な操作で通報ができる緊急通報装置の貸し出しを行う。

(みなべ町 HP 引用)

5. まちづくりの展望と今後の問題

①台風 12 号被害で孤立した清川地区

紀伊半島で降り始めの 23 年 8 月 30 日 17 時から総雨量 1800 ミリを超えたところがあった。さらに 9 月 5 日午後、電話が使えず連絡が取れない状況が続く。道路が土砂で埋まったり、川沿いの家屋や農地が浸水する被害があった。

みなべ町清川の人口は 240 世帯 854 人(7月末現在)。この地域は 4 日、土砂崩れや路肩の崩壊により、地域の幹線道路である国道 424 号が通行止めとなった。清川では土砂崩れに巻き込まれた男性が亡くなり、復旧にかなりの時間がかかった。

台風 12 号による復旧作業は今だに続いている状況で、を実施する作業があり、道路や堤防が整備される予定だ。

寸断された旧道など復旧のめどが立たない地帯もあり、みなべ町の多くの山畠、山林などでは未だに手つかずのままの状態が続いている。

②梅農家の衰退と価格

農家から仕入れる梅干しを、一律に同じ価格で購入するカルテルを結んでいたとして公正取引委員会は 12 日、独禁法違反(不当な取引制限)の疑いで、和歌山県のみなべ町と田辺市の JA や業界団体、梅干し加工業者を立ち入り検査した。

関係者によると、両組合加盟の計約 80 社は毎年、梅の収穫期に集まり、等級やサイズごとに共有する「見通し価格」を決め、同じ価格で梅を仕入れるようにしていたらしい。

2011 年 7 月 12 紀伊民報より

梅農家にとって梅が主な収入源であることから、現在の低い取引価格では、梅専業が不可能になりつつある。当然、農家に後継者は確保しにくい状況で、未来への展望に不安がある。

そんな中、明るい兆しがあったのは、研究機関が発見した梅の効能の特許取得である。胃潰瘍や糖尿病を防ぐ成分が含まれていることが、科学的に証明された。また、新商品開発では、梅に親しんでもらおうと、JA みなべいなみは、トマト梅を、JA 紀南は、梅味のキャラメルを売り出したことなどがある。

さらに、PR 作戦では、紀南地方の梅関係者で組織する紀州梅の会が、サッカーのワールドカップに出場する日本代表選手に梅干し 100 キロを贈ったことも話題をよんだ。

今後は、家庭での梅消費量を増やすなど、ご飯と梅干しと一緒に食べることを心がけ、食生活の見直しを訴えていくことや、農水省が推進する 6 次産業化を目指す方法として、梅を納得のいく価格に設定し、個人で加工、販売をしていくことなど、農家自身がアプローチしていくことが大切になってくると思う。



第7章 生涯学習まちづくり考

今 西 幸 蔵

神戸学院大学人文学部教授

1. 「地方の時代」とコミュニティ形成

現代日本社会は「地方の時代」をめざしているといえる。しかし日本各地では、急激な都市化と過疎化が進行し、人口の流動化現象によって人々のコミュニティへの帰属意識が失われ、地域行事の減少や住民の連帯感の希薄化などから、コミュニティ形成の根幹に関わる諸問題が発生するようになった。日本経済がマイナス転換し、産業構造が根底から変化したことに起因するのであるが、少子高齢化や核家族化などによって国民のライフスタイルの変化等による意識の変化や価値観の多様化により、従来の地縁的なコミュニティがその役割を十分に機能できなくなつたと考える。

地方分権が提唱されている今日、「地方の時代」を地域住民のものにするには、コミュニティを再構築する政策が望まれており、一方ではコミュニティ機能の開発を図る住民活動が組織されねばならないだろう。それには、従来から存続している地域密着型コミュニティを基盤としながら、住民が取り組んでいるテーマ型のコミュニティ活動や趣味や文化・スポーツ活動、レクリエーション等を行うクラブ型のコミュニティ活動など、多様な形態やコンセプトをもった新しいコミュニティ活動とを一体化させたものを組織することが、コミュニティ復権のキーポイントであると思うのである。

国民や住民が自分が住んでいる地域を自分の生活そのものの姿として捉えることができるような帰属感、すなわち「ふるさと意識」をもつコミュニティの形成が求められているということから、コミュニティにおける住民の主体的な活動が期待されており、住民同士の相互扶助的な活動が、各小地域のネットワーク形成に結びつくことが望まれる。政府が進める地方分権化の一層の進行の中で、「ふるさと意識」に根ざした固有の価値を持つコミュニティの形成と近隣地域との相互の結合も期待されている。

こうした動向を遡ると、1968年1月に佐藤栄作首相

が国民生活審議会に諮問し、翌年には「コミュニティー生活の場における人間性の回復」といった答申が出され、その中でコミュニティが定義されていることが重要である。そこでは、「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人及び家庭を構成主体として、地域性と各種の共通目標をもった、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団」としてコミュニティを定義している。1971年には旧自治省によって「コミュニティに関する対策要綱」がまとめられ、その後1973年にかけて、全国83か所でモデル・コミュニティ事業が実施され、住民自治協議会やまちづくり協議会が作られたことはよく知られている。

ここであげているような自治省の取り組みは、実は戦前に於ける内務省の地域形成政策に深く関連している。しかもそのことは戦前の社会教育（時代によっては通俗教育）と密接な関係を有するものであった。社会教育の歴史に関連することになるので、ここでは内容については省略するが、社会教育が必要とする市民力とか、人間の「社会化」への期待をミクロ的に理解しようとするならば、それは「地域住民力」であり、「地域への適合化」というベクトルを持つものとして考えねばならないことになる。社会教育が生涯学習という大きなスキームに発展する中でも同様の視点が必要であることはいうまでもない。本研究目的が、コミュニティの再構築という課題にあることを最初に明確にしておきたい。

2. 生涯学習まちづくりに関わる行政施策

地域にコミュニティを再構築するためには、「生涯学習を進めるまちづくり」が必要だとし、その方向性を示したのが臨時教育審議会（以下、臨教審）第3次答申である。同答申の第2節の「生涯学習の基盤整備」においては、「生涯学習社会にふさわしい、本格的な学習基盤を形成し、地域特性を生かした魅力ある、活力ある地域づくりを進める必要がある。このため、各人の自発的な意思により、自己に適した手段・方法を自らの責任で選

択するという生涯学習の基本を踏まえつつ、地方が主体性を發揮しながら、まち全体で生涯学習に取り組む体制を全国に整備していく」と述べられている。

この提言は、住民主体の考え方に基づきつつも、人々の学習環境を地域で整備していくということについては行政支援を求めたものと理解すべきであろう。同答申は支援内容を以下に示している。

- ア、地域の人々が充実した生活を目指して、多様な活動を主体的に行えるような学習の場を整備する。
 - イ、情報化、国際化、成熟化、高齢化など時代の変化に対応した生涯学習プログラムの開発を推進する。
 - ウ、趣味等を生かした自発的学習活動が、社会生活の中で生かされるような環境を整備する。
 - エ、教育・学習活動の一層の活性化を促すため、民間施設を含め、教育・研究・文化・スポーツ施設の相互利用を促進するとともに、各分野の人材の有効活用を図る。
 - オ、快適な空間やゆとりの時間を確保するなど、人々の多様な学習活動を支える社会生活基盤の整備を図る。
 - カ、生涯学習の多様なまちづくりを進めるため、国及び地方において、生涯学習に取り組む市区町村の中から、特色あるものをモデル地域に指定する。
- つまり、生涯学習を進めるまちづくりが必要であること、そのためにも国は、地方におけるまちづくりを支援する方策を講じる準備があること、さらに生涯学習に取り組む市区町村の中から特色あるものについて支援することを示したのであり、「生涯学習宣言都市」や「生涯学習モデル市町村」に先導的な試みを実施することを求めた。

これに応える形で全国に「生涯学習宣言都市」が誕生し、2012年現在、全国で138市町村にのぼる。さらに1988～1993年の5年間、文部省から「生涯学習モデル市町村事業」の指定を受けて生涯学習の基盤整備事業を実施した市町村数は全国で579を数え、これは1999年8月当時の全国市町村数3229の約18%に達する数字であり、「生涯学習モデル市町村事業」では、各自治体の府内に生涯学習推進本部の設置と生涯学習推進事業の実施が求められたのである。

一方、国において生涯学習振興施策はどうであったのか。臨教審は、次のような答申を示している。「生涯学習社会を実現していくためには、文部省と各省庁の施策・事業との連携・調整の強化を図る必要があり、この課題に最も責任を持つ省庁は文部省であることを自覚して、各方面に積極的に対応を行うべきである。また、各省庁においても、この観点から文部省との連携・協力を

進めていく必要がある」とした。

臨教審当時の文部省生涯学習局の任務には、学校教育、社会教育及び文化の振興に関し、生涯学習に資するための施策を企画及び調整する事務を行い、生涯学習の観点から文教施策について企画・連絡調整機能を有するとされた。1990（平成2）年1月の中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」を受けて7月から「生涯学習振興法」が施行されており、同法第10条を根拠として文部省内に生涯学習審議会が設置されている。さらに同省を中心に、内閣の関係省庁の施策を踏まえた調査審議を行うことができるよう、文部省を含めた15省庁の局長レベルの幹事会が設けられ、1994（平成6）年7月から担当者会議が定期的に開催されるという経緯がある。この会議の性格や位置づけから考えても、生涯学習振興行政において教育や文化が中心となるのは当然のことであるが、研修、講習会、啓発事業、イベント、さらに情報提供にいたるまで、15の省庁（当時の総務省、経済企画庁、科学技術庁、環境庁、大蔵省、文部省、厚生省、農林水産省、通商産業省、海上保安庁、郵政省、労働省、建設省、自治省、警察庁）が積極的に取り組む体制が整備されたのである。文部省調査では、1995（平成7）年で178事業、予算額は3兆円を超えていた。このことは、生涯学習行政や施策が教育のみを対象としたものではなく、ほとんどの行政領域と密接な関係を持っていることを示したと考えるべきであるし、その後の行政改革を経た今日においても国による生涯学習振興行政の性格が変わったというような変化は見られない。むしろ総合行政推進の核として位置づけられるようになったといえよう。

3. 生涯学習まちづくりの意義

個人が充実した生活を送るために、地域社会の基盤が安定し、コミュニティが活性化していることが条件となる。生涯学習には、人々の自己実現を図ることを目標とする機能があり、生涯学習活動に参加することから相互連帯意識が育まれ、「生きがい」や「やりがい」といった自己充足感を獲得することができることが期待されている。生涯学習活動を通して、他者から自己存在を認められる機会を入手し、地域社会への帰属意識を深めることができるようになる。したがって、生涯学習活動を進めることは、そのこと自身が自己実現をめざす活動であると同時に、人々の生涯学習を保障することが地域社会の基盤を形成することにつながる。ノールズ、Mは生涯学習の目的は地域形成にあるという示唆を与えてくれているが、生涯学習社会と称せられるべき社会への

移行を臨教審は訴えたと考える。

臨教審第3次答申では、「生涯学習を進めるまちづくり」を実現するとし、そのための環境整備を施策として明示しているが、この表現では「生涯学習」が目的であり、「まちづくり」がその手段として理解する考え方が出てくるが、それは正しい理解ではないであろう。「生涯学習」と「まちづくり」とは、どちらが目的で、どちらが手段というのではない。両者が相互に密接な関係を持つということであり、相互循環型の機能でもって生涯学習社会を形成するという発想で考えるべきである。その意味では「生涯学習まちづくり」という用語を使用するのが適切である。さらに、「まちづくり」と「生涯学習」の考え方は、個人の要望に基づく自己実現のための学習といったレベルだけで捉えるものでもない。教育基本法に示されているように、「社会からの要請」といった視点の導入が不可欠であり、そこに地域形成という具体的課題が提示されているのである。

「自らのまちは自らの手で」という自治意識をもった住民を育てていくことが社会に求められているが、生涯学習活動に参加し、地域社会の具体的課題を学習した住民は、他の住民との関わりの中で、自分の居住地である「ふるさと」について考えるようになる。生涯学習活動の進展により、地域の活性化につながるような市民活動が生まれることは各地の事例で紹介されている。これらの学習活動は、産業振興を目的とした「まちおこし」というような発想だけではなく、市民が、地域社会自自身が生活改善を志し、それが自己実現という形で結実するような実践という性格を持つ。「まちづくり」という用語は、産業振興のためのスローガンとして使用される「まちおこし」とは根本的に性格が異なる。

「まちづくり」を進める生涯学習活動によって住民の学習意欲が高まり、やがて地域問題に関わり、あるいは地域課題の解決に取り組む住民学習が形成されるようになる。住民同士の対話が発展して集団も形成される。こうして生まれた住民集団は、目的的な学習集団であると同時にコミュニティ形成という課題を必然的に担った存在でもある。住民集団が、一定の意味を持った集団としてネットワーク化されることによって、「生涯学習まちづくり」の姿が明確になると見える。ネットワーク形成において不可欠なことは、行政がネットワークを支援する機能を十分に果たすことであり、また行政自身がネットワークの一員として参加・参画することである。住民と行政の関係がイーコール・パートナーとしてのパートナーシップを形成することが必要で、生涯学習活動を通して育んだ住民自治と団体自治の両者が単なる関係調整型の関係を結ぶのではなく、成果創出型の共通目標を持

つことに意義があり、21世紀社会が求める真の住民主導型のまちづくりが進んでいくことになる。「生涯学習まちづくり」に対する期待が大きいのも、こうしたところにその根拠がある。

「生涯学習まちづくり」の意義・目的については、次の3点に集約できよう。第1は、生涯学習まちづくりによる学習活動への参加によって、自分という存在を社会の中に見い出すことができ、他者との人間関係の形成を通して自己能力を發揮することが可能となる。そのことは、住民相互の関係の基盤を固めることになるだけ、自己能力を發揮した人には自己充実感を与えて人生を豊かに生きることの意味を与える。「人をつくる」といった課題にも関連する。ここで重要な観点は、他者との関係性において学習が進められる環境があるという前提条件であり、それは「関係性をつくる」ということになる。

第2に、地域の課題に取り組む学習を通して、住民生活の向上という具体的目標と成果が獲得されることである。近年、「役に立つ社会教育」といった目標が示されたりしているが、学習成果が地域形成に直接的な利益をもたらし、住民にとって安全で安心な、最低限度の文化的生活が保障されることが必要である。たとえば、産業振興などにより雇用が確保されるといった視点が生涯学習活動への期待として存在する。つまり地域の「生活をつくる」ということになる。

第3に、生涯学習活動は地域に「文化をつくる」という重要な視点が存在する。文化という抽象的な表現を用いたが、地域の知識財産の創造と言った方が分かりやすいかも知れない。生涯学習活動によって知識を入手し、具体的学習活動によってその知識を検証し、成果を確認し、それを地域に蓄積していくというプログラムが確立されることによって、確実に地域文化の形成が進展することになる。

「生涯学習まちづくり」を発展させていくには、行政の支援が必要であることはいうまでもないが、住民参加・参画の問題としてボランティアやNPOなどの非営利公益市民活動の役割が重要である。「生涯学習まちづくり」を進めていく場合、従来から存続している地域密着型コミュニティを基盤としつつ、それぞれの住民が取り組んでいるテーマ型のコミュニティ活動やクラブ型のコミュニティ活動など、あらゆるサークルや団体活動などを組織し、相互交流の促進を図り、指導者を養成していくことが必要となる。

その場合においては、リーダーの役割が重要であり、まちづくりを推進できる力量を持った市民がリーダーとしてさまざまな取り組みを展開することを戦略的な目標として考えねばならない。そうしたリーダーをどのように

にして養成するのか、あるいは養成といった視点ではなく、どのように活動の場を提供するのかといった戦略が「生涯学習まちづくり」には必要なのである。

そのための研究方法としてリーダーに対するインタビュー調査などが考えられるが、今回の研究においては、当事者である各地のリーダーに直接、自己に関わる経験を知見として提供いただいた。6人のリーダーの報告から「生涯学習まちづくり」に関わる貴重な示唆を得ることができると期待している。

地域や世代間の交流を基軸とした人々の連携、人的ネットワークの構築が、行政主導型社会から市民主導型社会への転換のためにはどうしても必要なものであり、そのためには「生涯学習まちづくり」で育成された行動力をもった住民が果たす役割が期待されている。こうした人材や指導者の育成は、日常的な地域活動、住民活動や社会教育の中で行われてきているが、その活動自体が低調になっているため、新しい取組が必要とされている。最近、学校を核とした地域形成の取り組みが進展しているが、今後の成り行きが注目されるところである。

4. 「生涯学習宣言都市かけがわ」に見るまちづくり

東京日本橋を出発して東海道を旅すると、26番目の宿が掛川である。現在は人口約11万5千人の掛川市として発展している。

南北に長い市域の中心に位置する掛川駅はJR新幹線、東海道本線と天竜浜名湖鉄道の三線の発着駅である。駅の改札を出て構内を進むと、「ようこそ城下町掛川へ」という案内のある店がある。第三セクターとして作られた「これっしか処」という特産物店で、同市の産物である掛川茶、くず、海産物、肉の加工品や地酒などが販売されている。「これっしか処」というネーミングは、「ここでしか」手に入らないという意味だそうであるから、地域のオリジナリティを強調していることが分かる。また単なる特産物展示場とは違うのだという自負を示している「これっしか処ギャラリー」は、同市はもちろん、静岡県内市町村の伝統工芸品や美術品を月代わりで展示している。掛川駅は、日本一立派で美しい駅舎、そして生涯学習センターとしての機能を持った駅舎を造るという基本的なコンセプトを持って建設されている。駅は人々の交流の拠点であり、情報の受発信のセンターであるという考え方に基づいている。この考え方には「日本一掛川駅八景づくり」ということで具現化されており、「これっしか処」に加えて、御影石や木煉瓦など6種類の舗装道路、33種類で100本の街路樹の植栽、ミラーガラスのはめ込み、二宮金次郎像の建立、裸婦像の

建立、1億円のゴールドセラミックのモニュメントづくり、天竜浜名湖鉄道の発着を指している。また新しい駅づくりだけでなく、東海道線でただ一つの木造駅舎が残されているのも住民に郷愁を与える効果を持つであろう。

駅前広場は住民にとっての散策の場であり、いわゆる居場所となっているが、掛川市自身が全市域公園化構想のモデル地区と考えられている。他地域から来た人が、同市がまるでテーマパークであるように感じられるのも当然と言えるかも知れない。豊かな自然と人の往来を背景に、人工的な建築物がまちづくりの景観のトピックスのように配置されているからである。同市の全体風景をテーマパークとして考えるならば、まちの中核的な建築物となっているのが掛川城天守閣であろう。掛川城が築城されたのは室町時代の文明年間（1469～1486年）、当時の駿河の守護大名であった今川義忠の命によるものとされる。その後、徳川家康の支配下に置かれたが、やがて山内一豊によって治められ、その時に天守閣が造営されている。貴族的な美しさがあると評価された天守閣であったが、1854（嘉永7）年の大地震により損壊し、1869（明治2）年に廃城の憂き目にあっている。

掛川城天守閣が復元され、開門したのは1994（平成6）年4月のことである。高さが80メートルある天守閣は、明治以降の天守閣建設では、わが国で最初の本格的な木造建築物であり、江戸時代の資料をもとに出来る限り往時の姿に忠実に復元を試みたということである。

この三層四階建ての天守閣復元に至る過程には、まちづくりの一つの進め方を示す取組がある。それには当時の掛川市長の樋村純一氏のことを述べなければならないだろう。樋村氏は、生涯学習の提唱者として全国的に知られる人物であるとともに、まちづくりの仕掛け人としても有名である。おそらく彼の存在なくしてはあり得なかつた思われるような事業を積み重ねておられる。地方行政のリーダーのあり方のモデルを示してきたと言っても過言ではあるまい。地方自治にあっては、いかにリーダーの役割が大切なのかということを実証したのである。

掛川城には、天守閣とともに城郭内には掛川城御殿がある。京都の二条城と並ぶ御殿であり、江戸時代の地方政府の姿を伝えるものとして、国の重要文化財に指定されている。この建物も天守閣とともに19世紀中半の大地震で倒壊しているが、直ぐに再建されている。実務に支障が出たからであろうが、明治維新後は学校や役場に供されてきたと聞く。

掛川城天守閣を中心とするならば、城の周辺地域の町

並みは城下町としての雰囲気を醸し出している。掛川城公園や立派な駐車場のある大手門があり、また観光物産センターである「茶処こだわりっぱ」も一役買っているが、ここもネーミングにおいて「これっしか処」と共通する考え方があるようだ。大分県の湯布院温泉のネーミングの効用も同様であるが、同じような質のものでもネーミングによっては受け取り方に大きな質的転換が生じる場合がある。それは地域の特色を生かすことに腐心している住民の心意気があるからで、そのことはまた新たなまちづくりを生み出す機会となるのであろう。

ところで、掛川には東海道新幹線が停車する。JRの努力で、最近は「こだま」型の特急が停車する駅が増えつつあるが、掛川駅はそれらに先駆けて開設されたのである。

ではどうして掛川だけがいち早く実現したのであろうか。このことを考えるときに、掛川市のまちづくりとは、どのような考え方で、どのような方法で進められたのかということが問題になる。ここで特筆されることは資金を提供したのが住民であり、地元企業であるという事実である。1世帯平均10万円前後の寄付行為があり、それに地元企業が加算して30億円という資金が生まれ、この資金をJRに寄付をしたと聞いている。人口規模からしても大都市とは言えない掛川市が、市長の音頭取りがあったとはいえ、寄付行為という資金作りに着手したという経緯に驚く。この考え方を延長すると「ファンド・レイジング」といった欧米での民間団体の資金づくりの発想にオーバーラップする。

「ファンド・レイジング」の手法の中心は寄付行為であるが、街頭募金、会費、物品寄付、相続寄付行為などの手法もある。問題は寄付行為者が賛同できるような行為であるかどうかの内容の検討が重要であり、掛川市の新幹線駅の場合は、生涯学習での問題提起によって、そのことが住民に寄与する内容かどうかの検討がなされたという。結果として実行に移されたということは、住民が学習し、理解し、行動したことになる貴重な事例だといえよう。

いずれにせよ、掛川市におけるさまざまな生涯学習施策のリーダーが市長であったことは間違いない。同市が生涯学習都市宣言を行ったのは、市政25周年の年であった1979（昭和54）年のことであり、1991（平成3年）年には「地球、美感、德育」都市宣言を行い、同市のまちづくりのめざす方向を住民に説明している。そこにリーダーシップと呼ぶべき実践力を見るのであり、2000年前後の日本の生涯学習において、掛川市が一斉を風靡した時期が存在した。

5. 「生涯学習宣言都市やしお」に見るまちづくり

「生涯学習まちづくり」におけるリーダーの役割について掛川市の事例をあげたが、掛川市同様に優れたリーダーが「生涯学習まちづくり」を標榜したケースに埼玉県八潮市の事例がある。八潮市では故人となられた藤波彰元市長のもと、「楽しくそして市民が学ぶ故郷を愛するまち八潮」という、従来にはない発想で新しいコミュニティーを形成していく考え方で地域形成が進展した。

同市の生涯学習をリードしてきた藤波氏は、「生涯学習の基本は、個人が成長していく『人づくり』と、人と人とのふれあい、ネットワークにあります。市民と市民、市民と行政が強く結び付くことによって、さまざまな課題に適切に対処していく」というものです。そしてその中心は常に『市民』です。住み手を中心に考えてこそ、やすらぎのある都市が生まれると考えます。やすらぎに満ちた人間中心の都市は、住む人をほっとさせてくれるはずです。『ほつ、とする都市 やしお』は、八潮市のキャッチフレーズとなっています。『生涯学習では、飯は食えない』そういう批判を聞くことがあります。しかし、21世紀型産業は、学習なくしては生まれてくることも、生き残ることもできないのです」と述べられている。

八潮市は、埼玉県南東部にあって、2012年2月現在人口8万3千人弱の都市である。荒川を挟んで東京都葛飾区や足立区に隣接し、住民の多くは東京近郊で働く給与所得者である。映画『キューポラのある町』で有名な千住や焼き菓子のせんべいで知られる草加市にも近いが、これまで軌道の交通機関がなかった。ところが2005年に首都圏新都市鉄道会社によって「つくばエキスプレス」が開通して八潮駅が設置されたため、同市は秋葉原とつくば市とを結ぶ線上に位置することになった。勤労者の町というような表現が適切だと思える同市にとって、交通機関とのアクセスが可能になったということは悲願が叶ったということになろう。

八潮市の生涯学習については、同市の行政職員であり生涯学習研究者としても知られる松沢利行氏が1995年頃に提唱した「生涯学習まちづくり出前講座」で全国的に知られている。同市が住民の行政理解を進めるために、「届ける行政情報」という視点から取り組んだ試みであり、その後の日本の自治体に意識変革を起こしたとされる。行政による出前講座で有名な埼玉県八潮市であるが、1991（平成3）年に生涯学習都市宣言をしている。住民が住んで良かったと誇りが持て、快適で夢のあるまちづくりをスローガンにして、地域課題の解決に生

生涯学習の機能を生かすことによって市民が暮らしやすいまちづくりを標榜してきている。

同市の生涯学習施策の主なものを見ると、前述した「やしお生涯学習まちづくり出前講座」、「やしお生涯楽習館」の設置、学習情報提供システム「ほっ、とネット」の設置、生涯学習情報誌「はあとふるワンダーランド」の発行、情報収集ボランティアグループ「やしお探偵団」の活動などがある。2011年度のやしお生涯楽習館事業を見ても、フリーマーケット、山本學主演映画特別上映会、楽習館まつり、やしお楽習塾、サポートアーズパンク「微助人」、八潮市ベスト30ナビゲーター養成、生涯学習よろず相談などの事業が並ぶ。

八潮の場合もリーダーが市長であったり、市の幹部職員であったりするが、住民のニーズを鋭敏に捉えて施策を示している点で特筆される。そこには優れた広聴能力が存在するのであろうが、社会教育でいうところの広聴はステークホルダーである住民との関係性において成り立つものであり、PR（Public Relations）という行為に属するものであることを忘れてはならない。八潮市の生涯学習行政の優れているところは、「生涯学習まちづくり出前講座」のような広報活動と、行政職員による真摯な広聴活動の学習成果といえる。

6. 「生涯学習宣言都市亀岡」に見るまちづくり

亀岡市は京都府のほぼ中央部に位置し、北は京都府南丹市、東は京都市、南は大阪府高槻市及び茨木市、西は兵庫県篠山市、大阪府豊能郡の能勢町及び豊能町に接する。市域は225.31平方kmあり、地形は周囲を山に囲まれた盆地である。市の中央部を大堰川（保津川）が貫流し、京野菜や木炭などの燃料を筏で運ぶという交通や山陰方面に向かう山陰道が発達している。歴史をみると、奈良時代のものと思われる丹波国分寺跡があり、中世期には瀬戸内海文化圏と環日本海文化圏とが交流する交通の要衝として発展した。明智光秀が1577（天正5）年に織田信長の命により亀山城を築城したことから、近世以降の歴史が展開することになる。近世江戸時代には、心学の創始者の石田梅岩や京都画壇の丸山応挙らを輩出したことでも知られる。近代に入り、1869（明治2）年には地名も亀山から亀岡に改称された。現在は人口約95,000人の市として発展している。

事例として取り上げた亀岡市の生涯学習は、我が国の生涯学習の発展の中では極めてユニークなものであり、具体的には生涯学習の発想で総合行政のモデルを提示したことである。同市の生涯学習の発想は、あらゆる行政活動に学習概念を導入し、住民による行政サービ

スの要求を学習関心や学習要求のパラダイムに転換したという点で画期的である。

亀岡市が生涯学習都市を宣言したのは、1988年3月30日であった。西日本における市レベルの規模のまちでは初めての生涯学習都市宣言であり、その後の亀岡の歩みは、生涯学習まちづくりのあり方を示してきたといっても過言ではないだろう。

亀岡市が、全国に先駆けて市政の基本的コンセプトに生涯学習概念を導入したのは1980年代であり、そのことは地域形成の新しい方法論を提示したことになる。1965年には亀岡市民憲章を示すことによって市政の方向性を具体化し、1982年に「第一次亀岡市総合計画」を策定し、「緑と心のふれあう活力にみちた住みよいまち、亀岡」づくりを地域形成の基本方針としてきた。また、1988年に「亀岡生涯学習都市構想」を策定して、生涯学習都市構想（生涯学習のまちづくり）を示し、それは「生涯学習都市宣言」（1988年3月30日）につながる。宣言文をみると、「わたくしたち亀岡市民は、人間の尊重と地域社会の一員としての自覚のもと、常に、いま、何をなすべきかを問い合わせながら、生涯にわたり学び続け、自己を高め、連帯の絆を強めることにより、生きる喜びと明るく豊かなまちに住む喜びの持てる亀岡を目指し、ここに亀岡市を『生涯学習都市』とすることを宣言する」とある。抽象的な表現ではあるが、生涯学習社会の到来を宣言し、郷土亀岡における地域形成に対する市民意識の醸成に寄与する文章となっている。

1990年代に入ると、亀岡市で生涯学習政策の具体化が進展していることが各種の提言等の内容でも明らかとなる。1990年には「第二次亀岡市総合計画」が提言され、「豊かな緑と水を活かし、生涯学習により魅力と活力を生むまち・亀岡」とする緑園文化都市構想のもとに、「生涯学習を通じてまちづくりを進める」とする考え方方が市の基本的コンセプトとなった。亀岡市のすべてのセクションが生涯学習機能を持つことになったのである。

元亀岡市長の谷口義久氏が、同市の行政原理に生涯学習を導入したのも、行財政改革と総合行政の具現化が目的であったと思われる。2000年代の亀岡市の生涯学習政策として、第三次亀岡市総合計画が策定され、やがて「21世紀新10ヶ年計画」がスタートしている。

将来都市像として「聖なる水と 緑の奏でる 知恵の郷」というコンセプトを示しているが、新基本構想（2001年から2015年まで）のもとに新総合計画を実施している。新総合計画は、まちづくりの基本方向（市民の参画と共働、まちの資源と個性の活用、情報の行き交うまち）を示しているが、その具体化を図るために生涯学習

の機能の活用が取り上げられたといえよう。1999年10月には「新世紀における亀岡市の生涯学習推進についての指針」が亀岡市新世紀生涯学習構想懇話会によって答申され、2000年3月には「生涯学習推進基本計画」が策定された。

市民に向けて開かれた直接的な学習機会として、①「コレージュ・ド・カメオカ」、②「亀岡生涯学習市民大学」、③「丹波学トーキ」などがあり、「生涯学習かめおか財団」が1990年3月に設立されている。亀岡市の多種多様な生涯学習事業を実施していく上で核となっているのが1998年9月に完成し、4万平方メートルの敷地を有する亀岡市中央生涯学習センター「ガレリアかめおか」である。「情報交換ゾーン」「情報提供発信ゾーン」「学習活動ゾーン」「全世代交流ゾーン」「新産業振興ゾーン」「憩いと観光情報ゾーン」と「道の駅」などのゾーンが設置され、住民の生涯学習が機能的に実施できるように設計された。

これまで亀岡市の「生涯学習まちづくり」の政策の現状について述べてきたが、実際の生涯学習活動については、同市の生涯学習のリーダーとして献身的に実績を重ねてこられた佐藤理恵さんの報告があるので、それを参考していただきたい。

7. 「生涯学習まちづくりプラットフォーム」の形成

ところで、「生涯学習まちづくり」のフレームとはどのようなものだろうか。「生涯学習まちづくり」のフレームを考えることは、この概念の対象が誰であり、何を目的に、何をするのかという問い合わせに対する回答を明示することになる。基本的には行政と住民の協働を発展させた形の「生涯学習まちづくり」活動を指すのであり、それに学校教育、民間企業を加えた幅広い連携・協力から協働に至る産官学民のネットワークを意味する。ここで指摘しているネットワークとは、行政や住民に加えて大学や専門学校等の高等教育機関を中心とした学校教育機関や商工会やJCをはじめとする産業界や民間企業のそれぞれが主体となって形成する網の目状の連結組織をいう。連結の役割を果たしているのは公共サービスの提供である。

産・官・学・民という主体が相互に連結して公共サービスを提供することにより、四者の協働関係の構築に基づく「生涯学習まちづくりプラットフォーム」と名付けるべき地域形成支援システムの形成に対する期待なのである。行政と住民以外の主体として「学」と「産」の存在がある。「学」からの公共サービスの提供とは、大学が所有する知見の地域社会への提供であり、住民の生活

や要求、それに伴う学習需要や学習課題に対応できるような学問を地域形成に大学が提供することである。具体的には公開講座や社会人入学の実施等による知的財産の提供であり、住民との共同研究等の取組をいう。「産」からの公共サービスの提供とは、具体的には職業人のボランティア派遣、会費や基金の提供、寄付等の行為であり、掛川市のファンド・レイジングの例などもある。特に「産」に求められるのは会費や基金の提供である。住民活動の最重要課題に予算の問題があり、こうした問題こそ「産」が最も期待される部分である。勿論、知見や技術の提供、学習場所の提供といったサービスも期待できるため、「産」は積極的に住民活動を支援していく責任があることを考慮する必要がある。

「生涯学習まちづくりプラットフォーム」の具体化については、亀岡市が2002年以来実施してきた「生涯学習まちづくり支援事業」に原型が見られる。この事業は文部科学省の支援事業として始められたものであり、当初においては産官学民の四者協働の具現化を模索するものであったことを記しておきたい。

本稿では、わが国における先駆的な「生涯学習まちづくり」として以前から高く評価されている3つの都市を事例として取り上げた。3市はいずれも首長や行政の幹部職員がリーダーとして事業を牽引したという経緯があり、そのことから「行政主導のまちづくり」だという指摘もあるだろう。そういった評価も含めて、まちづくりのリーダーとは何かといった議論を重ねる必要がある。

今回の事例のリーダーの方々は、実際に住民活動の経験を重ねた経歴の持ち主である。行政と住民の双方の役割を十分に承知された方々が、「生涯学習まちづくり」という事業に立ち向かわれたということでもあり、そのことはまちづくりの手法からも明らかである。いずれの方も社会教育のノウハウを活用し、行政や民間との連携という生涯学習の視点からの実践であることが分かる。

まちづくりのリーダーとはどういう人が適しているのか、求められる能力や資質とはいかなるものなのか、また、そういう人を養成するにはどのような仕掛けが必要なのかを明らかにすることが今後の研究課題となる。幸い拙稿以外の原稿の他の執筆者がその当事者であるわけで、本報告書においても一定の回答は得られるものと考えている。そのことを確認して本稿を終えたい。(了)

参考文献

1. Knowles, M. S., Creating Lifelong Learning Communities (A Working Paper Prepared for the Unesco Institute for Education, 1983年)
2. 今西幸蔵『21世紀の宝・生涯学習』(憲標, 2001年)

3. 大西珠枝・榛村純一『まちづくりと生涯学習の交差点－掛川市教育長の2年9か月－』(ぎょうせい, 1996年)
 4. 藤波 彰『わたしの生涯楽習』(ビジネス教育出版社, 2000年)
 5. 松澤利行「ともに学びともに行動するまちづくり」(『生涯学習の施策と環境の総点検』日本生涯教育学会年報第18号, 1997年)

平成 23 年度 神戸学院大学人文学部研究推進費研究成果報告書
産官学民の生涯学習ネットワーク構築による地域形成の
推進方策の研究

2012 年 3 月発行（非売品）

編 集 神戸学院大学人文学部人文学科
今西 幸蔵（研究代表者）

発 行 神戸学院大学人文学部人文学科
今西幸蔵研究室
〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518
電話 078-974-1551

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13
電話 075-312-4010